

國學院大學學術情報リポジトリ

新聞紙面にあらわれたジェンダー：
第六回調査の量的分析を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 和子, 女性と新聞メディア研究会 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001163

新聞紙面にあらわれたジェンダー

——第六回調査の量的分析を中心に——

田 中 和 子
女性と新聞メディア研究会

はじめに

- 1 第六回調査結果の報告にあたって
- 2 調査・分析の方法

I 女性強調表現の動向

- 1 「女性冠詞」の使用によるジェンダーの強調
- 2 女性の性を含み込んだ職業語の使用によるジェンダーの強調
- 3 他者との関係で女性をあらわすことばの使用によるジェンダーの強調
- 4 女性であることが不必要に強調されるステレオタイプ表現

II 女性隠し表現の動向

- 5 女性の存在が新聞紙面のおもてから隠される表現

III ダブルスタンダード表現の動向

- 6 敬称の使い分けにみるダブルスタンダード表現
- 7 死亡記事の敬称の使い分けにみるダブルスタンダード表現

注

付録

はじめに

1 第六回調査結果の報告にあたって

女性と新聞メディア研究会が、ジェンダー視点からの新聞紙面の量的分析を開始したのは、今からおよそ三〇年前の一九八五年一〇月のことである。その年の四月に男女雇用機会均等法が施行され、女性の社会進出、とりわけ雇用労働の場への参入の機運が高まりつつあった。しかしながら、メディアが伝える女性の姿は、いまだ偏見に満ちたものであり、当時、「信頼性」に対する肯定的評価が、テレビの五九%を大きく上回る七三%にのぼっていた⁽¹⁾。新聞も、その例外ではなかった。

著者の一人は、すでに新聞における性差別表現の現状について論じていた⁽²⁾が、男女雇用機会均等法施行後も、その状況にさしたる変化は無いようにおもわれた。一九七五年の国際女性年以降の国連文書がたびたび指摘しているように、⁽³⁾メディアの提示する否定的な女性像は、人びとのジェンダー意識の形成に大きな影響を及ぼす。信頼性の高いメディアである新聞が女性と男性を公平に表現できているか否かは、日本社会におけるジェンダー関係を変革していくうえでも極めて重要な意味を持つ。

そこで女性と新聞メディア研究会は、新聞における女性と男性に対する表現のあり方を量的に探り、実証する研究を、上述のように男女雇用機会均等法施行後の一九八五年一〇月に開始し、以後五年ごとに(第二回目のみ六年後)新聞紙面にあらわれたジェンダー表現に関する「定点観測」を行ってきた⁽⁴⁾。今回はその六回目にあたる。

2 調査・分析の方法

(1) 調査の概要

今回の二〇一一年一〇月調査は、これまでどおり一〇月一日から一五日までの二五日間、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の全国紙三紙の朝刊および夕刊を対象に行った。新聞紙面を実際に読み、これまでの調査で一貫して用いてきた分類基準にそって語や文章に色つきマーカーを引き、コード番号を振る作業を行った上で、それらのコード番号と語または文章をExcelに入力し、集計を行った。

調査対象期間である一〇月一日(土曜日)から一五日(土曜日)までのうち、一〇日(月曜日)夕刊と一日(火曜日)朝刊は、休刊日のため、三紙とも発行されなかつたので、実際には、一紙あたり朝夕刊合わせて二六日分が調査対象となった。また、テレビ面、ラジオ面、投書欄、小説、川柳などの投稿は、これまでと同様に、分析対象から外した。ただし、第五回調査からは、テレビ面、ラジオ面、投書欄も、他の紙面と同じ基準で別個にカウントしており、それらの集計・分析結果に関しては、稿を改めて論じる予定である。

なお、本稿でいう「紙面」は、実際の新聞の「掲載面」を意味しない(もともと、紙面の名称は各紙で必ずしも同一ではない)。また本調査では、たとえばテレビ番組の解説記事を「文化・メディア」に、あるいはこの時期にレギュラー化していた東日本大震災の特集を「社会」に、それぞれ分類するといったことを行っている。このように、厳密には「掲載面」ではないものの、便宜上、本稿では以下、「紙面」と呼ぶこととし、全て「」つきで表記する。

分析軸となる、記事中の語・文章の分類コード表、および掲載面名称の分類表は、「付録」として本論末に掲載した。

日本 ABC 協会が公査した、二〇一一年における朝刊一号あたりの実販売部数平均は、朝日新聞七七一万部、毎日新聞三四二万部、読売新聞九九五万部であったが、これは、同年の全国の日あたり新聞総発行部数四八三五万部の四四%のシェアを占める。⁽⁵⁾新聞離れがいわれている昨今ではあるが、全国紙は今でも少なくない読者を獲得しているといえよう。

日本新聞協会による直近の調査によると、新聞を「読んでいる人」は七八%にのぼり、テレビの九七%ほどではないものの、高い接触率を維持している。ちなみに他メディアの接触率は、雑誌六二%、インターネット七〇%、ラジオ五〇%である。⁽⁶⁾

(2) 新聞ジェンダー表現の三類型と分析方法

これまで、新聞におけるジェンダー表現については、次の①～③で示した「女性強調」「女性隠し」「ダブルスタンダード表現」という三つの基本的類型を析出して分析軸をつくり、分析を行ってきた。今回も基本的にその方法を踏襲する。上に示した三つの基本類型は、さらに、アルファベットで示した具体的表現方法に分類される。

① 「女性強調」：女性としての存在や役割をもつばら強調し、女性であることを突出させて注目させる。

a 報道される女性の職業や肩書きの上に、当事者が女性であることを明示する「女性冠詞」がつけられる。

b 職業や家族との関連で、女性の役割が強調される。

c 女性に関するステレオタイプな表現によって、ことさらに女性であることが強調される。

② 「女性隠し」：女性の存在を紙面の背後に退かせ、女性の姿をみえなくさせる。

a 世帯や家族を、もつばら男性が代表する。

b 男性に付随ないしは従属させられた表現によって、女性の存在が隠されてしまう。

③ 「ダブルスタンダード表現」：女性を男性とは異なつた規準を用いて表現する。

a 女性について報道する際、もっぱら業績で扱うのではなく、他の基準を滑り込ませる。

b 女性と男性とで異なる敬称を使用する。

c 女性は名のみ、男性は姓または姓名で表現する。

この分析軸は八五年の第一回調査から変えておらず、毎回コーダーが手作業でカウントした量的データをもとに、新聞の女男に対する扱いの全体的傾向や各紙にみられる違い等を考察してきた。また、経年変化を追うことにより、新聞紙面上の女男に対する扱いの違いがどのような推移をたどっているかを観察してきたが、これは日本社会におけるジェンダー観がどのように変わってきたかをあらわす一つの指標ともなり得る。

3 二〇一一年一〇月の社会状況

(1) 二〇一一年三月一日の東日本大震災

二〇一一年は、何よりも「3・11東日本大震災」によって、日本人に長く記憶される年となった。三月一日二時四六分、三陸沖でマグニチュード九、最大震度七の大規模地震が発生。東北地方太平洋沿岸部を襲った巨大津波は甚大な被害をもたらし、死者・行方不明者一万八〇〇〇人超、建物の全壊・半壊は四〇万戸近くにのぼった。

同時に、地震と津波によって、東京電力福島第一原子力発電所が制御不能となり、一二日以降、炉心溶融による水素爆発が1号機と3号機で起こって広汎な地域が放射性物質に汚染された（また2号機での爆発音のち、4号機で火災が発生した）。これにより、原発二〇キロメートルから三〇キロメートル圏内の一〇万人におよぶ周辺自治体住民が長期的な避難を余儀なくされるといふ、未曾有の複合大災害となった。また、東京など都市部では、

「電力不足」の名のもと、「計画停電」体制が布かれ、鉄道の列車本数も間引かれ、公共機関、企業、学校に至るまで、「節電」と事業・授業などの縮小・短縮および混乱が、数カ月にわたって続いた。さらに、福島農産物や魚などの放射能汚染や、安全な食品にまで及んだ風評被害が、品不足や不買などの深刻な問題を引き起こした。さらに、余震がいつまでも続いたことも、人びとの不安を助長した。

地震発生時のテレビは、在京キー局をハブに生中継を行うとともに、ネットワーク局を通じて各地の津波映像を流し、政府発表を中継したほか、地震の原因や原発の安全性などについて活発な報道を行った。新聞も、朝日・毎日・読売の全国紙三紙をはじめ何紙かが、震災当日の夕方に号外を発行し、停電で発行が危ぶまれた岩手・宮城・福島三県の新聞協会加盟地元紙は、災害時の印刷提携を結んでいた同業他社の協力を得て、翌日の朝刊発行にこぎつけ、避難所をはじめテレビやラジオの電波が届かない被災地において、新聞メディアの力を発揮した。その後も各種マスメディアは、津波被害の状況、死者数・行方不明者数、被災者の避難・救出の状況を伝えたほか、福島第一原子力発電所の相次ぐ爆発、それによって関東地方にまで及んだ放射線量などに関する情報を、ほとんど全時間・全紙面を使って報道した。特に原発事故をめぐるのは、政府と東京電力との間で情報や認識の疎通・共有がうまくなされない中、事故対応が全くといっていいほどできない東京電力と政府への世間の批判が渦巻く一方、他方では、ことさらに「安全」を強調する政府や専門家が登場して、人びとの不信感を助長するなど、多くの混乱が生じた。

同時にこの災害は、インターネットによるコミュニケーション、スマートフォンやデジタルカメラによる映像記録といった、被災者を含む多くの一般人による新しいメディアツールを駆使した膨大な情報の発信と、双方向的なコミュニケーションが交わされたという点で、これまでにないメディア的特徴を有する災害となった。

ネット上では、被害状況、安否確認、救援状況、避難所情報、物資調達状況などさまざまな情報が飛び交い、マスメディアに登場する専門家に頼らず、自らの手で放射線量を測定して情報を発信する市民らが出現したほか、おびただしい量のつぶやき、悲しみや怒りのことば、激励、写真、動画などが流通し、さらには少なからぬデマや風評も流れた。中でも、一般の人びとが記録した津波映像は、多くのテレビ局で使われ、プロだけではなく、誰もが記録者・発信者になれる時代であることをまざまざと知らしめた。そして後には、一般人が記録した映像、YouTube に投稿された映像、ネット上で交わされた Twitter のことば、スマートホンや自動車のナビなどに備わっている GPS 機能をもとに集積されたビッグデータなどが、災害時における人びとの行動の解析に使われることになる。本調査の研究対象である朝日・毎日・読売の全国紙三紙も、地震発生翌日の三月一二日朝刊より、大々的な震災報道を行った。

こういった社会的な危機の際には、メディアへの接触度が増えることは想像に難くないが、新聞に対する評価は、上がる傾向がみられるようである。日本新聞協会によるメディア接触・評価に関する調査によると、「情報(7)が詳しい」という特性を有するメディアとして、各種メディアのうち新聞があげられた比率は、〇九年調査では三〇・五%だったのに対し、震災のあった二〇一一年一月に行われた調査では三五・五%へと増え、また、「情報の信頼性が高い」メディアとして新聞があげられた比率は、〇九年に三九・五%だったものが、一一年には四五・一%へと増加している。これら二特性に関し、NHKテレビは、「情報が詳しい」については二五・八%から二六・四%に、「情報の信頼性が高い」に関しては四三・三%から四六・六%へと、ともに微増するにとどまった。また、「震災後の新聞の印象・評価」を訊ねたところ、「新聞は地域と密着していると感じた」という値が、東北六県の平均で七六・九%に達しており（全国平均は六五・二%）、あらためて新聞が、非常時の地元メディアとして

必要とされていることが浮き彫りになった。

(2) その他の二〇一一年のできごと

次に、本研究の調査年である二〇一一年について、3・11 東日本大震災以外のできごとについて振り返っておく。当時の政府は、二〇〇九年九月から自民党政権に取って替わった民主党政権において、前年の一〇年六月に総理となった菅直人首相が、一一年一月から第二次改造内閣を率いていた。三月の東日本大震災の混乱がさめやらぬ中、四月には都道府県知事をはじめとする統一地方選挙が行われ（東北地方は延期）、五月には菅首相が、東海地震に対する対策が不十分との理由により、首都圏に近い静岡・浜岡原子力発電所の稼働中止を、中部電力に対して要請するできごとなどがあつた。七月、サッカー FIFA 女子ワールドカップで日本女子代表が優勝、同月には地上波アナログ放送が地上デジタル放送に移行した。また八月末には、菅首相の退陣に伴って野田佳彦が首相に就任したほか、一月の大阪市長選挙で大阪維新の会の橋下徹代表が当選した。そして、年末恒例の京都・清水寺が発表する「今年の漢字」は「絆」であつた。

なお、調査期間とは直接関係のない翌年の話になるが、二〇一二年六月に野田首相が、全国で停止していた原子力発電所のうち、大飯原発を再稼働させたため、首相官邸を取り囲む大きな反対運動がわき起こつた。そして、同年末の一二月に行われた衆議院解散による総選挙において、民主党は大敗を喫し、政権を再び自民党に明け渡すことになった。後任には、〇六年より一年間総理を務めた安倍晋三元首相が返り咲いて、二度目の総理の座に就くこととなり、現在に至っている。

第六回目の調査時期にあたる二〇一一年一〇月前半のできごととしては、一〇月五日に米国アップル社の創業者スティーブ・ジョブスが死去し、各紙が一面で大きくとり上げた。六日には、政治資金規正法違反の罪で、檢察審査

会によって強制起訴された小沢一郎元民主党代表に対する初公判が開かれた(後に無罪)。七日、ノーベル平和賞が発表され、リベリアのエレン・サーリーフ大統領、リベリアの平和運動家リーマ・ボウイー、イエメンの人権活動家ワタックル・カウマンの三人の女性が受賞した。また、一五日からは新聞週間が始まり、各紙は、多くのページを割いて3・11についての報道を検証する特集を組んだ。

(3) 調査時期の3・11東日本大震災関連記事

一〇月一日(土曜日)の各紙をみると、朝日の一面右肩トップの見出しは「復興増税 国民に要請」、左肩は福島第一原発による放射線被害地域に関する「避難準備区域を解除」の見出し、二面はそれを受けて「もとの暮らしいつ」、三面は「ストロンチウム 20キロ圏・北西 高め」「プルトニウム 敷地外で初の検出」という見出しの記事であった。毎日の一面右肩トップは「避難準備区域を解除」の見出し、一面中ほどに「飯館でプルトニウム」の見出し、三面は「帰還完了へ道険しく」という見出しの記事であった。読売の一面右肩トップは、同じく「避難準備区域を解除」という見出し、左肩は「電力維新 原発復権の道」という短期連載のシリーズ記事、三面が「地域再建へ除染カギ」という見出しの記事であった。3・11から半年以上経っても、依然として3・11関連の記事が一面から政治面までを覆っていたことがみて取れる。

また各紙が、3・11関連のレギュラーページやコーナーを設けていたこともこの時期の大きな特徴である。朝日は、社会面に「いま 伝えたい」「被災地から」(日曜)という一ページもの、「南三陸日記」(火曜)、「石巻日記」(水曜)、「南相馬日記」(木曜)、「宮古日記」(金曜)、「大槌日記」(土曜)という日替わりの囲み記事を掲載した。このほかにも、朝刊では「プロメテウスの罠」、夕刊では「原発とメディア」という長期連載が行われていた。毎日、社会面の一ページを使って「希望新聞」を毎日掲載し、「サポート情報」「声 被災者から」「ニーズ情報」

などの情報を載せた。また、火曜から土曜までの紙面には、「三陸物語」シリーズを掲載した。読売も社会面の 1 ページを全面的に使って「東日本大震災 明日への掲示板」を設置し、「ふるさとを離れて」(日曜・月曜)、「被災地日記」(火曜から土曜) というコーナーを設けたほか、「〇日の放射線量」という東日本と福島島の放射線量地図を毎日掲載した。また、第二社会面には、不定期で、「声援 復興めざして」という有名人のインタビューを囲み記事で載せていた。

これらのほかにも、各紙は折にふれて 3・11 のドキュメンタリー記事や検証記事を大きなスペースを使って紙面展開していた。これらの、例年とは異なった性格の記事が、今回の調査結果に多少の影響をもたらしている可能性が考えられる。

I 女性強調表現の動向

1 「女性冠詞」の使用によるジェンダーの強調

(1) 女性冠詞「女」「女性」「女子」「女流」のつく語

新聞記事の中でみられる女性と男性に関する非対等な表現の典型として、男性を暗黙の標準とみなし、女性に関して報道する際には、その職業や社会的役割に女性であることを表示する「女性冠詞」を冠する表現をあげることができる。すなわち、男性について報道する際には、「会社員」の誰それと記すところを、女性には「女性会社員」の誰それと、「女性冠詞」をつけて、女性であることを「徴づける」書き方をするのである。

このような「女性冠詞」表現には、「女」がつくもの、「女性」がつくもの、「女子」がつくもの、そして「女流」

表1 女性冠詞“女”のつくことば

(単位:件)

順位		朝	日	毎	日	読	売	合	計
1	女優	25		20		28		73	
2	女王	14		12		12		38	
3	女兒	13		20		4		37	
4	女神					3		3	
	女主人					2	1	3	
	女生徒	1		2				3	
7	女役					2		2	
8	女絵描き	1						1	
	女医					1		1	
	女帝						1	1	
	女学生						1	1	
合計		54		60		49		163	

がつくものの四種類がある。まず最初に、これらの女性冠詞が頭につく語の出現頻度をカウントし、女性強調の度合いをみてみよう。

ある表現の出現頻度をはかる方法には、「延べ語数」を用いる二つの方法がある。本研究では、読者の眼にふれる語や文章の頻度(件数)と、重複も含め登場した語の全語数を数える「延べ語数」を用いる二つの方法がある。本研究では、読者の眼にふれる語や文章の頻度(件数)

が指標になるとの仮説にもとづき、「実際に紙面に出て来た数」すなわち「延べ語数」のデータをもとに考察する。

まず最初に、*女*がかんむりにつく語を示したのが表1である。期間中、朝日が五四件、毎日が六〇件、読売が四九件、三紙合計では一六三件みられた。出現頻度が最も高かった語は「女優」で、朝日が二五件、毎日が二〇件、読売が二八件、合計七三件であった。次いで「女王」が、朝日一四件、毎日一二件、読売一二件の合計三八件カウントされた。続いて「女兒」が、朝日一三件、毎日二〇件、読売が四件の合計三七件みられ、それ以下の順位の*女*冠詞つきの語は、三紙を合計しても三件以下の頻度であった。「女優」は、〇六年の第五回調査を除いて毎回一位である。「そこにスターがいた 松竹東京撮影所 蒲田の女王すみ子」(朝日・一五日)という記事で「女優」という語が大量に使われているように、映画やテレビ、演劇関係の記事ではごく当たり前のようによく使用されていて、一向に減る気配がない。

「女王」を使用した実際の記事としては、たとえばフィギュアスケート・ジャパンオープンに際して、「『答えを』迷う女王」との見出しを掲げ、「休みなく銀盤を舞い続けた女王が、人生の転機を迎えている」と、世界選手権優勝者である安藤美姫について報じた記事（毎日・二日）や、「賞金女王」ということばを用いて、ゴルフの「富士通レディース」について報じる記事（読売・一五日）などがあげられる。このように、「女王」や「賞金女王」は、スポーツ面では常套句となっている。

毎日で「女兒」が二〇件と多めとなっているのは、たとえば、東日本大震災を扱った常設紙面「希望新聞」の「伝言板」というコーナーで、自転車の「女兒用」や「女兒用ブレザースーツ」を送るという情報のように、「女兒用」という語がいくつか使われていたことが理由としてあげられる。二日の教育面で特集されている「ランドセル大型主流に」という見出しの記事にも「女兒」という語が二件出てくる。記事の内容は、「『男は黒、女は赤』という常識は過去のもので、女兒用はカラフルだ。（略）黒か紺程度しか選択肢のない男の子は関心が薄く、『女の子は自分で選ぶ』と担当の大澤由香係長。」というものだ。また、「女兒」が二件出てくる「教育で女性に力を」（六日夕刊）という記事は、インドにおける児童婚と多産、その原因となっている貧困について何枚もの写真と記事とで問題提起を行う記事である。ここでは、平行表現として「男児」ということばが対になって使われている。

これら「女」冠詞のつく語の種類すなわち「異なり語数」は、全部で一一種類となった。

「女性冠詞」の第二番目として、「女性」がかんむりにつく語を示したのが表 2 である。朝日は四六件、毎日ばかり多く七二件、読売は四五件で、合計すると一六三件となった。「女性」冠詞の語で一番多かったのは「女性職員」の九件であったが、読売が最多の五件、朝日・毎日ともに二件であった。二番目に多いのが「女性客」と「女性社員」のそれぞれ八件であり、「女性客」に関しては朝日・読売で各四件ずつみられ、毎日ではゼロ件であ

表2 女性冠詞“女性”のつくことば

(単位:件)

順位		朝	日	毎	日	読	売	合	計
1	女性職員	2		2		5		9	
2	女性客	4				4		8	
	女性社員	2		2		4		8	
4	女性会社員	4		2		1		7	
5	女性首相	6						6	
	女性記者			5		1		6	
7	女性活動家	2		1		2		5	
	女性作家	1		2		2		5	
	女性大統領	1		4				5	
10	女性アスリート	2		2				4	
	女性従業員			4				4	
12	女性教師	3						3	
	女性店主	2		1				3	
	女性ペア			3				3	
	女性客			3				3	
	女性患者			3				3	
	女性国会議員			2		1		3	
18	女性グループ	1		1				2	
	女性医師	1				1		2	
	女性民主活動家			2				2	
	女性社長			2				2	
	女性候補			2				2	
	女性鑑識官			2				2	
	女性観光客			2				2	
	女性科学者			2				2	
	女性ファン			1		1		2	
	女性店員			1		1		2	
	女性画家			1		1		2	
	女性患者					2		2	
	30	女性ボランティア	1						1
女性プロガー		1						1	
女性バンド		1						1	
女性版画家		1						1	
女性花火師		1						1	
女性登山者		1						1	
女性創設者		1						1	
女性人権活動家		1						1	
女性乗務員		1						1	
女性古書店主		1						1	
女性教諭		1						1	
女性管理職		1						1	

「女性大統領」各五件などが続いた。つた。三番目に多いのは「女性会社員」の七件、以下「女性首相」「女性記者」各六件、「女性活動家」「女性作家」各紙別にみると、順位や最多のことばにやや違いがみられ、たとえば朝日は「女性首相」が六件で一位なのに対し、毎日の一位は「女性記者」の五件、読売では右記のように「女性職員」の五件が最多となっている。朝日で

「女性首相」が六件とやや目立つのは、三日にデンマークでヘレン・トーニングシュミット民主党党首が首相に就き、四日夕刊、六日の国際面などで何度か報じられたからである。毎日における「女性記者」の五件は、イラン当局に拘束されていた記者についてのインタビュ記事(五日)、○六年にロシアのプーチン政権を批判した記者が殺害されて五年経つことを報じた記事(八日夕刊)のほか、サウジアラビアで活躍する記者(三日)、リビアで活

順位		朝 日	毎 日	読 売	合 計	
30	女性患者	1			1	
	女性外相	1			1	
	女性応援リーダー	1			1	
	女性労働者		1		1	
	女性リーダー		1		1	
	女性弁護士		1		1	
	女性平和活動家		1		1	
	女性兵士		1		1	
	女性副編集長		1		1	
	女性俳人		1		1	
	女性パーソナリティ		1		1	
	女性読者		1		1	
	女性デュオ		1		1	
	女性政治家・活動家		1		1	
	女性スイマー		1		1	
	女性写真師		1		1	
	女性社会活動家		1		1	
	女性ジャーナリスト		1		1	
	女性ケアマネジャー		1		1	
	女性教員		1		1	
	女性官僚		1		1	
	女性監督		1		1	
	女性会社役員		1		1	
	女性民選大統領				1	1
	女性マネージャー				1	1
	女性ボーカル				1	1
	女性平和運動家				1	1
	女性デザイナー				1	1
	女性調理員				1	1
	女性ソリスト				1	1
女性スタッフ				1	1	
女性主任調理員				1	1	
女性劇作家				1	1	
女性警察官				1	1	
女性経営者				1	1	
女性客室乗務員				1	1	
女性議員				1	1	
女性環境活動家				1	1	
女性閣僚				1	1	
女性運転手				1	1	
女性アイドルグループ				1	1	
女性アーティスト				1	1	
合 計		46	72	45	163	

表3 女性冠詞“女子”のつくことば

(単位：件)

順位		朝	日	毎	日	読	売	合	計
1	女子学生	5		13					18
2	女子生徒	3		6		6			15
3	女子大生	4		6		3			13
4	女子高校生	2		7					9
5	女子高生	3				4			7
6	女子中高生	1				2			3
7	女子ゴルファー	1		1					2
	女子アナ			2					2
	女子部員					2			2
	女子中学生	1				1			2
12	女子選手			1		1			2
	女子小学生			1					1
	女子サッカー選手					1			1
	女子囲碁部員					1			1
合計		20		37		21			78

躍する記者（四日）など、海外の女性のジャーナリストが比較的多く取り上げられていたことに帰因している。読売が目立った「女性職員」五件に関しては、3・11時にテレビによく登場した原子力安全・保安院の広報担当が不適切な女性関係により処分されたことに関連して、相手方の女性を「女性職員」と記載していた記事（一日）のほか、愛知県のバス転落事故の被害者にも使用されていた（七日夕刊）事例があげられる。

また、先に述べたように、この年のノーベル平和賞が平和や人權活動に対して功績のあった女性たちに与えられたこともあって、「女性大統領」「女性活動家」「女性平和活動家」「女性民主活動家」「女性人權活動家」「女性平和運動家」といった、さまざまな「女性」冠詞つきの語が各紙に並ぶこととなった。

これら「女性」冠詞のつく語の種類（異なり語数）は、全部で八三種類に及んだ。

「女性冠詞」で第三番目に出現頻度が高かった、「女子」がかわりにつく語は、表3に示したように、朝日が二〇件、毎日が三七件、読売が二一件の、合計七八件が数えられた。そのうち最も出現頻度が高かった語は「女子学生」で、朝日五件、毎日一三件、読売ゼロ件の合計一八件であった。毎日の夕刊スポーツ面での「エビさんの食べるスポーツ」という立命館大学教員の連載署名コラムや、週一回夕刊掲載の学生記者による「キャンパー」と

表 4 女性冠詞「女流」のつくことば

(単位：件)

順位		朝 日	毎 日	読 売	合 計
1	女流作家			1	1
	女流唄方		1		1
	女流画家			1	1
合 計		0	1	2	3

いう紙面で「女子学生」が使われていた影響が大きい。書き手はいずれも女性なのだが、女性自身が「女性であること」を強調する表現、すなわち自らの性別を有徴化することばを無自覚的・無批判的に使ってしまった点にも、「女性冠詞」がなかなか減らない一因があるのかもしれない。また、事故に巻き込まれた女性(毎日・八日)、六〇年安保で死亡した学生・樺美智子の遺稿集復刻に関する記事(毎日・八日夕刊)の中などで「女子学生」が複数回使用されていた。

二番目に多かった「女子生徒」は、朝日で三件、毎日で六件、読売で六件の合計一五件が数えられ、「部活中の事故で顧問を書類送検」(毎日、一四日)、「高一転落し重傷」(読売、三日夕刊)といった見出しの記事の中などで用いられていた。また、三番目に多い「女子大生」と四番目の「女子高校生」は、ともに毎日で多くみられたが、それぞれ、前者は「わせつ容疑慶大生を逮捕」(二日)、後者は「殺人未遂高3逮捕」(六日)との見出しをつけた記事の中で、被害者として記述されていた。男性の容疑者が、無徴の存在として無冠詞のまま記述されているのに対し、彼女たちは、有徴の被害者として、女性であることを強調される形で表現されていた。なお、例年では「女子高校生」「女子高生」が上位にあがるのだが、今回この二つは四位と五位で、やや減じた恰好となっている。

これらを含め、「女子」のつく語は、合計一四種類みられた。

第四番目は「女流」である。表 4 に示されているように、毎日で一件、読売で二件みられ、合計三件、三種類がカウントされたが、「女流唄方」は毎日の訃報欄で、「女流作家」は読売のムーミンの作者を「フィンランドの女流作家トーベ・ヤンソン」(七日夕刊)と紹介

表5 男性冠詞「男」のつくことば

(単位:件)

順位		朝 日	毎 日	読 売	合 計
1	男児	4	17	11	32
2	男声合唱団			2	2
3	男神		1		1
	男優			1	1
合 計		4	18	14	36

している記事で、また、「女流画家」は同じく読売の展覧会を案内する情報欄において「片岡球子、三岸節子ら女流画家の名品を一堂に」(二一日夕刊)のように、それぞれ使われていた。

このほかに、「女流棋士」「女流本因坊」という「女流」がかんむりにつく語がみられたが、これらは伝統技能などの団体が与える固有名詞としての技能・職能名のため、カウント対象からは除外してある。しかしながら、本調査の過去の論文でもしばしばふれてきたように、「男流」という対語はなく、「伝統的」な技能・職能名称とはいえない女性を亜流扱いするトーンの強い名称であることから、団体としても再考すべき時に来ているのではないだろうか。⁽⁸⁾

(2) 男性冠詞「男」「男性」「男子」のつく語

では、男性が「男性冠詞」によって男であることを強調される語はどれほどあるのだろうか。「男性冠詞」表現の主要なものは、「男」がつくもの、「男性」がつくもの、「男子」がつくものの三種類である。これらの集計結果をみてみよう。

まず、「男」がかんむりにつく語を示したのが表5である。朝日四件、毎日一八件、読売一四件、合計で三六件が数えられ、異なり語数は四種類であった。「女」冠詞の異なり語数一一種類と比較すると半数以下である。「男」冠詞のうち最も多用されていた語は「男児」で、朝日で四件、毎日で一七件、読売で一一件、合計三二件が数えられた。

毎日で「男児」が多かった理由としては、「里親家庭 4分の1不和で解除」(五日)という見出しの、児童養護施設に関する記事中におけるルポルタージュ部分で、「男児」が八件使用されていたことが大きい。また、先にも言及した東日本大震災に関する常設紙面

表 6 男性冠詞“男性”のつくことば

(単位：件)

順位		朝	日	毎	日	読	売	合	計
1	男性社員	4		3		5		12	
2	男性会社員	1		2		6		9	
3	男性教諭	1		4		3		8	
4	男性秘書	5						5	
	男性運転手	1		1		3		5	
6	男性客	1		2		1		4	
7	男性アイドルグループ					3		3	
	男性内科医			1		2		3	
9	男性警備員	2						2	
	男性選手	2						2	
	男性受刑者					2		2	
	男性警備員			1		1		2	
13	男性教師	1						1	
	男性作業員	1						1	
	男性上司	1						1	
	男性職員	1						1	
	男性政務秘書官	1						1	
	男性店員	1						1	
	男性入国警備官	1						1	
	男性カメラマン			1				1	
	男性機長			1				1	
	男性組員			1				1	

「希望新聞」の「伝言板」欄で、「男児」が用いられていた(四日)。この、「子ども用自転車あります」という小見出しの説明文には、「男児用は黒と赤が基調のマウンテンバイク、女兒用は青が基調でサンリオのキャラクター『シナモン』の絵柄付きです」と記されているが、「マウンテンバイク」と「サンリオのキャラクター」という対比は、子ども用の自転車にも明瞭なジェンダーの区分けが存在していることを示している。

読売の「男児」の多さは、五日夕刊の「柔道教室指導者に罰金100万」という見出しの記事において五件、八日の「誤って牛乳混ぜる 給食でアレルギー」という見出しの記事において四件、それぞれ登場していることが原因となっている。

次に、男性ががかんむりにつく語を示した表6をみると、朝日二四件、毎日二八件、読売三九件、合計九一件の使用頻度で、異なり語数は四六種類であった。その内訳は、第一位が「男性社員」で、朝日四件、毎日三件、読売五件の合計一二件であった。続く第二位の「男性会社員」は、朝日一件、毎日二件、読売六件の合計九件で、第三位の

順位		朝 日	毎 日	読 売	合 計
	男性芸人		1		1
	男性指導者		1		1
	男性受刑者		1		1
	男性准教授		1		1
	男性巡查長		1		1
	男性巡查部長		1		1
	男性スタッフ		1		1
	男性内科医師		1		1
	男性ヘルパー		1		1
	男性保護者		1		1
	男性ランナー		1		1
	男性アルバイト店員			1	1
	男性課長補佐			1	1
	男性記者			1	1
	男性経営者			1	1
	男性競輪選手			1	1
	男性作業員			1	1
	男性私設秘書			1	1
	男性獣医師			1	1
	男性主任教諭			1	1
	男性主任航空管制官			1	1
	男性巡查長			1	1
	男性弁護士			1	1
	男性漫画家			1	1
	合 計	24	28	39	91

「男性教諭」は、朝日一件、毎日四件、読売三件の合計八件であった。以下「男性秘書」「男性運転手」「男性客」などが続くが、いずれもわずかである。

読売で五件みられた「男性社員」は、そのうちの四件が一日夕刊の、小沢一郎民主党元代表の公判に関する社会面記事において用いられていた。また同紙の「男性会社員」六件については、特筆すべき記事はみられなかった。

「男子」がかんむりにつく語は表7に掲げたとおりである。朝日一件、毎日三件、読売九件の合計三三件が数えられ、異なり語数は九種類であった。内訳は「男子

生徒」が、朝日五件、毎日九件、読売四件の合計一八件と最も多く、次いで「男子学生」が、朝日三件、読売一件の合計四件で、以下はいずれも合計二件以下にとどまっている。「男子生徒」は、朝日「高1水死させた疑い少年2人を逮捕」（二三日夕刊）で二件、毎日「ひったくり容疑 少年ら3人逮捕」（七日）で二件、「水戸・高1水死『川に突き落とされた』（二三日）で二件といったように、事件報道の中で使われていた。「男流」がかんむりに

表 7 男性冠詞“男子”のつくことば

(単位：件)

順位		朝 日	毎 日	読 売	合 計
1	男子生徒	5	9	4	18
2	男子学生	3		1	4
3	男子高校生		2		2
	男子中学生			2	2
	男子選手	1		1	2
	男子児童		1	1	2
7	男子社員	1			1
	男子プロ	1			1
	男子タレント		1		1
合 計		11	13	9	33

(4) 性別冠詞の紙面別傾向

次に、新聞記事が掲載されている紙面別にみた場合、各紙面でどのような冠詞表現が使われる傾向にあるのかを三紙合計で示したのが、女性冠詞の紙面別掲載頻度を示した表 8 と男性冠詞の紙面別掲載頻度を示した表 9 である。ここでいう「掲載紙面」とは、冒頭の分析方法のところで既述したように、実際の新聞の「面名称」と必ずし

つくことばは皆無であった。

(3) 性別冠詞の各紙別傾向

これまでの各種女性冠詞を新聞別に示した表 1 ～ 表 4、各種男性冠詞を新聞別に示した表 5 ～ 表 7 をもとに、新聞ごとの女性冠詞・男性冠詞の内訳を示したものが、グラフ 1 である。

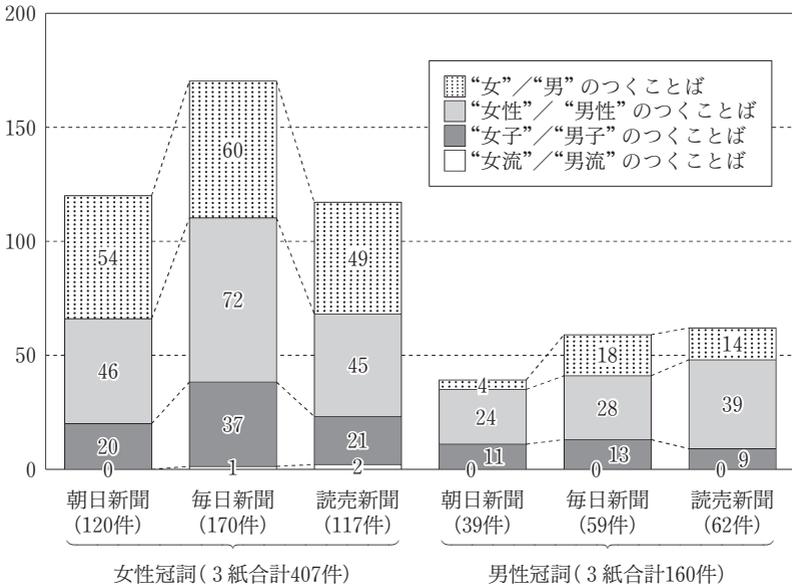
女性冠詞については、四種類の冠詞の合計で、朝日が一二〇件、毎日が一七〇件、読売が一一七件と、三紙の中では毎日の使用頻度が最も高かった。毎日は、「女」、「女性」、「女子」の各冠詞の使用頻度がいずれも他紙より多く使われているとともに、中でも「女性」がかんむりにつくことばが他紙に比べて三〇件近く多くなっており、やや目立っている。

男性冠詞の、三種類を合計した数は、朝日が三九件と最も少なく、毎日が五九件、読売が六二件となっている。三紙ともに「男性」がかんむりにつくことばの使用が多い中で、特に読売で「男性」冠詞が他紙よりも一〇件ほど多くなっている。

も一致するわけではなく、本研究会が朝日・毎日・読売三新聞に共通する紙面名をコード化し、分類したものである。また、テレビ番組の解説記事は「文化・メディア」に、東日本大震災の特集は「社会」に、それぞれ分類してある。本論では共通紙面名を「紙面」と呼び、全て「」で表記している。

まず、表8にみるように、「女」がかんむりにつく語の使用は、「文化・メディア」で三紙合計五四件と最も多く、二位の「社会」での四二件を加えると、「女」冠詞総数一六三件のうちの約六割がこの両紙面で使われている。

「文化・メディア」で数多く使われていることばは「女優」で、三紙合計で四〇件にのぼる。「社会」では、「女児」が多く使われており、三紙合計で二九件に達した。また、「スポーツ」で「女」冠詞が二八件みられたのも特徴的である。中でも、先に例としてあげたように「女王」がよく使われており、二三件に達した。



グラフ1 各紙別女性冠詞・男性冠詞の内訳 (単位: 件)

表 8 掲載面別女性冠詞内訳 (3 紙合計)

(単位: 件)

	1 面	総合・政治	国際	経済	科学	教育	生活	文化・メディア	地域	スポーツ	社会	合計
“女” のつくことば	1	12	5			6	3	54	12	28	42	163
“女性” のつくことば	9	22	32	10		3	5	32	7	5	38	163
“女子” のつくことば	2	4	7			3		17	9	8	28	78
“女流” のつくことば								2			1	3
合 計	12	38	44	10		12	8	105	28	41	109	407

表 9 掲載面別男性冠詞内訳 (3 紙合計)

(単位: 件)

	1 面	総合・政治	国際	経済	科学	教育	生活	文化・メディア	地域	スポーツ	社会	合計
“男” のつくことば		1	2				1	4	4		24	36
“男性” のつくことば		6	2	2		1		7	13	2	58	91
“男子” のつくことば			1			2	1	2	11	3	13	33
“男流” のつくことば												
合 計		7	5	2		3	2	13	28	5	95	160

“女性” がかんむりにつく語は「社会」の三八件に、「文化・メディア」と「国際」の各三二件が続く。また「総合・政治」にも二二件登場し、「国際」「総合・政治」以外の紙面では、「1面」で九件、「経済」で一〇件の“女性”冠詞がみられた。

“女子” がつく語は、「社会」の二八件を筆頭に「文化・メディア」でも一七件みられたのが特徴的である。「社会」では、「女子生徒」が三紙合計で八件、「女子学生」が七件みられ、「文化・メディア」では「女子高生」「女子高校生」が合わせて七件、「女子大生」の四件などが目立っている。

“女流” がつく語に関しては、「文化・メディア」に二件、「社会」に一件が掲載されている。

次に、表 9 により“男” がかんむりにつく語をみると、全三六件中六割の二四件が「社会」において使用されていた。これには毎日と読売の「社会」で「男児」が多用されていたことが関係しており、三紙合計で二二件に達した。

“男性” のつく語は、九一件中六割の五八件が“男”冠詞同様に「社会」において用いられているが、このほか、「地域」「文化・メディア」「総合・政治」でもみられた。「社会」で比較的登場するこ

との多かった「男性」冠詞付きの語は、「男性社員」の三紙八件、「男性会社員」の七件であった。

「男子」のつく語は、「社会」と「地域」でそれぞれ一三件、一一件と目立っており、特に「男子生徒」が、「社会」で一〇件、「地域」で八件登場した。これは、既述のように、男の生徒による犯罪がこれらの面で報じられたことによる。

以上でみてきたように、総じて、女性冠詞は、「社会」のほか、文化面、レジャー情報、芸能、番組特集などを含む「文化・メディア」に多く出現しているが、「総合・政治」「国際」「スポーツ」でも用いられている。男性の登場が当然視されているこれらの紙面分野にあつて、女性の登場や行動が「特異なもの」としてみられ、扱われるからであろう。一方、それに対して、男性冠詞は、主に「社会」に登場し、次いで「地域」でみられる、という違いがある。

さらに、紙面のうちの「一面」「総合・政治」「国際」「経済」「科学」を「硬派系」、「教育」「生活」「文化・メディア」「地域」「スポーツ」を「軟派系」、「社会」を「社会系」と大きく三つにくくって、各紙面への性別冠詞の出現頻度をみてみよう。「硬派」「軟派」とは、新聞社内の「業界用語」で、政治・経済・国際系の面が「硬派面」、社会面も含めたそれ以外の面が「軟派面」と呼びならわされている。今回の調査では、「社会」に分類されるウェイトが高かったため、通例「軟派面」に入れられる社会面を、「社会系」として独立させて三つのジャンルに分けることにした。

その結果、女性冠詞の出現頻度は、「硬派系」一〇四件、二五・六%、「軟派系」一九四件、四七・六%、「社会系」一〇九件、二六・八%となった。その中で、いわゆる「軟派系」および「社会系」の面では「女」がかんむりにつけられる傾向が、「硬派系」の面においては「女性」がかんむりにつけられる傾向がみられる。中でも「硬派

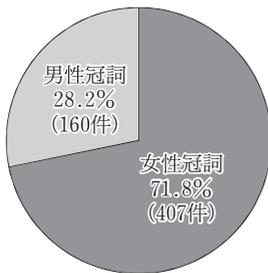
系”に“女性”冠詞が多いのは、「女性首相」「女性大統領」「女性〇〇活動家」といった人物が登場したからである。

一方、男性冠詞は“硬派系”で二四件、八・八%、“社会系”で五一件、三一・九%、“社会系”で九五件、五九・三%使用されていた。最も多い“社会系”では、“男性”がかんむりにつけられる語が多く、「男性秘書」「男性社員」が各五件みられた。いずれも登場人物が匿名で扱われている記事であり、名が明示されない場合は職業名に性別冠詞がつけられるという、ジェンダーが人物を表現するための第一の指標の機能を果たしていることがわかる。このように、女性は男性よりも“硬派系”で性を有徴化されて取りあげられやすく、男性は“社会系”で性が有徴化される傾向がみられる。

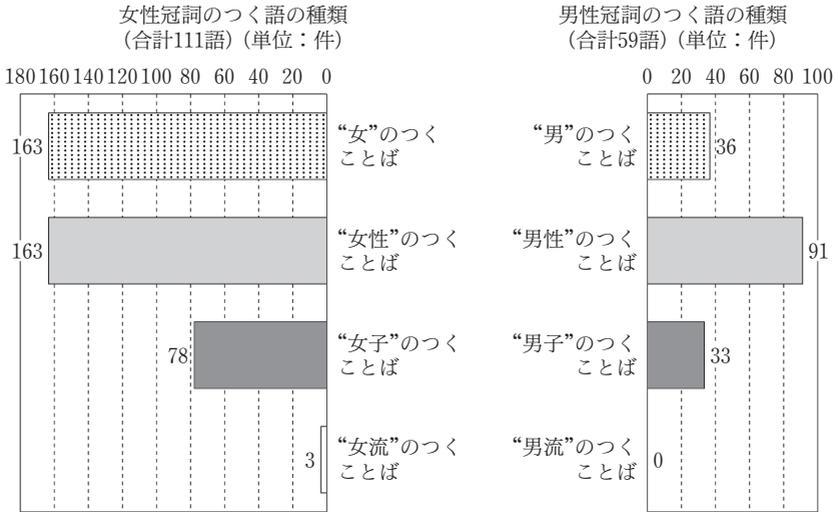
(5) 性別冠詞の女男別比率と頻度の違い

女性冠詞の三紙合計四〇七件と男性冠詞の三紙合計一六〇件の合計五六七件を一〇〇%として、女男別内訳を示したものがグラフ2である。全性別冠詞のうち、女性冠詞が七一・八%を占めているのに対し、男性冠詞は二八・二%と、女男比は三対一であり、女性冠詞の方が頻繁に使用されていることは明らかである。

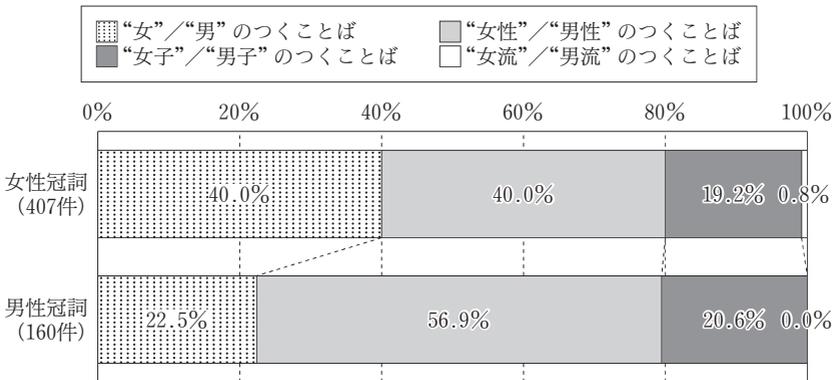
次に、四つの冠詞別の使用頻度を、女男別に左右に配置して比較したのがグラフ3であり、またその各冠詞別比率を女男別に示して比較したものがグラフ4である。グラフ3にみるように、“女”のつくことばと“女性”のつくことばはともに一六三件で、グラフ4にみるように、女性冠詞表現のそれぞれ四割



グラフ2 女性冠詞と男性冠詞の比率 (3紙合計567件)



グラフ3 女性冠詞・男性冠詞の種類 (3紙合計)



グラフ4 性別冠詞の女男別内訳比率 (3紙合計)

を占めている。「女子」のつくことばはグラフ 3 に示したように、七八件で、グラフ 4 によると、女性冠詞の二割、「女流」のつくことばは三件で、一%弱となっている。

これに対して、男性冠詞表現では、実数を示したグラフ 3 と比率で示したグラフ 4 にみるように、「男性」のつくことばが最多の九一件で六割弱を占め、「男」のつくことばは三六件、二割と、「女」と「女性」が同数だった女性冠詞の場合とは異なる傾向を示している。また「男子」のつくことばも三三件、二割となっており、「男」冠詞と大差がない。このように、男性冠詞ではもっぱら「男性」がかんむりにつくことばが中心であるといえる。「男流」が皆無であることは先に指摘したとおりである。

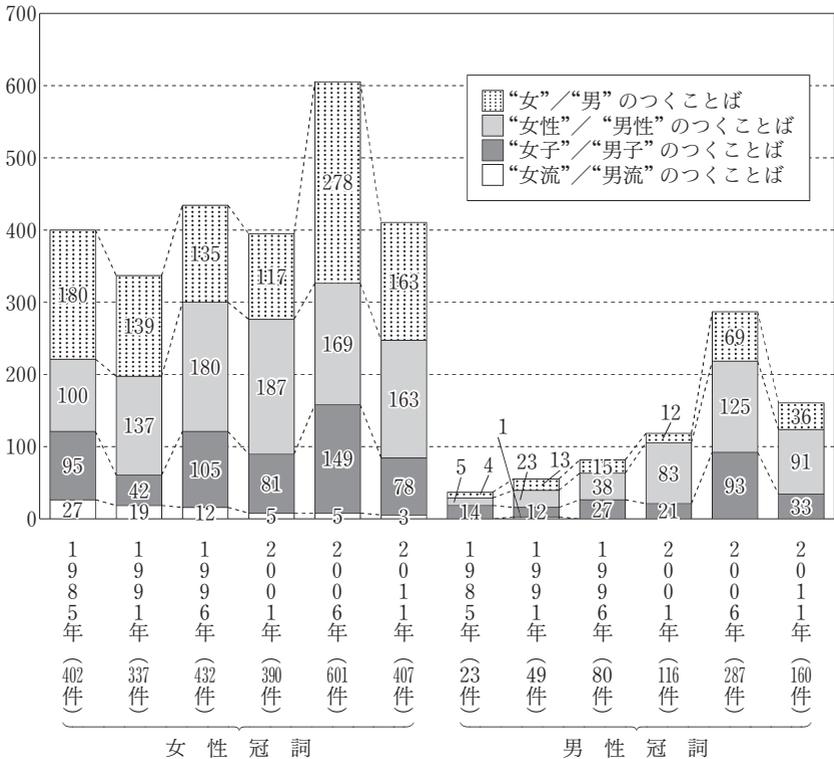
(6) 性別冠詞の経年変化

性別冠詞の経年変化を示したのがグラフ 5 である。女性冠詞の全体数は、八五年は四〇二件、九一年は三三七件、九六年は四三二件、〇一年は三九〇件、〇六年は六〇一件、一一年は四〇七件と増減を繰り返しており、確たる傾向はつかみにくい。ただし、全体をならせば四〇〇件程度で推移しているとみてよいだろう。〇六年が突出しているのは、自殺記事や裁判記事などにおいて、「女兒」という語が大量に用いられていたためである。

それに対して男性冠詞の全体数は、八五年は二三件、九一年は四九件、九六年は八〇件、〇一年は一六件、〇六年は二八七件、一一年は一六〇件で推移している。やはり〇六年に突出しているが、これは学校での事故に関して「男児」や「男性教諭」が多く使われていたためであり、〇六年を特異な年と考えれば、男性冠詞は総じてわずかずつながら増える傾向にあるということができよう。

冠詞の内訳別でみると、女性冠詞は「女」「女性」「女子」の間で、年により使用頻度に増減がみられるが、男性冠詞はおおむね「男性」のつくことばが増加しているように見受けられる。

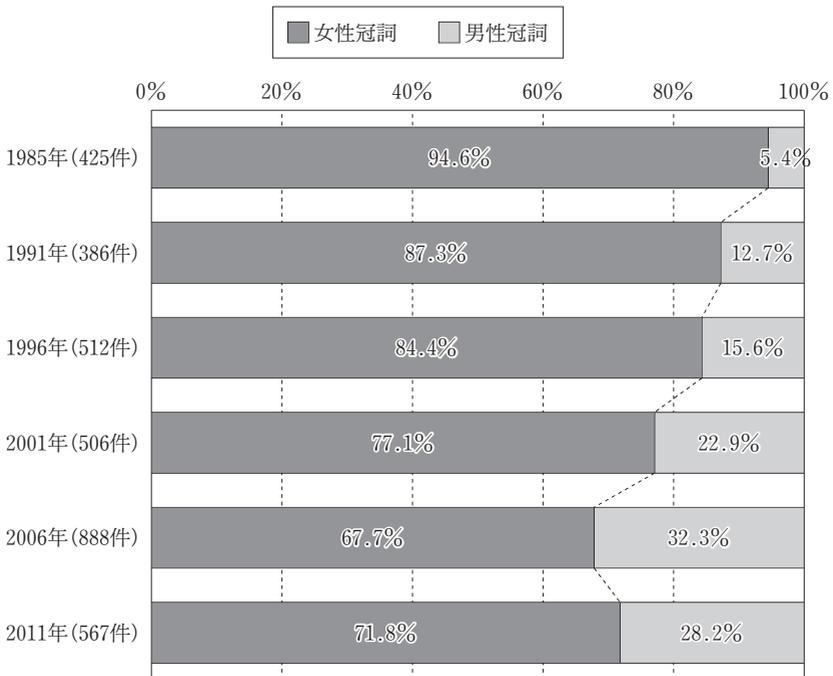
性別冠詞全体を一〇〇%として女男別比率の経年変化をみたものがグラフ6である。調査開始時には九対一だった女男比は、徐々に男性冠詞の比率が高まり、このところ男性冠詞が全体の三割前後を占めるに至っている様子がみてとれる。性を強調する効果をもつ、職業などの語頭に性別をつける性別冠詞表現は、必ずしも減少する傾向にはなく、「女」「女性」「女子」の三つの「女性冠詞」の使用は継続しているが、一方で「男性」を中心とした「男性冠詞」が増加する方向にあるようだ。これは、「高1川に突き落とした」(読売、一三日夕刊)という見出しがついた記事の中の、「市内の県立高校1年の女子生徒(15)と市立中学3年の男子生徒(14)」という表現にあら



グラフ5 女男性別冠詞の経年変化(3紙合計)(単位:件)

われているように、女性冠詞を用いる時には男性冠詞も同時に使用するというジェンダーの並行表現が進展しつつあることが一因であるとも考えられる。しかしながら、一方では男性冠詞が増えている分、性別を区別し、強調する傾向が進みつつあるともみることができ、今後の動向を注意深く分析する必要がある。

ところで、二〇〇〇年代半ばになると、「女子」「男子」をかんむりにつけるのではなく、語尾につける「○○女子」「○○男子」ということばを、さまざまなメディアでよく見聞きするようになった。「草食系男子」とそれに対する「肉食女子」ということばが一世を風靡したことは記憶に新しい。「理系女子」「カメラ女子」「戦闘女子」など語尾に「女子」のつくことばの他にも、「女子力」「女子会」といった語もメディアにはしばしば登場



グラフ 6 性別冠詞の女男比率経年変化 (3 紙合計)

する。また、「女子」だけでなく、「女」を語尾につけて「ジョ」と読ませ、理系の女子を「リケジョ」と称したり、歴史好きの女性を「歴女(レキジョ)」と呼ぶケースもある(「○○ジョ」に関しては、「熟女」という表記は以前からみられた)。本調査期間中の新聞記事の中では、このような語尾に「女子」がつくことばはそれほど目立たなかったが(テレビ欄では数多くみられた)、本論では、本調査研究会誌当時にはほとんどみられなかったこれらの表現を、「女性であること・男性であることを強調する表現」の一形態として、のちに分析するステレオタイプ表現に分類した。

2 女性の性を含み込んだ職業語の使用によるジェンダーの強調

(1) 女性の性を含み込んだ職業語

女性の性別や役割を強調する表現やことばとして、かつての「看護婦」や「保母」などのように、女性が就くことを自明とした、女性の性別を含み込んだ職業をあらわすことばが存在する。これらの職業名は、人びとに、職業と性別を結びつけてとらえさせてしまうおそれがある。一九九九年の男女雇用機会均等法の改正により、そういった職業名は、企業における募集・採用にあたって使用することが禁止されて、「看護師」や「保育士」へと改変が行われた。ジェンダーにとられない職業語の使用が、メディアにおいても、また人びとの間でも少しずつ浸透し始めてはいる。

しかしながら、日常的に何気なく使われている職業や役割・仕事の呼び名に、今でも女性の性を含み込んだことばが数多くみられる。新聞も例外ではなく、今回、女性の性を含み込んだ職業語は、調査期間中に三紙合計で一五七件がカウントされた。その内訳は、表10に示されている。新聞別にみると、朝日で八二件と他紙よりも多くなっ

表10 女性の性を含み込んだ職業語
(単位：件)

順位		朝日	毎日	読売	合計	
1	慰安婦	17	5	9	31	
2	フラガール	7	4	15	26	
3	ヒロイン	8	8	4	20	
4	ママ	11	4	1	16	
5	OL	11		2	13	
6	保育ママ	4			4	
7	ホステス	2	1		3	
	メイド	3			3	
	囲碁ガール	3			3	
	乳母	3			3	
11	オフィスレディ	2			2	
	キャリアウーマン	1	1		2	
	歌姫		1	1	2	
	仙女		2		2	
	舞姫			2	2	
	魔女	1		1	2	
17	BG	1			1	
	オフィスガール	1			1	
	お手伝いさん	1			1	
	カーリング娘	1			1	
	シスター	1			1	
	ソープ嬢	1			1	
	家政婦	1			1	
	修道女	1			1	
	踊り子	1			1	
	ウェートレス		1		1	
	ジョガーママ		1		1	
	看板娘		1		1	
	芸者		1		1	
	子女		1		1	
	女中		1		1	
	風俗ギャル		1		1	
	遊女		1		1	
	賄い婦		1		1	
	シンデレラ				1	1
	ミス東大				1	1
芸者さん				1	1	
女将さん				1	1	
津軽采女				1	1	
合計		82	35	40	157	

ており、毎日は三五件、読売は四〇件であった。

個別の語で最も多く用いられていたのは、「従軍慰安婦」「元慰安婦」を含む「慰安婦」で、朝日一七件、毎日五件、読売九件、三紙合計で三一件が数えられた。第四回調査では九件で五位、第五回調査では二九件で一位だったことにみられるように、この語は、新聞記事中での使用頻度が常時上位にある。次に多かった「フラガール」は、朝日七件、毎日四件、読売一五件の合計二六件が使用されていた。次いで第三位の「ヒロイン」は、朝日八件、毎日八件、読売四件の合計二〇件、以下、「クラブのママ」「スナックのママ」などを含む、文字通りの母親を除いた

職業としての「ママ」一六件、「OL」一三件が上位を占めた。語の種類すなわち「異なり語数」は三九種類であった。

一位の「慰安婦」ということが朝日で一七件と、三紙中最も多く使われていた理由は、日本政府に補償を求める「元慰安婦の請求権問題」に関連する記事の中で、一〇月一日に五件、一二日夕刊に三件、一三日に五件使用されていたほか、七日の日韓外相会談を報じる記事の中でも三件用いられていたことなどによる。毎日には、一二日の「政治外交」で前原流「および一二日夕刊の「慰安婦問題 国連で訴え」という見出しのついた記事の中で、また、読売は、一二日の「慰安婦問題」で人道的措置検討「および一三日の「従軍慰安婦問題 国連で賠償訴え韓国」という見出しの記事の中で、「慰安婦」について言及している。

二位の「フラガール」は、読売での使用が一五件と、三紙合計二六件の半数以上を占めているが、これは、東日本大震災で被害を受けた福島県いわき市のリゾート施設スパリゾートハワイアンズ従業員の女性たちが、被災地を元気づけるためにいち早くフラダンス興行を再開したことを同紙が取り上げたためであり、他紙も同様に明るい話題として扱っていた。三位の「ヒロイン」が用いられている記事例としては、「朝ドラ見てる？」（毎日、六日夕刊）といった主人公の女性について言及する記事があげられる。「ママ」が四位に浮上したのは、朝日一日のオピニオン面「耕論」に掲載された、「スナックふれあい 津波の苦勞飲み干すべし」という3・11東日本大震災からの復興を論じた記事の中で、繰り返し使用されていたことが関係している。

また、五位の「OL」については、朝日一日夕刊「昭和史再訪」というシリーズ記事の中で、六三年に女性雑誌が会社員の女性をさす呼称を公募した際に、「オフィス・レディ（略称OL）」が新語として採用された経緯が語られる中で、このことが何度も用いられていたことが影響している。

表11 男性の性を含み込んだ職業語
(単位：件)

順位		朝日	毎日	読売	合計
1	OB	5	9	27	41
2	サラリーマン	4	17	19	40
3	ヒーロー	12	10	17	39
4	カメラマン	2	5	8	15
5	ビジネスマン	2	8	4	14
6	英雄	2	7	3	12
7	雨男		6		6
8	イクメン			5	5
9	チェアマン			4	4
	紳士	3		1	4
11	キーマン		3		3
	マスター	3			3
	興銀マン		3		3
14	シンデレラボーイ	1		1	2
	営業マン		1	1	2
	鉄道マン		2		2
	両雄		2		2
18	オヤジ				1
	おやじさん	1			1
	スポーツマン	1			1
	銀行マン	1			1
	イエスマン		1		1
	テレビマン		1		1
	マルクス・ボーイ		1		1
	慶応ボーイ		1		1
	国父		1		1
	編集マン		1		1
	牧童 (カウボーイ)		1		1
	ラガーマン			1	1
	騎士			1	1
	商社マン			1	1
	晴れ男			1	1
	男爵			1	1
	合 計	38	80	95	213

(2) 男性の性を含み込んだ職業語

女性の性を含み込んだ職業名と対をなす、男性の性を含み込んだ職業語に関しては、三紙合計で二一三件が数えられた。内訳は表11にみるとおりである。朝日で三八件、毎日と読売ではさらに多く、それぞれ八〇件、九五件が使用されていた。

総じて、「婦」「ガール」「ママ」がつくことば、また「ヒロイン」「ホステス」など英語表記における女性形が、女性の性を含み込んだ職業語として目につく。

男性の性を含み込んだ個別の職業語で最も多かったのは「オールドボーイ」の略記である「OB」で、朝日五件、毎日九件、読売二七件の、三紙合計四一件が数えられた。それに、第二位の「サラリーマン」が、朝日四件、毎日一七件、読売一九件、合計四〇件の僅差で続いている。

また、「ヒーロー」が、朝日二二件、毎日一〇件、読売一七件の合計三九件で、三位につけている。以下、「カメラマン」一五件、「ビジネスマン」一四件、「英雄」一二件が続いている。男性の性を含み込んだ語の種類は三三語で、女性の性を含み込んだ職業語の異なり語数三九語よりも少ない。

全体で一位の「OB」、二位の「サラリーマン」、三位の「ヒーロー」、四位の「カメラマン」までは、いずれも読売で多く、それぞれ二七件、一九件、一七件、八件と、読売の合計九五件の値を押し上げている。読売の「OB」が男性の性を含み込んだ職業語の第一位を占めたのは、「東電年金削減課題山積」(八日)という記事の中で四件、「東電の非効率指摘 人件費」(四日)という記事の中で四件と、3・11で噴出した東電再建問題との関連で数多く用いられていたことが関係している。

二番目に多かった「サラリーマン」は、「年金のきほん1 仕組みを知りたい」という見出しの記事における、「サラリーマン世帯の専業主婦」(読売、一〇日)といった記事に典型的なように、被三号保険者の年金をめぐる議論が活発に行われていたことが影響している。「サラリーマン」ということばの使われ方については、のちにより詳しく分析する。

使用頻度三位の「ヒーロー」は、「仮面ライダー変身続け40年」(毎日、八日夕刊)、「チリ鉱山事故救出から1年」(毎日、一二日)という見出しの記事中その他で用いられていた。また、四位「カメラマン」の具体的使用例としては、新聞週間特集における、3・11東日本大震災関連取材に際しての「カメラマンなどを乗せた本紙のジェ

ット機」(読売、一五日)、五位「ビジネスマン」の例としては、有楽町・銀座の顧客争奪戦を扱った記事の中の「30〜40代のビジネスマンをターゲット」(毎日、一四日)、六位「英雄」の例としては、映画「アラビアのロレンス」を紹介した批評で「ラクダで何度も死線をくぐった英雄」(毎日、一三日)などをあげることができる。

女性の性を含み込んだ職業語を示した表10と、男性の性を含み込んだ職業語を示した表11を見比べて明らかなのは、女性に関しては「慰安婦」「スナックなどのママ」「ホステス」「メイド」など、他者をケアし他者にサービスする、再生産役割を担う職業語が多いのに対し、男性についてはそういった役割を担う職業語がほとんどみられないという点である。このように、性を含み込んだ職業語は性別役割分業の実態を色濃く反映しているとともに、それが繰り返し使用されることで、その職業に就くべきは誰なのかを暗黙のうちに示唆するという機能を有している。その中で、再生産役割を男性が果たすことを前提としたほぼ唯一の職業語が、昨今眼にすることが多くなってきた「イクメン」という語であろう。

(3) 性を含み込んだ職業語の紙面別傾向

女性の性を含み込んだ職業語が、掲載紙面別にどのような使用傾向にあるのかを示したのが表12である。ここでも、朝日・毎日・読売三紙合計の件数でみても、

まず、掲載紙面別に使用頻度をみると、「文化・メディア」で合計六九件と、職業語総数一五七件の四四・〇%を占めていることがわかる。次いで「総合・政治」が合計四〇件、全体比で二五・五%となり、両紙面に女性の性を含み込んだ職業語の七割近くが掲載されている計算となる。三番目に多かったのは「社会」で、合計一六件、一〇・二%であった。

女性の性を含み込んだ個別の職業語で最多の三一件を数えた「慰安婦」は、「総合・政治」で二六件、「国際」で

表12 面別にみた女性の性を含み込んだ職業語（3紙合計）

（単位：件）

順位		1面	総合・政治	国際	経済	科学	教育	生活	文化・メディア	地域	スポーツ	社会	合計
1	慰安婦		26	5									31
2	フラガール	7			3			2	5			9	26
3	ヒロイン								18	1		1	20
4	ママ		11						5				16
5	OL	1							10			2	13
6	保育ママ							4					4
7	ホステス								1			2	3
	メイド			3									3
	囲碁ガール								3				3
	乳母								3				3
11	オフィスレディ								2				2
	キャリアウーマン								2				2
	歌姫								2				2
	仙女								2				2
	舞姫								2				2
	魔女								2				2
17	BG								1				1
	オフィスガール								1				1
	お手伝いさん							1					1
	カーリング娘										1		1
	シスター		1										1
	ソープ嬢								1				1
	家政婦								1				1
	修道女		1										1
	踊り子									1			1
	ウェートレス			1									1
	ジョガーママ											1	1
	看板娘		1										1
	芸者								1				1
	子女								1				1
	女中								1				1
	風俗ギャル								1				1
	遊女								1				1
	賄い婦											1	1
	シンデレラ								1				1
	ミス東大						1						1
芸者さん										1		1	
女将さん							1					1	
津軽采女								1				1	
合計		8	40	9	3		1	8	69	2	1	16	157

五件使われていた。この問題の性格をあらわしているといえよう。二六件みられた「フラガール」に関しては、「社会」で九件、「一面」で七件、また「文化・メディア」で五件使用されていた。この「フラガール」は、特に読売四日社会面の「フラガールに観光長官表彰」との見出しの記事で四件、一三日社会面の「新人フラガール初舞台」で三件、一日夕刊一面の「フラガール再び」で三件、それぞれ使用されていた点が目立っている。震災被害から立ち上がった女性達が、社会面や一面で扱われたのである。三位の「ヒロイン」は、小説や舞台評、テレビ番組評などが掲載されている「文化・メディア」で一八件と、合計二〇件のうちのほとんどがこの面に出現している。このように、女性の性を含み込んだ職業語と掲載紙面とは、かなり強い関連性が認められるといえよう。

四位の「ママ」に関しては、「総合・政治」が、一六件中一件を占めたが、これは先述のように、朝日の「耕論」というオピニオン面で大量に使用されていたためである。「OL」については、朝日夕刊の「昭和史再訪」というシリーズで扱われていたことを反映して、一三件中一〇件が「文化・メディア」で用いられていた。

一方、男性の性を含み込んだ職業語全体がどの紙面で扱われる傾向にあるのかに関しては、表13にみるように、「文化・メディア」に登場する頻度が六二件と最多で、男性の職業語総数二一三件中の二九・一%、次いで「総合・政治」が三九件、一八・三%となっている。また、「経済」が二八件、一三・一%、「社会」が二一件、九・九%で、それに続いている。先の、女性の性を含み込んだ職業語が「文化・メディア」に四割強、「総合・政治」に三割弱出現していたことと比較すると、やや傾向が異なり、より多くの紙面分野に分散して用いられているように見受けられる。

男性の職業語の使用頻度を個別の語でみると、最も多かった「OB」合計四一件のうち、四割弱の一五件が「経済」で使われていた。これは、先にみたように、東京電力の人件費や年金に関する読売の記事が経済面に掲載

表13 面別にみた男性の性を含み込んだ職業語（3紙合計）

（単位：件）

順位		1面	総合・政治	国際	経済	科学	教育	生活	文化・メディア	地域	スポーツ	社会	合計
1	OB	3	5		15		2		2	1	3	10	41
2	サラリーマン	1	12		7			2	16	1		1	40
3	ヒーロー	4	2	2				4	12	3	9	3	39
4	カメラマン	1		1					8	3	1	1	15
5	ビジネスマン		4	2	1		1	1	2			3	14
6	英雄		2	4					1	2		3	12
7	雨男								6				6
8	イクメン									5			5
9	チェアマン								3		1		4
	紳士		3						1				4
11	キーマン		2						1				3
	マスター		3										3
	興銀マン				3								3
14	シンデレラボーイ		1						1				2
	営業マン							2					2
	鉄道マン				2								2
	両雄								2				2
18	オヤジ		1										1
	おやじさん									1			1
	スポークスマン			1									1
	銀行マン		1										1
	イエスマン								1				1
	テレビマン								1				1
	マルクス・ボーイ								1				1
	慶応ボーイ		1										1
	国父		1										1
	編集マン								1				1
	牧童(カウボーイ)	1											1
	ラガーマン		1										1
	騎士								1				1
	商社マン			1									1
	晴れ男								1				1
	男爵								1				1
	合計	10	39	11	28		3	9	62	16	14	21	213

されていたためである。さらに、「OB」のうち、二割強の一〇件は「社会」で使われていたが、読売の「巨人OB被災地児童を指導」という見出しの記事中での使用が、そのうちの多くを占めていた。また、「サラリーマン」については、合計四〇件のうち四割にあたる一六件が「文化・メディア」に出現し、特に小説『下町ロケット』の作者へのインタビュー記事(毎日、五日夕刊)の中で多く使用されていた。また、調査時期に、三号被保険や年金に関する記事が少なからずみられ、「主婦(専業主婦)」と対になって「サラリーマン」という語が多く使われていたことを反映して、三割にあたる一二件が「総合・政治」で、二割近くに相当する七件が「経済」で、それぞれ用いられていた。

三九件みられた「ヒーロー」に関しては、「文化・メディア」での使用が一二件と目立っているほか、「スポーツ」でも九件用いられており、両紙面分野において、男性が「カッコイイ」主人公として出現していることをうかがわせる。このように、男性の性を含み込んだ職業語の使用頻度も、女性と同様、掲載紙面と密接に関係しているといえよう。

ちなみに、女性の性を含み込んだ職業語は、既に見てきたように、「文化・メディア」に多く登場するほか、「総合・政治」でも多くみられた。それは、「慰安婦」の語がこの面であれば扱われ、また「ママ」という語が論説で扱われていたためである。「慰安婦」は、「総合・政治」のほかにも「国際」で目立ち、また「フラガール」は「一面」でも目立ったが、「総合・政治」「国際」「一面」といういわば新聞の顔ともいえる紙面分野に女性の性を含み込んだ職業語が出現するのは、男性と比べてごく限られた「職業」においてのみといわざるを得ない。そもそも、「慰安婦」が政治的・国際的イッシュユとならず、また、「フラガール」が震災復興で話題となっていなかったら、女性は、これらの面に、ほとんど登場していなかっただろう。

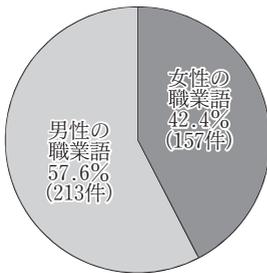
最後に、紙面をさらに大きく、「硬派系」、「軟派系」、「社会系」の三つのジャンルにくくってみてみると、女性の性を含み込んだ職業語の使用頻度は、「硬派系」六〇件、三八・二%、「軟派系」八一件、五一・六%、「社会系」一六件、一〇・二%となった。これに対し、男性の性を含み込んだ職業語の紙面ジャンル別使用頻度は、「硬派系」八八件、四一・三%、「軟派系」一〇四件、四八・八%、「社会系」二一件、九・九%となっており、三ジャンルの出現比率は、女男の間で大きな違いはみられなかった。

(4) 性を含み込んだ職業語の女男別比率と頻度の違い

グラフ7は、女性ないし男性の性別を含み込んだ職業語の総数三七〇件を一〇〇%とした時の女男別内訳を示したものである。女性の性を含み込んだ職業語は一五七件、四二・四%であるのに対し、男性の性を含み込んだ職業語は二一三件、五七・六%と六割近くに達しており、男性の職業語の方が多く使用されていることがみとれる。

なお、今回、男性が就く職業であるもかわらず女性の性が入っている職業語として、「女形」が三紙合計で三〇件、「オネエ」が一件みられた(表は割愛)。新聞別内訳は、「女形」が、朝日で八件、毎日で八件、読売で八件、「オネエ」が朝日一件であった。掲載紙面別内訳は、「女形」については、中村芝翫の死去を扱った記事(二〇日)が、一面と社会面に掲載されていたことを反映して、「1面」で七件、「社会」で七件、そして中村芝翫を悼んだ寄稿文が多く載っていた「文化・メディア」で一三件が数えられた。「オネエ」一件が載っていた面は、「文化・メディア」である。

一方、女性が就く職業語に男性の性が入っているものとして、「男役」とい



グラフ7 性別を含み込んだ職業語の女男比(3紙合計370件)

う語が、朝日と毎日で各一件づつみられた(表は割愛)が、それらが掲載されていた紙面は、「総合・政治」と「文化・メディア」であった。これら女性が就く特別な職業、男性が就く特別な職業は、歌舞伎などの伝統芸能や宝塚など大衆芸能の分野では以前から存在し、トランスジェンダーな文化装置と考えることもできる。こういった「女形」や「男役」という芸能文化を一概に否定するものではないが、「男性が演じる女」「女性が演じる男」という性別二分法を前提としている点では変わりがない。文化や芸能の分野において性別を含み込んだ職業語を用いる際には、使用する側も、また読み、聴き、観る側も、それらが、歴史的に限定された「役所^{やくどころ}」や表現であること
を認識した上で記事を作成したり、それらに接する必要があるだろう。

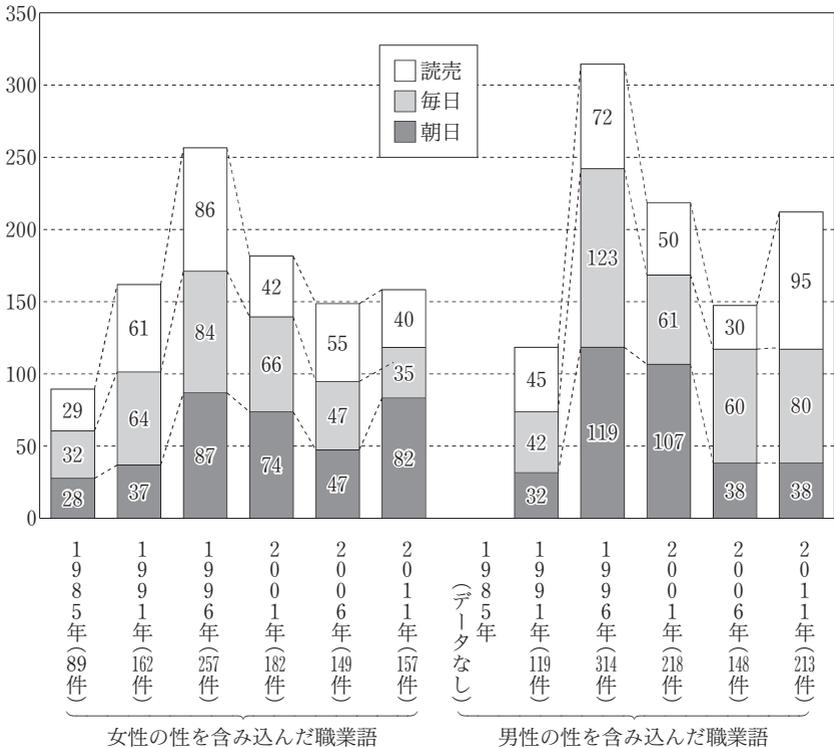
(5) 性を含み込んだ職業語の経年変化

性を含み込んだ職業語の分析の最後にあたって、使用頻度を積み挙げて時系列的变化を示したものがグラフ 8 である。グラフの左側は女性の性を含み込んだ職業語の使用頻度を示しており、これを見ると、三紙合計では八五年八九件、九一年一六二件、九六年二五七件と増加傾向を示していたものが、〇一年に一八二件へと減少、その後は〇六年一四九件、一一年一五七件と、ほぼ同一頻度を維持していることがわかる。朝日・毎日・読売の各紙とも増減の傾向は大体似通っており、件数も九一年と〇一年を除いておおむね同じような数値だが、一一年は朝日が八二件と他の二紙に比べて多くなっている。これは、朝日の記事中で、「慰安婦」「ママ」「OL」が多く使われていたことが関連している。

グラフ 8 の右側は、男性の性別を含み込んだ職業語の使用頻度をあらわしている。九一年に一一九件だったものが、九六年には急増して三一四件、その後は〇一年に二一八件へと減少し、〇六年にはさらに減って一四八件と、減少傾向を示していたが、一一年には二二三件と、再び〇一年の水準に戻った。各紙別にみると、九六年は朝日・

毎日の二紙がそれぞれ一二〇件前後を数えたのに対し、〇一年には朝日が一〇七件と、単独で全体の過半数近くを占めた。そして、〇六年になると、毎日で、また一一年には毎日と読売で、それぞれ使用頻度が高くなっている。一一年の毎日で「サラリーマン」「ビジネスマン」「英雄」「雨男」が、読売で「OB」のほか「サラリーマン」「ヒーロー」「カメラマン」が多用されていたことによる。

グラフ9は、女性の性を含み込んだ職業語と男性の性を含み込んだ職業語の合計を一〇〇%として、両者の比率の経年変化をみたものである(八五年は、男性の性を含み込んだ職業語を数えていない)。女男合計では、九一年二八一件、九六年五七一件、〇一年四



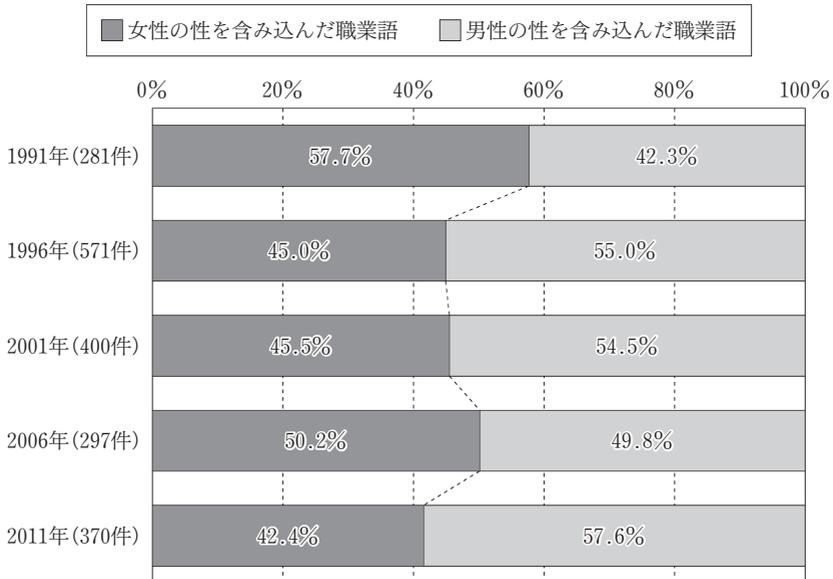
グラフ8 女男別性別職業語の経年変化 (単位: 件)

〇〇件、〇六年二九七件、一一年三七〇件というように、この二〇年で総数にはかなりの増減がみられるものの、女男比は六対四、五対五、四対六の間を行き来しており、大きな変化はみられない。

(6) 「サラリーマン」ということばの分析

ところで、男性の性を含み込んだ職業語は、「サラリーマン」を始めとして、表11にみたように、「カメラマン」「ビジネスマン」「チェアマン」「キーマン」「営業マン」「鉄道マン」といった「マン」が語尾にくく和製英語が中心となっているほか、「ボーイ」「雄」「男」が語尾につくものも散見される。「イクメン」も、育児をする男性（メン）という意味で、これに含めてもいいたろう。

しかしながら、「マン」という接尾語は、男性をあらわすだけでなく、女性も含めた人間一般をさして用いられる場合があり、これらの語がさし示す職業に就いている女性も実際にいるはずだ。にもかかわらず、「マン」という語尾がつけられることによって、これ



グラフ 9 性別を含んだ職業語の女男別比率経年変化

表14 「サラリーマン」の内訳

(単位：件)

記事における「サラリーマン」の意味	朝日	毎日	読売	合計
①明らかに男性を意味する用法	2	6	15	23
②女男を含め勤め人一般をさす用法	1	2		3
③曖昧な用法		5	1	6
④職業の代表として扱う用法	1	4	3	8
合計	4	17	19	40

らの職業には男性が就くものというイメージがつきまわっているからである。

そこで、本調査では、これまでも「サラリーマン」ということばに関し、記事中での使用法を、①明らかに男性をあらわす用法（毎日七日「(保険料納付を免除される) サラリーマン世帯の専業主婦」など）、②女性も含んだ勤め人一般をさす用法（朝日一四日「(医療費における) サラリーマンの窓口負担」など）、③男性の会社員をさすの

か、女男とも含めた勤め人をさすのか判断としない曖昧な用法（毎日五日夕刊「普通のサラリーマンはずっと会社に拘束されている」など）、④職業の代表として扱う用法（毎日一〇日「サラリーマンや公務員」など）の、四つに分類して分析を行ってきた。今回もそれに準じて、三紙合計四〇件に達した「サラリーマン」という語の用法の内訳をみてみよう。

表14は、その四つの内訳を示したもので、①明らかに男性をあらわす用法が朝日二件、毎日六件、読売一五件の計二三件、②女性も含んだ勤め人一般をさす用法が朝日一件、毎日二件、読売ゼロ件の計三件、③男性の会社員をさすのか、女男とも含めた勤め人をさすのか判断としない曖昧な用法が朝日ゼロ件、毎日五件、読売一件の計六件、④職業の代表として扱う用法が朝日一件、毎日四件、読売三件の計八件がみられた。毎日では四種類が分散しており、読売では明らかに男性をさす用法が多い。読売の明らかに男性をさす「サラリーマン」についての使用例としては、「手帖に予定がびっしり詰まっていることに充実感を抱き、毎日深夜まで飲み歩く猛烈サラリーマンだった」（六日夕刊）や「サラリーマンだった夫に先立たれた妻」（二二日）、小説の主人公の紹介として書かれた「東西電機

表15 面別にみた「サラリーマン」の内訳

(単位：件)

記事における「サラリーマン」の意味	1面	総合・政治	国際	経済	科学	教育	生活	文化・メディア	地域	スポーツ	社会	合計
①明らかに男性を意味する用法	1	6		5			1	8	1		1	23
②女男を含め勤め人一般をさす用法		2						1				3
③曖昧な用法								6				6
④職業の代表としてあげる		4		2			1	1				8
合計	1	12		7			2	16	1		1	40

の宣伝部に勤務するサラリーマン」(一四日夕刊)、などがあげられる。

表15から、掲載紙面別に使用頻度をみると、二三件と最多の登場頻度であった①明らかに男性をあらわす用法については、「文化・メディア」で八件、「総合・政治」で六件、「経済」で五件使用されていた。②女性も含んだ勤め人一般をさす用法に関しては、確たる傾向が見出しづらい。③男性の会社員をさすのか、女男とも含めた勤め人をさすのか判断としない曖昧な用法の六件については、全てが「文化・メディア」で用いられていた。また、④職業の代表として扱う用法は、「政治・経済」での四件が目立った。

企業や官公庁をはじめ雇用主に雇用され給与を支払われて働く勤め人の数は、正規・非正規合わせて、二〇一六年のデータによると女男合計で五三三三万人⁹⁾。全人口の四割を構成し、そのうち女性が二四八四万人、男性は二八四九万人で、女性が四六・六%を占めている。女性の勤め人は非正規雇用が多いものの、半数近くに達しようとする女性の勤め人を含めて、「サラリーマン」と呼びならわしている人びとや新聞メディアに、果たしてどこまでその自覚があるだろうか。

高度経済成長を支えた「モレツサラリーマン」や、新橋の飲み屋で鬱憤を晴らす「サラリーマン」のイメージ、また「サラリーマン根性」「サラリーマン文化」「サラリーマンの悲哀」などは、男性の勤め人にとわりついた「日本的イメージ」だが、その働きぶりやメンタリティ、文化は、変わりつつある。女性と男性を含め

た給与労働者全体を適切に表現する語が、文化的に創り出され、習慣化することが望まれよう。

3 他者との関係で女性をあらわすことばの使用による女性のジェンダーの強調

(1) 他者との関係で女性をあらわされる語

女性のジェンダーをことさら強調する表現の中には、女性を夫や家など、いわば私的な領域と結びつけて表現し、たとえば「主婦」のようにその「家庭性」を、「夫人」のように夫への「帰属性」を強調するものがある。これらのことばを、本研究会は他者との関係で女性があらわされる語と呼んできた。これらも、先の、女性冠詞つきのことばや女性の性を含み込んだ職業語と同様、新聞という多数の読者を有するメディア上で多用されることによつて、人びとのジェンダー意識の形成に、少なからぬ影響を与える可能性がある。

これら、他者との関係で女性をあらわすことばを数えたところ、表16に掲げたように、朝日が九九件、毎日が一〇八件、読売が一三五件、合計で三四二件となった。

その中で最も多くみられた語は「主婦」で、各紙別では朝日で四三件、毎日で三一件、読売で六〇件の合計一三四件がカウントされた。二番目に多かったのは「夫人」で、朝日一〇件、毎日二〇件、読売一七件、合計四七件が数えられた。その内訳は、「本人の名」+「夫人」が、朝日五件、毎日一〇件、読売六件、合計二一件で最も多かった。次いで「夫人」の単独使用と「夫の肩書き」+「夫人」がそれぞれ一一件ずつみられた。そのほかは、表16に示したとおりである。

三番目に多かったのは「王妃」で、朝日一〇件、毎日二件、読売二〇件の合計三二件、以下、「嫁」一八件、「奥さん」一七件といった表現が続く。他にも「おかみさん」「女房」「未亡人」「姑」といった語があがっている。異

表16 他者との関係で女性をあらわすことば
(単位:件)

順位		朝日	毎日	読売	合計
1	主婦	43	31	60	134
2	夫人	10	20	17	47
	内訳①名+夫人	(5)	(10)	(6)	(21)
	②夫人	(2)	(4)	(5)	(11)
	③夫の肩書+夫人	(1)	(5)	(5)	(11)
	④夫の姓+夫人	(2)		(1)	(3)
	⑤夫人その他		(1)		(1)
3	王妃	10	2	20	32
4	嫁	5	10	3	18
5	奥さん	2	9	6	17
6	おかみさん		14		14
	皇后	13		1	14
8	姫	4	1	4	9
9	妃	2		5	7
10	女房		5	1	6
11	未亡人	1		4	5
12	姑	1	3		4
13	ママ			3	3
	愛人		2	1	3
	花嫁		2	1	3
	新婦	2	1		3
17	皇女	1		1	2
	妻妾		2		2
	内縁の妻			2	2
	令嬢		2		2
21	プリンセス	1			1
	王女	1			1
	局	1			1
	後妻	1			1
	小姑	1			1
	カカア		1		1
	バアさん		1		1
	姉さん女房		1		1
	新妻		1		1
	つや姫レディ			1	1
	マダム			1	1
	皇太子妃			1	1
	先妻			1	1
	内妻			1	1
	老婦人			1	1
合 計		99	108	135	342

なり語数は三五種類であった。

「主婦」の具体的な使用例は、「社説 主婦の年金」(毎日、一〇日)という見出しや、「会津美里町の仮設住宅に住む主婦(60)」(朝日、九日)、「5歳の長女を抱える区内の主婦」(読売、一三日)、「主婦の視点でのアドバイス」(読売、一四日夕刊)といった記事の中での表現がその典型である。

「主婦」には、これまでのカウント方法を踏襲して「専業主婦」という表現も含めたが、「専業主婦」だけを抜き出してみると、朝日で九件、毎日で一三件、読売で一七件、合計三九件みられた。「専業主婦」の具体的使用例と

しては、毎日七日の「経済観測」というコラムでの「サラリーマン世帯における専業主婦の保険料納付を免除した第3号被保険者制度」といった記述、また、この語の使用件数が多かった読売紙上の、「基礎からわかる専業主婦の年金」という見出しの特集記事（一二日）の中での言及などをあげることができる。特に、一二日の特集では、記事中に「専業主婦」が一七件も使われていた（ちなみに「主婦」は二件使われていた）ほか、先述した「サラリーマン」ということばが、明らかに男性の勤め人をさすものとして四箇所使われていた。会社に勤務する夫と、自分で保険料を払わなくても基礎年金を受け取れる無職の妻とがセットで、かつ固定的に扱われているのである。

「専業主婦」は、雇用されていないかまたは自営で働いていない家事・育児に従事する既婚女性のことをさすが、単に「主婦」という場合、被雇用ないし自営で働いている既婚女性も含めて、この語が用いられることが多い。どれほど厳密に区別して使用されているのかはわからないが、既婚者の女性は、賃労働に就いていても家事・育児の一義的担い手とみなされ、ひとしなみに「主婦」とされてしまう表現のあり方は、既婚女性の半数を超える人が働いている現在、改められるべきであろう。

夫に付随する妻のことをさす、「夫人」についてみると、合計二一件にのぼった「名」+「夫人」の例としては、野田佳彦総理大臣の妻に対する「仁実夫人」（朝日、二日、読売、一五日）との記述がしばしばみられた。合計一件みられた「夫の肩書き」+「夫人」に関しては、「スペイン侯爵夫人全財産捨て結婚」（毎日、七日夕刊）、「85歳侯爵夫人『金より愛』」（読売、七日）といった、「アルバ侯爵夫人」に関する見出しの記事で数多くみられた。また、同じく一一件が数えられた単独で用いられる「夫人」に関しても、この記事の中で多く使われていた。「王妃」に関しては、ブータン王国の「ジェツン・ペマ王妃」の「ロイヤル婚」に関連して、朝日四日の記事を始め、各紙で扱われていた。

表17 他者との関係で男性をあらわすことば (単位：件)

順位		朝日	毎日	読売	合計
1	皇太子	7	5	7	19
2	主人	1	2	4	7
3	王子	3		1	4
4	新郎	1	1		2
	旦那	2			2
	婿			2	2
8	娘婿		1	1	2
	プリンス	1			1
	若旦那	1			1
	主夫		1		1
	嫡男		1		1
	花婿			1	1
	御曹司			1	1
	皇子			1	1
合計		16	11	18	45

(2) 他者との関係で男性があらわされる語

男性が、女性や家族など他者との関係で表現される語は、表17に示したように、朝日一六件、毎日一件、読売一八件の、合計四五件であった。のちに女男別比率について論じる箇所でも述べるが、女性が他者との関係であらわされることば三四二件と比べると、使用頻度ははるかに低い。

その中で最も多かった語は「皇太子」で、朝日七件、毎日五件、読売七件、合計一九件が数えられ、次に「主人」が、朝日一件、毎日二件、読売四件、合計七件みられた。以下、「王子」合計四件、「新郎」「旦那」「婿」「娘婿」が各二件で続く。異なり語数は一四種類であった。

「皇太子」は、日本の皇太子だけでなく、英国の皇太子が登場した。また「主人」については、「桐谷夫妻の一期一会」(読売、四日)、「時代の証言者 おいしゅうございます 岸朝子」(読売、八日)といった見出しの記事のインタビュイーの談話のほか、署名入りのエッセイの中で用いられていた。

(3) 他者との関係で女男があらわされる語の紙面別傾向
掲載紙面別に、他者との関係で女性があらわされる語の出現頻度がどのような傾向を示しているかを、三紙合計で示したのが表18である。

まず、合計一三四件と最も多かった「主婦」の語は、「社会」で扱われることが最も多く、三三件と四分の一を占め、次いで「総合・政治」で二八件、「経済」で二五件出現し、「生活」が二

一件で続いた。表には示さなかったが、「主婦」の中の「専業主婦」だけを見てみると、「主婦」が「社会」と「生活」が主たる舞台であるのとは対照的に、これらの面ではほとんど用いられておらず、主に年金に関する記事に出現する形で、「経済」で一六件、「総合・政治」で九件みられたという点が特徴的である。

合計四七件の「夫人」に関しては、「総合・政治」で最多の二五件、六割に達しているが、これは、先に紹介したように、野田総理大臣の妻である「仁実夫人」が多用されていたことに起因する。このほか、毎日、読売を中心にスペインの「侯爵夫人」が登場した「国際」においても、九件と目につく。

合計三二件みられた「王妃」は、「文化・メディア」に分類された「今田美奈子華麗なる王妃の食卓芸術展」(読売、六日夕刊)という記事の中で一四件、四割が使用されていたほか、ブータン国王の結婚相手についての記事が載った「国際」において一〇件を数えた。

このほか、「嫁」「奥さん」は「文化・メディア」で扱われることが多く、「おかみさん」が一〇件を占めたのは、毎日三日夕刊の一面の「知りたい! 落語家弟子支え おかみさんは太陽」という見出しの記事の中で、落語家一門・林家の海老名香代子が、「おかみさん」と呼ばれて何度も出現したことによっている。

全体として、女性が他者との関係であらわされることは、合計三四二件中「文化・メディア」が九二件、二六・九%、「総合・政治」が六九件、二〇・二%、「社会」が六〇件、一七・五%と、合計六割強がこの三ジャンルで占められている。

一方、男性が他者との関係でどのようにあらわされているかを、掲載紙面別にみたのが表19である。トップの「皇太子」は、一九件中七割を占める一三件が「社会」で扱われていた。「主人」は「生活」「文化・メディア」で各二件みられ、あとは他の紙面に一件づつで分散している。

表18 面別にみた他者との関係で女性をあらわすことば(3紙合計)

(単位:件)

順位		1面	総合・政治	国際	経済	科学	教育	生活	文化・メディア	地域	スポーツ	社会	合計
1	主婦	4	28	2	25			21	14	7		33	134
2	夫人	3	25	9					6	1	3		47
3	王妃	1	3	10			2		14			2	32
4	嫁		1						10	1		6	18
5	奥さん		4				1		7	2	1	2	17
6	おかみさん	10							4				14
	皇后								1			13	14
8	姫								9				9
9	妃	1	2	1								3	7
10	女房		1						5				6
11	未亡人		4						1				5
12	姑								4				4
13	ママ							3					3
	愛人			2					1				3
	花嫁	1	1					1					3
	新婦			1					2				3
17	皇女								2				2
	妻妾								2				2
	内縁の妻									2			2
	令嬢								2				2
21	プリンセス								1				1
	王女								1				1
	局								1				1
	後妻						1						1
	小姑								1				1
	カカア								1				1
	バアさん								1				1
	姉さん女房								1				1
	新妻								1				1
	つや姫レディ									1			1
	マダム							1					1
	皇太子妃						1						1
	先妻							1					1
	内妻											1	1
老婦人	1											1	
合 計		21	69	25	25		5	27	92	14	4	60	342

表19 面別にみた他者との関係で男性をあらわすことば（3紙合計）

（単位：件）

順位		1面	総合・政治	国際	経済	科学	教育	生活	文化・メディア	地域	スポーツ	社会	合計
1	皇太子			2					3	1		13	19
2	主人		1					2	2	1		1	7
3	王子		2	1					1				4
4	新郎			1					1				2
	旦那		1						1				2
	婿							1	1				2
	娘婿								1			1	2
8	プリンス		1										1
	若旦那									1			1
	主夫				1								1
	嫡男								1				1
	花婿		1										1
	御曹司								1				1
	皇子								1				1
合 計			6	4	1			3	13	3		15	45

全体として、他者との関係で男性があらわされることばは、合計四五件中、「社会」において一五件、三三・三%が用いられており（そのほとんどが「皇太子」である）、次いで「文化・メディア」の一三件、二八・九%が主たる掲載面となっている。「1面」においてはまったくみられなかった。

次に、「1面」「総合・政治」「国際」「経済」「科学」を「硬派系」、「教育」「生活」「文化・メディア」「地域」「スポーツ」を「軟派系」、「社会」を「社会系」と、大きく三つにくくった紙面ジャンル別に、女性を他者との関係であらわす語の使用頻度をみてみると、「硬派系」で一四〇件、四一・〇%、「軟派系」で一四二件、四一・五%、「社会系」で六〇件、一七・五%用いられていた。一方、男性を他者との関係であらわす語に関しては、「硬派系」一一件、二四・四%、「軟派系」一九件、四二・三%、「社会系」一五件、三三・三%と、出現頻度自体が、女性に比べてどのジャンルでも大幅に低いほか、女性と異なり、硬派系の面に登場する割合が極度に低くなっている。これは、政治や国際など「硬派」の紙面に男性は主に主体として登場し、他者との関係において表現されることはほとんどないという事実の反映と考えられる。

(4) 他者との関係であらわされる語の女男別比率と頻度の違い

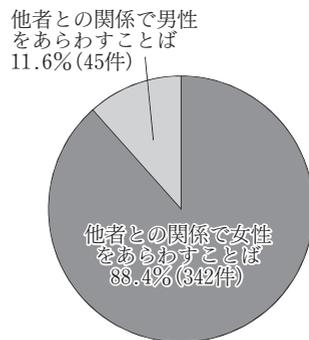
他者との関係で女性があらわされることば三四二件および男性があらわされることば四五件の合計三八七件を一〇〇%として、女男別の内訳を示したものがグラフ10である。他者との関係で女性があらわされる語が三四二件、八八・四%を占めるのに対し、他者との関係で男性があらわされる語は四五件、一一・六%にとどまっている。

先述したように、女性が他者との関係であらわされる語の種類(異なり語数)は、三五語であるのに対して、男性は一四語であり、大きな開きがあったことと、符合しているといえよう。

(5) 他者との関係で女男があらわされる語の経年変化

女性ないしは男性が、他者との関係であらわされる語に関して、新聞ごとに積み上げ、経年変化をみたものがグラフ11である。まずグラフの左側で、女性が他者との関係であらわされる語の推移をみると、三紙合計の件数は、八五年に五七九件であったものが、九一年には二八一件へと大きく減少。その後九六年に三七〇七件へと増加したものの、〇一年には二五八件へと再び減少した。しかしながら、〇六年には二八七件、一一年には三四二件と、この二回でまた少しずつ増加傾向を示している。なお、各年とも三紙間ではそれほど極端な件数の違いはみられず、増減の仕方も比較的類似している。

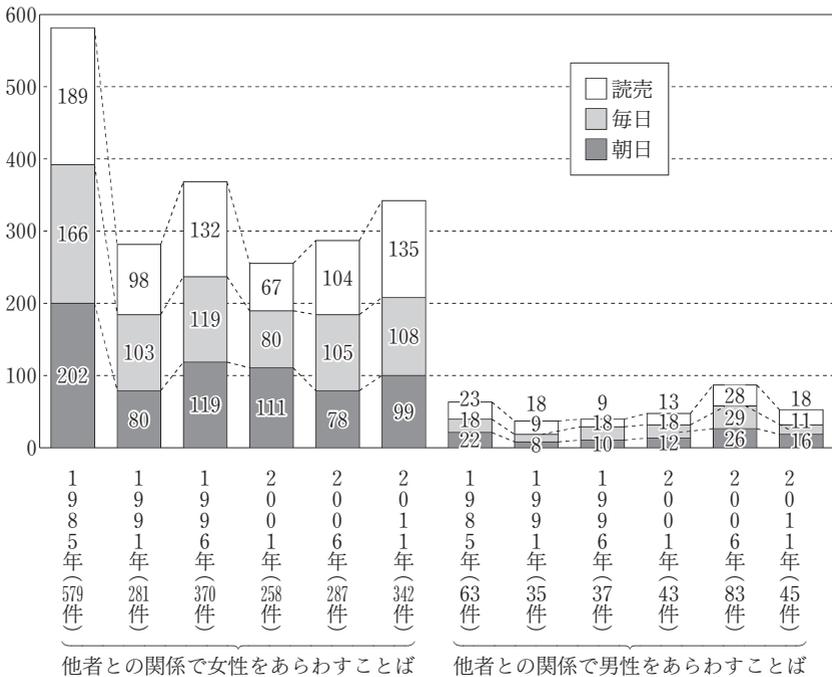
グラフ11の右側は、男性が他者との関係であらわされることばの推移を示している。八五年六三件、九一年三五



グラフ10 他者との関係で性別をあらわすことば (3紙合計387件)

件、九六年三七件、〇一年四三件、〇六年八三件、一一年四五件と増減しているが、確たる傾向は見出しにくい。また、各紙別にも大差はみられない。

グラフ12は、女性が他者との関係であらわされる語と男性が他者との関係であらわされる語を合計一〇〇%とし、両者の比率の経年変化をみたものである。女男合計総数は、八五年六四二件、九一年三一六件、九六年四〇七件、〇一年三〇一件、〇六年三七〇件、一一年三八七件といった増減を示している。女男それぞれ実数値は年によって異なるものの、女男別比率は、〇六年の八対二を除いて、全てがほぼ九対一で推移している。



グラフ11 女男別他者との関係で性別をあらわすことばの経年変化 (単位: 件)

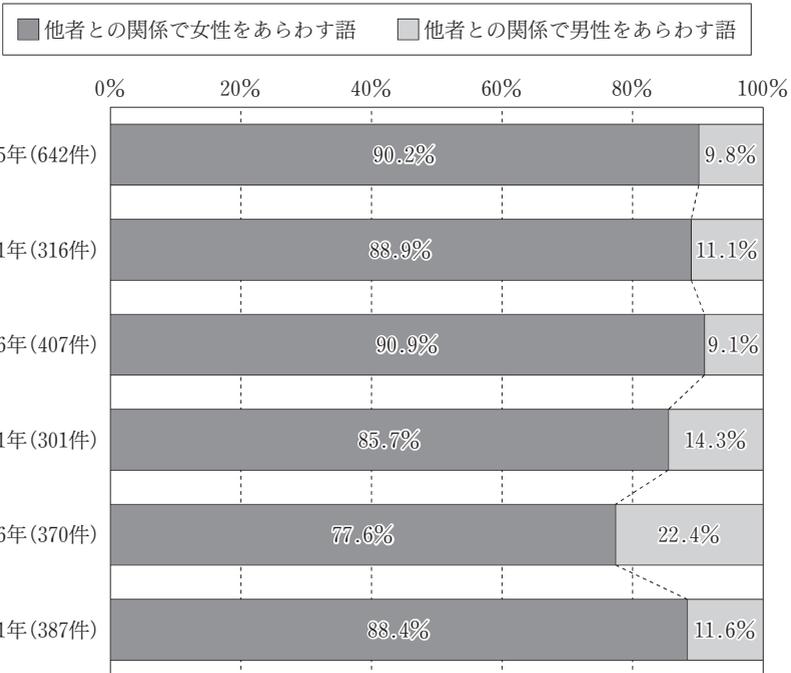
4 女性であることが不必要に強調される

ステレオタイプ表現

(1) 女性に対するステレオタイプ表現

私たちは、往々にして性別、人種や民族などに対する単純化され、類型化された先入観や固定観念によって、他者を理解しようとする傾向がある。中でもジェンダーに関するステレオタイプは、人びとの意識に深く根づいており、女性に対する差別がなくならない要因の一つともなっている。ウォルター・リッブマンは、ステレオタイプの機能として、第一に、認知に対する経済性、すなわち手間をかけずに対象を認識できること、第二に、自己のアイデンティティを防衛する、すなわち理解不能なものによって自分の存立や自尊心が損なわれないようにすること⁽¹⁰⁾をあげている。

女性と新聞メディア研究会は、これまで、



グラフ12 他者との関係で性別をあらわすことばの男女比率経年変化

女性についての紋切り型表現を、①「女らしさ」に関するステレオタイプ表現、②「母親らしさ」に関するステレオタイプ表現、③「主婦役割」に関するステレオタイプ表現、④性的存在・その他の女性に対するステレオタイプ表現、の四つに大きく分類して、分析を行ってきた。また、「女らしさ」「母親らしさ」のステレオタイプ表現については、さらに下位分類を行っている。

ステレオタイプ表現に関する二〇一一年の調査結果の数値と記事例をまとめたものが、表20である。まず、「女らしさ」を強調する文章や表現のうち、容姿、服装、年齢などについて言及したものは、朝日三一件、毎日二六件、読売一九件の合計七六件みられた。具体的には、テニスのシングルスで優勝したラドワンスカに関する「淡いピンクのユニホームが青色のコートに映えた」という記述(朝日、二日)、プータンの国王の妻に関する「若い国王に市井の美女」という見出し(朝日、四日夕刊)、一九六四年の東京五輪で活躍したチャスラフスカについての『五輪の名花』20年ぶりの来日」という見出し(毎日、九日)、中国の少数民族・満族の伝統人形を「満族は美人が多いとされ、目鼻立ちのつくりも繊細だ」と形容する記事(読売、一四日夕刊)などがあげられる。

次に女性の心理、行動、役割などについて言及したものは、表20二段目に示したように、朝日六三件、毎日三六件、読売五四件、三紙合わせて一五三件に達した。これは、全分類項目中最多であり、女性に対する全てのステレオタイプ表現四四四件中の三四%を占めている。具体的な例としては、モーツァルトのオペラを解説した「不実な男と知りつつひかれてやまない女心」(朝日、三日)、ノーベル平和賞を受賞したサーリーフ大統領を「汚職許さぬ『鉄の女』」と打ち出す見出し(朝日、八日)などがあげられる。

また、先に女性冠詞の箇所で言及した「女子力」ということばは、ステレオタイプ表現に分類した。「身に着ける物や香水にこだわりがあって、女子力は半端なく高い」(読売、五日夕刊)のように、かつては「女らしい」と

表20 女性に関するステレオタイプに基づく表現

(単位:件)

		記事例	朝日	毎日	読売	合計
女性ステレオタイプ表現(女らしさ)	容姿、服装、年齢などに関するもの	「淡いピンクのユニフォームが青色のコートに映えた」「清楚な美少女」「職場の花」(朝日)「肌を露出したドレス姿のお嬢さんがなんと多いこと」「妖精のような美少女」「6人の美女が笑顔で「アニョハセヨ」と出迎えてくれた」(毎日)「きゃしゃな体、あどけない顔立ち」「満族は美人が多いとされ」(読売)	31	26	19	76
	心理、行動、役割などに関するもの	「汚職許さぬ「鉄の女」」「夫を影で支えた妻」「不実な男と知りつつひかれてやまない女心」「男の子が身近にいと「かわいいところを見せなきゃ」と常に視線を意識してしまい、あえて自分を弱く見せる」「着物を着ると、女性はみんな目が変わる」(朝日)「魔女的」「しなやかでたくましい女性の存在」(毎日)「女子力」「お得感」もあり女性に人気」「心身のリラックスやダイエットの効果が期待でき、幅広い女性から支持されている」「女性らしい素顔の一方で、こと野球に関しては一途」「女性向けのカラフルなスポーツタイプ」(読売)	63	36	54	153
	その他の女性に関するステレオタイプ	「「ドラマ10」は家事を終えた女性が深く浸れる内容」「アフリカ人女性初の平和賞を受賞」「女の戦い」(朝日)「なでこ型政治」「女性の地位向上は政治体制の民主化を準備するという側面を持つ」(毎日)「女子会」「婚期を逸しそうな三女」「小学校の頃バイオリンを習っていたんですが、当時、女の子の習い事というイメージ」(読売)	36	18	17	71
小 計			130	80	90	300
母親ステレオタイプ表現(母親らしさ)	女性は母になるものとの前提に立つもの	「インテリ女でも例外なく5人も6人も子供を産み」(朝日)「4人の子どもを持つ母でもある」(毎日)	1	1		2
	心理、行動、役割に関するもの	「発展で失ったものも多い。その一つは「母性」ではないでしょうか」(朝日)「2児の母ならばの切羽詰まった悲痛なやり取り」「赤ちゃんを抱いたお母さん」「まさに「母は強しです」(毎日)「母親ならではの歌詞がほほえましい」「母の一人は「街中よりは安心だけど安全な(略)場所ではやく遊ばせたい」と願う」「元女優でお母さんの小桜葉子さんは明るく、太っ腹」(読売)	14	20	28	62
	その他の母親に関するステレオタイプ	「「母」という存在のノスタルジーが国を越えて共感を呼ぶのだろう」「革命の母」「市民は「ママ・サーリーフ」と親しみを込めて呼ぶ」(朝日)「母なる宗教」「ママ友」「私にとってそれは母の味」(毎日)「32歳で3人の子の母親でもある」「結婚・出産を経ての6作目」「聖母のような存在」「一児の母である(略)外資系女性社員」(読売)	13	9	19	41
小 計			28	30	47	105

記事例		朝日	毎日	読売	合計	
主婦ステレオタイプ表現	主婦の役割に関するもの	「お正月の支度をするのは女ばかりで、男は知らん顔で映画を見に行く」（朝日）「調理全般はママの担当でした」（毎日）「50～60歳代の主婦層に人気という」「主婦の視点でのアドバイス」「結婚以来、欠かさず作ってきた夫のお弁当」（読売）	1	2	8	11
その他のステレオタイプ	性的存在、妻・嫁・姑役割等	「商売女」「夫の出世のために自宅パーティーを開く」「嫁入り」（朝日）「夫の陰で奮闘する断家の「おかみさん」」「世話女房」「もっとも「トルコ風呂」といっても現在のソープランドとは違い、水着姿の女性がサービスするだけののだが」「首相の女房役の藤村修官房長官」（毎日）「復讐を支えたジリアン夫人」「若妻」（読売）	7	13	8	28
合計		166	125	153	444	

いうことばで女性の心理、行動、役割などをあらわしていたものが、最近では「女子力」という新たな装いをほどこしたことばで表現するようになっている。「女らしさ」に関するその他の女性のステレオタイプ表現は、表20三段目に示したように、朝日三六件、毎日一八件、読売一七件の合計七一件がカウントされた。記事の具体例としては「生鮮野菜を扱う店を増やし、女性客の割合を今の35%から早期に40、50%に上げたい」（朝日、一四日）、「初の女性鑑識官」（毎日、四日夕刊）、「バイオリンを習っていたのですが、当時、女の子の習い事といったイメージが非常に強かった」（読売、一四日夕刊）といった表現がみられた。ノーベル賞を受賞したサーリーフを「アフリカ初の女性大統領」（毎日、八日）と記していたいくつかの記事も、ここに分類してある。⁽¹⁾

また、「女子会」「花盛り」（読売、五日）という見出しにおける「この店で女子会を開く場合、（略）デザート盛り合わせを、チョコレートフォンデュに変えられるほか、ポテトフライなどが食べ放題となる」という記述のように、「女子会」ということばがしばしば登場し、このことばにまつわるステレオタイプ表現がみられた。「女子会」のほかにも、「○○女子」「○○ガール」など、「女子」や「ガール」という語が頻繁に使われるようになったのは二〇〇〇年の中頃からであると思われる。

「肉食女子」ということばは、〇六年にコラムニスト・深澤真紀が最初に命

名したとされているが、⁽¹²⁾同時期に深澤が名づけた「草食男子」は、〇九年の流行語大賞のトップテンに選ばれた。マンガ家・安野モヨコが名付け親となつて、同じく〇九年の流行語大賞にノミネートされた「女子力」のほか、「女子会」ということばは、二〇一〇年の流行語トップテンにあがつている。ほかに、「山ガール」「森ガール」「写ガール」など、若い女性をさす「ガール」という英語を付帯した新造語を眼にすることも多い。これら「女子」や「ガール」のつくことばの多用は、女性がさまざまな分野で活躍するようになってきている気運を感じさせるが、一方で、時代は「いくつになつても女子」であることに価値を置くようになってきているのだろうかとの疑念も、ぬぐいきれない。⁽¹³⁾

これら「女らしさ」に関するステレオタイプ表現を小計すると、表20のように、朝日が一三〇件で最多、毎日は一八〇件でやや少なく、読売は九〇件、三紙合計で三〇〇件となつた。

次に、「母親らしさ」をめぐるステレオタイプ表現として、女性は母親になるものという前提に立つた表現は、表20四段目に示したように、朝日で一件、毎日一件の計二件がみられただけだったが、表20五段目の母親の心理、行動、役割に関しては、朝日一四件、毎日二〇件、読売二八件と、合計六二件に達した。記事としては、「女手一つでああいった商売をやっているんですから」(朝日、六日)、「時折笑う様子は指導者というよりも、アフリカの典型的なお母さんのような振る舞いでもあった」(毎日、八日)、「でも、一番おいしいのは『ママが作ったごはん』という歌詞が、共感を呼びそうだ」(読売、五日夕刊)といった、母親としての役割を決めつけるような文章や紋切り型の文章が目立つた。

表20六段目のその他の母親に関するステレオタイプ表現については、朝日一三件、毎日九件、読売一九件の合計四一件がカウントされ、「市民は『ママ・サリーフ』と親しみを込めて呼ぶ」(朝日、八日)、「二三子はネパール

を訪れる日本人登山隊の隊員から母親のように慕われている」(朝日、一一日夕刊)、「命の母なる水は遠い宇宙からの恵みだったか」(毎日、六日夕刊)、「32歳で3人の子の母親でもある」(読売、八日)、などの記事を例としてあげることができる。また、「嵐会では、ママ友との会話にありがちな家庭や学校、仕事の愚痴がない」(読売、四日)のように、比較的最近のことばである「ママ友」ということばも少なからずみられ、ここにカウントした。この文章はまた、「母親たちの会話は家庭や学校、仕事の愚痴を言い合うものだ」という固定観念にとらわれているともいえよう。これら「母親らしさ」に関するステレオタイプ表現を小計すると、朝日二八件、毎日三〇件、読売四七件の合計一〇五件となった。

表20下段の、「主婦役割」に関するステレオタイプ表現は、朝日一件、毎日二件、読売八件の合計一一件が数えられた。これらの中には、勤め人の夫と家事・育児・介護などに従事する妻がワンセットであることを前提とした厚生年金の支給開始年齢引き上げについてのニュース解説のほか、前節でも紹介した「主婦の視点でのアドバイス」(読売、一四日夕刊)といった、十年一日のごとき紋切り型の表現がみられた。

最後に、表20最下段「その他のステレオタイプ表現」における、女性を性的存在としてとらえるステレオタイプ表現と、「嫁」や「姑」を含む「妻」役割に関するステレオタイプ表現についてみると、朝日七件、毎日一三件、読売八件の合計二八件がみられ、「(BGは) 俗語で『商売女』の意味」(朝日、一日夕刊)、「夫唱婦随で始めた1軒の喫茶店」(毎日、四日)、「いい世話女房ぶり」(毎日、一三日夕刊)、「50年以上にわたって公私ともに自分を支えてきた妻」(読売、一三日夕刊)、といった記述例をあげることができる。

このほか、内閣官房長官や野球のキャッチャーに対して用いられる、「女房役」という「決まり文句」が、今回も三件みられた。総理大臣やピッチャーを支える役柄をこのように呼びならわしているわけだが、これは男性につ

いての表現ではあるものの、妻が果たすべき役割を前提としていることから、これまでと同様、「妻役割」に関するステレオタイプ表現を含む「その他のステレオタイプ表現」に分類している。「首相の女房役の藤村修官房長官」(毎日、一五日)、「首相就任時に女房役である官房長官に大平を起用したこと」(読売、一日)、といった政治関係の記事や、東都大学野球のピッチャーに対する「序盤に先制されても、女房役が途中交代しても」(読売、一四日)といった表現は、まさに政治とスポーツの世界で男性が総理大臣や投手という主役として登場し、一方で、その主役の男性をフォローする脇役の男性が、表に出て来ない存在である妻Ⅱ「女房」のアナロジで語られている。

(2) 男性に対するステレオタイプ表現

それでは、男性についてのステレオタイプ表現の種類や分量はどのようになっていだろうか。

表21に示した「男らしさ」に関するステレオタイプ表現のうち、容姿、服装、年齢などに関するものは、朝日二件、毎日一件、読売一九件の合計五三件みられた。「若さや容姿も合わせ、身近な国王として絶大な人気を集める」(朝日、四日)、「当時の二枚目の中でもずば抜けて美男子だった」(朝日、一五日)、「193センチの長身。素足で彫刻を磨く姿が画になる」(毎日、六日)、「紺色のスーツに薄い紫色のネクタイ姿で」(読売、六日夕刊)、「ダンディーで銀座好き(な渡辺温)」(読売、一四日)、「彫りの深い顔立ちと鋭い眼光で周囲を睨む姿」(読売、一五日)など、「イケメン」(朝日、一日ほか)ということばが定着しているように、男性の容姿やファッションなど「いい男ぶり」について言及する記事は少なくない。一方で、「風采が上がらず、75歳の後期高齢者」(毎日、一日)といった「冴えない男」についての紋切り型表現もみられた。

男性の心理、行動、役割などに関するステレオタイプ表現は、表21二段目に示したように、朝日で四六件、毎日で二六件、読売で六四件みられ、合計すると一三六件に達した。これは、全男性ステレオタイプ表現二五四件の五

表21 男性に関するステレオタイプに基づく表現

(単位：件)

		記事例	朝日	毎日	読売	合計
男性ステレオタイプ表現（男らしさ）	容姿、服装、年齢などに関するもの	「女性を惑わせる繊細な色男役が似合った」「若さや容姿も合わせ、身近な国王として絶大な人気を集める」（朝日）「風采が上がらず、75歳の後期高齢者」「193センチの長身。素足で彫刻を磨く姿が画になる」「ハンサムな慶大生」（毎日）「紺色のスーツに薄い紫色のネクタイ姿で」「超イケメン」（読売）	23	11	19	53
	心理、行動、役割などに関するもの	「裏表のないビュアな男」「永遠の釣り少年」（朝日）「恨みつらみなどまったく持たないのが落合博満という男だ」「姫守る兵士のキャラ」「わんぱく坊主」「男は黙って、の「美学」（毎日）「最近では男の人が草食系と言われ熱いものを失っている。今こそ血を濃くして熱さを取り戻す」「熱血漢」「男ってことへのプライドが」「凛々しい」「やる時は、やる男」（読売）	46	26	64	136
	その他の男性に関するステレオタイプ	「ちょい悪オヤジ」「ラッキーボーイ」（朝日）「党の清新なイメージづくりを担う」（毎日）「政治の世界を理解していないサラリーマン的発想だ」（読売）	8	6	6	20
小 計			77	43	89	209
父親ステレオタイプ表現（父親らしさ）	男性は父になるものとの前提に立つもの	「将来のイクメン」「前回の優勝時には生まれていなかった（略）まな娘の夢を叶えた最高の父」（読売）			2	2
	心理、行動、役割に関するもの	「子どもと妻のことを思うと、危険な原発はすぐにも廃止してほしい」「自分を鍛えてくれる父をまだ求めている」（朝日）「伊藤さんはお父さんのようにあったかくて、面白くて」（毎日）「上原謙さんは家庭的なお父さんでした」「厳格な父」「娘を嫁に出した父親の寂しさ」「家でも父親として君臨していたが」（読売）	16	2	13	31
	その他の父親に関するステレオタイプ	「大黒柱」（朝日）「建国の父」（毎日）	2	2		4
小 計			18	4	15	37
夫ステレオタイプ表現	夫の役割に関するもの	「家族愛と反骨心が今回も山崎を奮い立たせた」「食事を妻にまかせきりでは、自分の摂取カロリーを調整できない」（朝日）「夫唱婦隨で始めた一軒の喫茶店」（毎日）	2	1		3
その他のステレオタイプ	性的存在、その他	「看板に「トルコ風呂・温泉のデパート」とある。信州からやって来たうぶな若者が「何ですか、これ」と聞くと」（毎日）「色男」「川で洗濯をする女がむき出しにしていた白い脛を見た仙人が、空を飛ぶ神通力を失い、地上に落ちた話」「モテ男」（読売）		2	3	5
合 計			97	50	107	254

四%に相当し、女性の心理、行動、役割などに関するステレオタイプ表現が全女性ステレオタイプ表現に占める割合よりも高くなっている。「問題を普遍化して客観的な正義を見出そうとする男性的な倫理」(朝日、二日)、「あの日の男泣きが、失われかけていたカルプス人気を復活させた」(朝日、六日夕刊)、「男は黙って、の『美学』か」(毎日、一四日夕刊)、「(無精子症とわかり)男のプライドが崩れそうな出来事に見舞われる」(読売、六日夕刊)、「真に不羈独立の男子の生涯とはいかなるものか」(読売、八日)、「最近では男の人が草食系と言われ熱いものを失っている。今こそ血を濃くして熱さを取り戻す」(読売、一二日夕刊)、「男としての生き方のポリシー」(読売、一四日夕刊)など、男は「勇ましく」あるべしといった形容が、乱用の様相を呈している。また、「最近話題の『年の差婚』。男性の夢?」(朝日、一二日)といった表現もみられた。「年の差」とは、通常、男性が年上で女性がかなり年下のケースを意味することが多いので、これも「勇ましさ」のバリエーションの一つといえるかもしれない。それに対して、「果実系男子」(朝日、一五日)、「レギンス男子」(読売、八日)、「ジーパン刑事とは対極の草食系男子」(読売、八日夕刊)のような、これまでにない表現も出てきている。「○○系男子」といったことばにみるように、女性のもとされる趣味を持ち、行動様式を取る、あまり「勇ましくない」男性を、「男子」と呼ぶようである。

その他の「男らしさ」に関するステレオタイプについては、表21三段目にみるように、朝日八件、毎日六件、読売六件の合計二〇件が数えられた。具体的な記事例としては、「母も喜ぶと思います」(こらえきれぬように顔をくしゃくしゃにした照之の涙は、45年間の雪を溶かすに十分、熱かった)(朝日、七日)、「ラッキーボーイ」(朝日、八日)、「(小泉進次郎衆議院議員は)党の清新なイメージづくりを担う」(毎日、七日)といった記述があげられる。また、「ちよい悪オヤジ」(朝日、七日)ということばも流行っており、ここに分類した。

なお、「成人男性約1000人分の致死量にあたる15・06グラムを紛失したと発表した」（読売、七日）という記事があったが、なぜこういうときに「男性」が例にあげられるのか。公正で正確な表現が、もとめられる事実報道においてさえ、男性標準のステレオタイプ表現が当然のように用いられている。

これら「男らしさ」に関するステレオタイプ表現を小計すると、表21にみるように、朝日七十七件、毎日四三件、読売八九件の、三紙合わせて二〇九件となっている。

次いで、「父親らしさ」に関するステレオタイプのうち、男性は父になるものとの前提に立つ表現は、表21四段目に示したように、読売で二件みられたのみだった。「将来の『イクメン』間違いなし？」（一三日夕刊）のような、「イクメン」ということばは、先に男性の性を含み込んだ職業語としてカウントしてあるが、文脈によって「父親になるもの」というステレオタイプ表現としても重複して分類した。

一方、父親の心理、行動、役割に関するものは表21五段目のように、朝日一六件、毎日二件、読売一三件であった。たとえば、「先ほどまで笑っていた父親も、静かに泣いていた」（朝日、七日）、「子どもと妻のことを思うと、危険な原発はすぐにも廃止してほしい」（朝日、一〇日）、「娘を嫁に出した父親の寂しさ」（読売、四日夕刊）、「厳格な父」（読売、一四日夕刊）などが例としてあげられる。

表21六段目の、その他の父親に関するステレオタイプは、「家族愛と反骨心が今回も山崎を奮い立たせた」（朝日、一一日夕刊）、「建国の父」（毎日、九日）など朝日で二件、毎日で二件みられ、読売はゼロ件だった。これら父親らしさに関するステレオタイプ表現を合計すると、朝日一八件、毎日四件、読売一五件の計三七件となった。

次に、夫の役割に関するステレオタイプ表現は、表21下段にあるように、朝日で二件、毎日で一件、読売でゼロ件みられ、「夫唱婦隨」（毎日、四日）といった表現が典型例としてあげられる。

表22 3紙合計掲載面別女性のステレオタイプ表現

(単位：件)

		1面	総合・政治	国際	経済	科学	教育	生活	文化・メディア	地域	スポーツ	社会	合計
女性ステレオタイプ表現(女らしさ)	容姿、服装、年齢などに関するもの	3	4	7	3		3	3	37	1	8	7	76
	心理、行動、役割などに関するもの	6	19	8	12		4	23	53	12	6	10	153
	その他の女性に関するステレオタイプ	2	16	4	3			13	23	2	5	3	71
	小計	11	39	19	18		7	39	113	15	20	20	300
母親ステレオタイプ表現(母親らしさ)	女性は母になるものとの前提に立つもの			1					1				2
	心理、行動、役割に関するもの	2	4	3	1		7	9	29			7	62
	その他の母親に関するステレオタイプ	4	4	8			3	5	12	1		4	41
	小計	6	8	12	1		10	14	42	1		11	105
主婦ステレオタイプ表現	主婦の役割に関するもの		2		1			4	3			1	11
その他のステレオタイプ	性的存在、妻・嫁・姑役割等	4	2	1				1	16		1	3	28
合計		21	51	32	20		17	58	174	16	20	35	444

表21最下段、男性を性的な存在として固定化する表現や、その他の表現については、朝日がゼロ件、毎日が二件、読売は三件であった。「(マンガに書かれた自分だが)漫画より色男ではないでしょうか」(読売、一日)、「川で洗濯をする女がむき出しにしていた白い脛を見た仙人が、空を飛ぶ神通力を失い、地上に落ちた話」(読売、一四日夕刊)といった記事がみられたが、男性といえば「好色」な性質をもっているという発想に根ざした文章やことばは、この仙人の話のみだった。

(3) ステレオタイプ表現の紙面別傾向

次に、ステレオタイプ表現の出現状況を、掲載紙面別に分析してみよう。女性に関するステレオタイプ表現の三紙合計については表22に、男性に関するステレオタイプ表現の三紙合計については表23に掲げた。

女性に関するステレオタイプ表現は、三紙とも「文化・メディア」で多くみられ、特に「女らしさ」の心理、行動、役割に関する表現が朝日二〇件、毎日一七件、読売一六件の合計五三件、次に容姿、服装、年齢に関する表現が、朝日一八

表23 3紙合計掲載面別男性ステレオタイプ表現

(単位：件)

		1面	総合・政治	国際	経済	科学	教育	生活	文化・メディア	地域	スポーツ	社会	合計
男性ステレオタイプ表現 (男らしさ)	容姿、服装、年齢などに関するもの	1	3	6			2	3	20	6	9	3	53
	心理、行動、役割などに関するもの	3	19	3	6		1	9	55	10	26	4	136
	その他の男性に関するステレオタイプ		4				1		10		3	2	20
	小計	4	26	9	6		4	12	85	16	38	9	209
父親ステレオタイプ表現 (父親らしさ)	男性は父になるなるものとの前提に立つもの										1	1	2
	心理、行動、役割に関するもの		2	2	1		4		15	2	3	2	31
	その他の父親に関するステレオタイプ		1								2	1	4
	小計		3	2	1		4		15	2	6	4	37
夫ステレオタイプ表現	夫の役割に関するもの						2					1	3
その他のステレオタイプ	性的存在、その他							4		1			5
合計		4	29	11	7		8	14	104	18	45	14	254

件、毎日七件、読売一二件の合計三七件と多くみられた。この結果、これらを含めた「文化・メディア」での「女らしさ」に関するステレオタイプ表現は、三紙合わせて一一三件ののぼった。また、「母親らしさ」の心理、行動、役割に関する表現も、朝日八件、毎日一二件、読売九件の合計二九件とやや多くなっており、「母親らしさ」全体のステレオタイプ表現は、合わせて四二件となった。

以上のほかにも、朝日の「総合・政治」で女性の心理、行動、役割に関するものが一三件と目立った。「総合・政治」での「女らしさ」のステレオタイプ表現は、三紙を合わせると三九件となる。また、読売の「生活」で、女性の心理、行動、役割などに関する表現および容姿、服装、年齢などに関する表現が目立ち、「生活」に関する「女らしさ」のステレオタイプ表現も、合計三九件となった。

表22により、紙面のどの分野に女性に関するステレオタイプ表現が多いかをみると、「文化・メディア」において、女性や母親の心理、容姿などにふれる表現を中心に一七四件がカウントされ、次に「生活」で五八件、「総合・政治」で

五一件が続き、比率にするとこれら三種の紙面で女性ステレオタイプ表現全体の六割を占めている。

男性に関するステレオタイプ表現の紙面別傾向については、三紙を合計した表 23 でみると、女性ステレオタイプ表現同様、「文化・メディア」で多くみられ、一〇四件と男性ステレオタイプ表現全体の四割以上を占めている。中でも、「男性らしさ」の心理、行動、役割に関する表現が五五件、そして容姿、服装、年齢などに関する表現が二〇件みられた。また「父親らしさ」の心理、行動、役割に関する表現は一五件が数えられた。

一方、女性のステレオタイプ傾向とやや異なるのは、「スポーツ」で合計四五件、約二割のステレオタイプが数えられたことである。「パワー(力)」の世界を扱うこの領域では、男性についての紋切り型表現が多いことが明らかとなったかたちである。

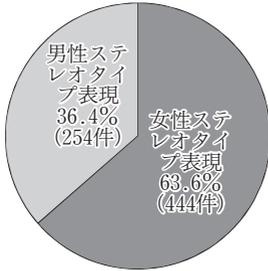
紙面をさらに大きく三つのジャンルにくくって女男別にみると、女性のステレオタイプ表現については、「硬派系」に一二四件、二七・九%、「軟派系」に二八五件、六四・二%、「社会系」に三五件、七・九%という分布となった。「文化・メディア」が含まれる「軟派系」が六割以上を占めるが、先に述べたように「総合・政治」を含む「硬派系」のウエイトも低くはない。片や男性のステレオタイプ表現は、「硬派系」五一件、二〇・一%、「軟派系」一八九件、七四・四%、「社会系」一四件、五・五%となった。実数でも比率でも、女性の方が「硬派系」の紙面ジャンルでステレオタイプに扱われる傾向が強い。「硬い」紙面に女性を登場させる際には、記者が、認知の経済性のために、文字通り「鉄の女」(毎日、八日)や「革命の母」(朝日、八日)といった定型文を用い、読者もまたそれによって認知に関する経済的な閲読行為を行っているのである。

(4) ステレオタイプ表現の女男別比率と頻度の違い

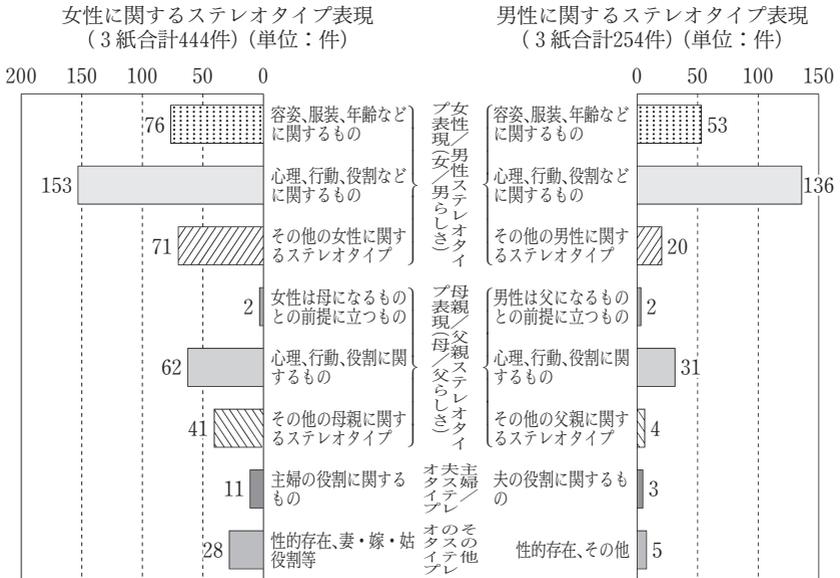
あらためてステレオタイプ表現の女男別総数をみてみると、女性に関するステレオタイプ表現は三紙合計で四四

四件、男性に関するステレオタイプ表現は二五四件で、両者の合計は六九八件となった。この総数を一〇〇%とすると、グラフ13のように、女男それぞれ六三・六%対三六・四%の比率となり、女性に関するステレオタイプ表現が、全体の三分の二を占めることが判明した。

女男に関するステレオタイプ表現の内容別の内訳は、グラフ14に示した通りである。左右を比較してみると、女男とも似たような傾向を示していることがわかる。中でも、女男とも「女らしさ」「男らしさ」を強調する表現のうち、「心理、行動、役割などに関するもの」がそれぞれ一五三件、一三六件



グラフ13 ステレオタイプに基づく表現の女男比率 (3紙合計698件)



グラフ14 ステレオタイプ表現

と最も多いが、次に多いのは「容姿、服装、年齢などに関するもの」で、それぞれ七六件、五三件を数えた。これら二項目に関しては、女男間でそれほど大きな差はない。「母親らしさ」「父親らしさ」に関しても、「心理、行動、役割などに関するもの」がそれぞれ六二件、三一件と、他のステレオタイプ項目に比べ多用されている。

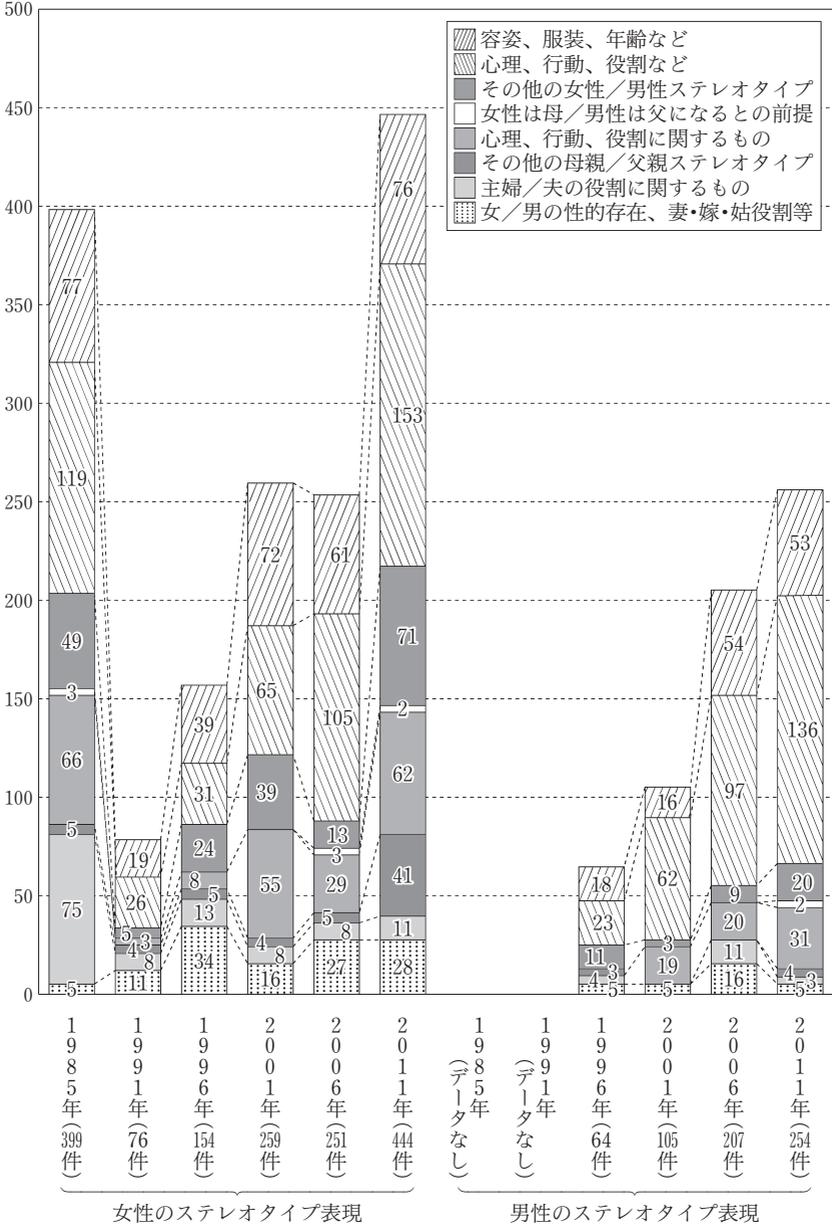
(5) ステレオタイプ表現の経年変化

ステレオタイプ表現についての六回にわたる（男性ステレオタイプ表現に関しては四回分の）調査結果を積み上げグラフで示したものが、グラフ 15 である。

女性に関するステレオタイプ表現は、一九八五年が特に多く、合計で三九九件みられたが、九一年に大幅に減って七六件となり、その後はおおむね増加傾向に転じ、今回は八五年の水準を超える四四四件を数えた。内訳は、「女性らしさ」の心理、行動、役割などに関する表現と容姿、服装、年齢などに関する表現がおおむね一位と二位を占めている点で変わりはないが、八五年以降、心理、行動、役割についての記述が増加する傾向にある。

「女性とはこういうもの」と決めつけつけるような表現は、「鉄の女」「美人」「女性向け」のような「決まり文句」のほか、「○○女子」「女子会」「女子力」、さらには「母親らしさ（その他）」に分類した「ママ友」といった新しいことばのバリエーションを増殖させながら、比較のことばづかいに慎重なメディアである新聞をも巻き込んでいるようである。こういったことは、いったん使い出せば、細かいニュアンスを捨象する（認知的経済性を発揮する）ことで「わかったような気になる」ため、さらに使われることになる（もつとも、そういったことばの多くはそう長続きせず、一時の流行としてやがてはすたれることになるのだが）。

一方、男性に関するステレオタイプ表現は、九六年に六四件、〇一年に一〇五件、〇六年に二〇七件、そして今回は二五四件と、明らかに増加傾向が認められる。中でも男性の容姿、服装、年齢などについてふれる記事が〇六

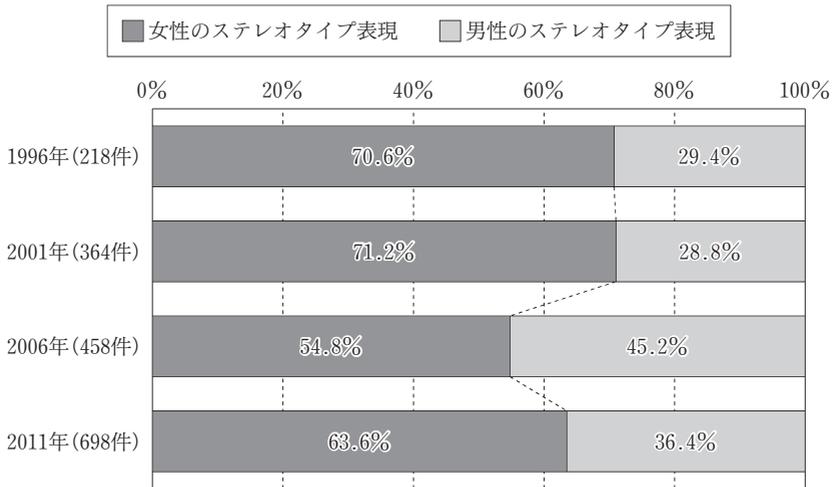


グラフ15 女男別ステレオタイプ表現の経年変化 (3紙合計) (単位: 件)

年から増加し、また今回は、男性の心理、行動、役割などについての表現の伸びが著しく、女性のそれよりも急ピッチで増えている。

グラフ16は、女性に対するステレオタイプ表現と男性に対するステレオタイプ表現の合計を一〇〇%とし、その内訳比率の推移をみたものである。これによると、ステレオタイプ表現全体に占める男性表現のウェイトが増しつつあることがわかる。「男泣き」「大黒柱」「熱血漢」といった古典的な表現に加え、「イケメン」「イクメン」「草食系」「ちょい悪オヤジ」といった新しいことばが紙面上に出てきているということは、性別を形容するにあたってこれまでのステレオタイプにとらわれないより多様な表現が現出しつつあるということなのか、それとも、男性も女性同様、さらなるステレオタイプの型にはめ込まれつつあると考えるべきなのか、今後の推移を注意深く観察する必要があるだろう。

特に「イケメン」という表現は、これまで容姿やファッションに関して、もっぱら女性がステレオタイプにもとづいて言及されてきたものが、男性もまたそうした言及の対象に



* 1985年、1991年は男性のデータなし

グラフ16 性別ステレオタイプ表現の男女比率経年変化(3紙合計)

なつてきていることを示している。性別にかかわりなく、「見た目」に価値を置く時代になりつつあるというこのような社会の趨勢に、批判的なまなざしを持ち続けることが必要だと思われる。⁽¹⁴⁾

Ⅱ 女性隠し表現の動向

5 女性の存在が新聞紙面のおもてから隠される表現

(1) 男性を世帯・家族の代表とみなす表現

これまで、女性であることをことさら強調する表現をみてきた。それに対して、女性が紙面に登場させられず、その存在が背後に隠されてしまう表現もある。家族を世帯単位でとらえる傾向の強い日本では、たとえばある家が火事になったときも、その家の夫や父、あるいは祖父といった、男性が世帯・家族の代表者として表現されることが多い。また、女性や子どもが、事件・事故の当事者であっても、その夫や父など男性が世帯主や保護者として記事の最初に提示され、そのあとでその妻、その子どもとして言及されることがほとんど慣例となつてきた。そうした、女性が、社会的代表制を剝奪され、主体としてのありようを隠蔽されてしまう表現を、本研究では「女性隠し」表現と呼んできた。この章では「女性隠し」表現の量的調査の集計結果を示し、考察を加える。

まず最初に、新聞記事に記載された姓名のうち、姓を●で、名をA、Bなどアルファベットで示した場合、「●Aさん方」の「A」に男性名が記され、家族を代表していると考えられる表現は、表24上段に示したように、朝日三件、毎日三件、読売二件、合計八件が数えられた。一方「●Aさん方」の「A」に女性名が入り、家族を代表していると思われる表現は、朝日一件、毎日三件、読売三件の合計七件であつた。このように、今回は両者の数値に

表24 “女性隠し”の表現 家族や夫婦の代表

(単位：件)

		朝日	毎日	読売	合計
家 族	「●Aさん方」のAが男性	3	3	2	8
	「●Aさん方」のAが女性	1	3	3	7
保護者	「●Bさんの長女」のBが男性	5	7	8	20
	「●Bさんの長女」のBが女性	5	5	1	11
夫 婦	「●Cさん(男性)の妻」という表現	21	29	15	65
	「●Cさん(女性)の夫」という表現	6	10	7	23

*●(マル印)は姓、Aなどアルファベットは名を表す

ほとんど違いはみられなかったが、後の経年比較のところでも述べるように、これまでは「●Aさん方」の「A」には男性名が多用され、世帯を代表するのが通例となっており、そこに女性名が入ることはほぼ皆無に近かった。

次いで、子どもの保護者として、女男のどちらが出てくるかについてみると、「●Bさんの長女(次女・三女など)」の「B」が男性(父親等)であるケースは、表24中段に示したように、朝日五件、毎日七件、読売八件の計二〇件であった。それに対して、「B」に女性(母親等)が入っていたのは、朝日五件、毎日五件、読売一件の合計一件であった。男性が保護者として出現する件数が女性のほぼ二倍となっているが、先の「●Aさん方」の場合と同じく、「●Bさんの長女」の「B」が女性である事例がこれまでほとんどなかったことからみれば、大きな違いである。

今回、家族の代表としてにせよ、親の代表としてにせよ、女性名がいつもより多く使われていた理由の一つとして、三月十一日の東日本大震災に関する特別記事や紙面で、津波被害に遭って無事だったり死に別れたりした家族・夫婦についての記事が多く、その中で女性が「主人公」として扱われるものがみられたことがあげられる。また、昨今明らかになっている単身者やシングルマザー・ファザーの増加という、日本における家族形態の変化も影響を与えているかもしれない。

(2) 男性の姓名のあとに付随して表現される女性の名

次に、既婚者が記事の中で扱われる際に、「●Cさん(男性・夫)の妻」「●Cさん

〔女性・妻〕の夫〕のように、当該者ではなく、その人の夫ないし妻の姓名がまず先に表示され、それに付随する形で本人が表示される場合がしばしばみられる。表24下段は、夫と妻のうちどちらに付随して表示されるかについて、その出現頻度を示したものである。まず、「●Cさん(男性)の妻」というように、女性が男性(夫)に付随して紹介されるケースは、朝日二一件、毎日二九件、読売一五件の合計六五件みられた。それに対し、「●Cさん(女性)の夫」のように、男性が女性に付随して表現されるケースは、朝日六件、毎日一〇件、読売七件の合計二三件となった。このように、女性が男性に付随して紹介されるケースは、男性が女性に付随して紹介されるケースのおよそ三倍に達しており、夫婦の代表は男性(夫)であるという表現が、新聞ではいまだに主流となっている。しかし、これも経年変化のところを示すように、妻の姓名のあとに夫が出てくる事例が、このところやや増えている点に注目しておきたい。

新聞紙面上で、家族、保護者、夫婦について言及がなされる際に、「女性隠し」あるいは「男性隠し」の表現がどれほど行われているかをみるために、家族、保護者、夫婦の代表として男性名ないし女性名が用いられる六つのパターンを、使用合計を一〇〇%として比率化して示したのがグラフ17である。女性の姓名が男性の姓名に付随して、男性が家族を代表するケース、親の名に男性名が用いられて保護者を代表するケース、夫の姓名に妻の名が付随して男性が夫婦を代表するケースは、それぞれ六・〇%、一四・九%、四八・五%で、これら「女性隠し」表現の合計は六九・四%となった。これに対し、女性の姓名に男性が付随する「男性隠し」表現は、家族五・二%、保護者八・二%、夫婦一七・二%の合計三〇・六%で、「女性隠し」表現の二分の一以下にとどまっている。総じて「女性隠し」表現の背景には、男性が「人間」としての標準・規準であるという考え方・文法が横たわっている。それゆえ女性が事件・事故の当事者ないし記事の中心人物という、いわば「主人公」である場合においてさえ、男

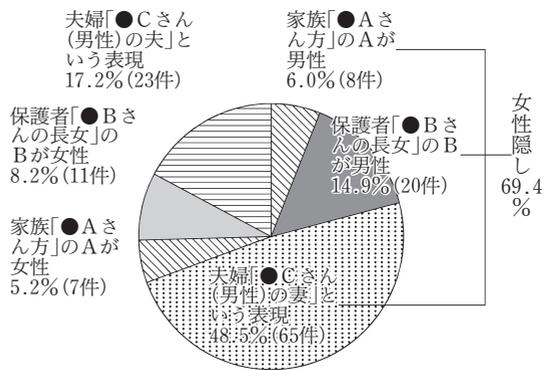
性や夫の方が主となった、その「付随者」という形で表現されることが多いのである。しかし、後述するようにこれにも変化の兆しが全くないわけではない。

(3) 「女性隠し」表現の紙面別傾向

新聞紙面上で家族、保護者、夫婦が言及される際、掲載紙面によって「女性隠し」表現が用いられる頻度に違いがみられるかどうかを、三紙合計で示したのが表25である。この表からは、家族、保護者、夫婦に関する表現のいずれにおいても、「社会」において「女性隠し」表現が最も多数を占めていることが見て取れ、中でも「●Cさん(男性・夫)の妻」という表現が「社会」で三〇件と多用されていた点が特徴的といえるよう。この表現は、「文化・メディア」と「総合・政治」でも、おのの一一件、一〇件使用されていた。これに対し、夫が妻に付随してあら

わされる「●Cさん(女性・妻)の夫」という表現は、「社会」において一七件用いられていた。前回までに比べ、今回この表現が数を増やしているのは、先にも指摘したように、東日本大震災において津波で夫を亡くした妻が、社会面の東日本大震災に関するシリーズ記事などに登場したことに起因している。

次に、各紙面を大きく三つのジャンルにくくって、そこでの「女性隠し」表現の状況をみてみると、一面や政治などをグループ化した「硬派系」分野で目立つのは、「●Bさん(男性)の長女(次女・三女など)」という表現と、「●Cさん(男性)の妻」という表現である。また、この「●Cさんの妻」という表現は、文化やスポーツな



グラフ17 家族・保護者・夫婦の代表の内訳比率 (3紙合計134件)

表25 掲載面別“女性隠し”の表現 家族、夫婦の代表（3紙合計）

（単位：件）

	1面	総合・政治	国際	経済	科学	教育	生活	文化・メディア	地域	スポーツ	社会	合計
家 族	「●Aさん方」のAが男性		1					2			5	8
	「●Aさん方」のAが女性						2		2		3	7
保護者	「●Bさんの長女」のBが男性	1	1	6				1			11	20
	「●Bさんの長女」のBが女性										11	11
夫 婦	「●Cさん(男性)の妻」という表現	4	10	1			6	11	1	2	30	65
	「●Cさん(女性)の夫」という表現	1		1			2	2			17	23

どをグループ化した「軟派系」でも多くみられた。

(4) “女性隠し”表現の経年変化

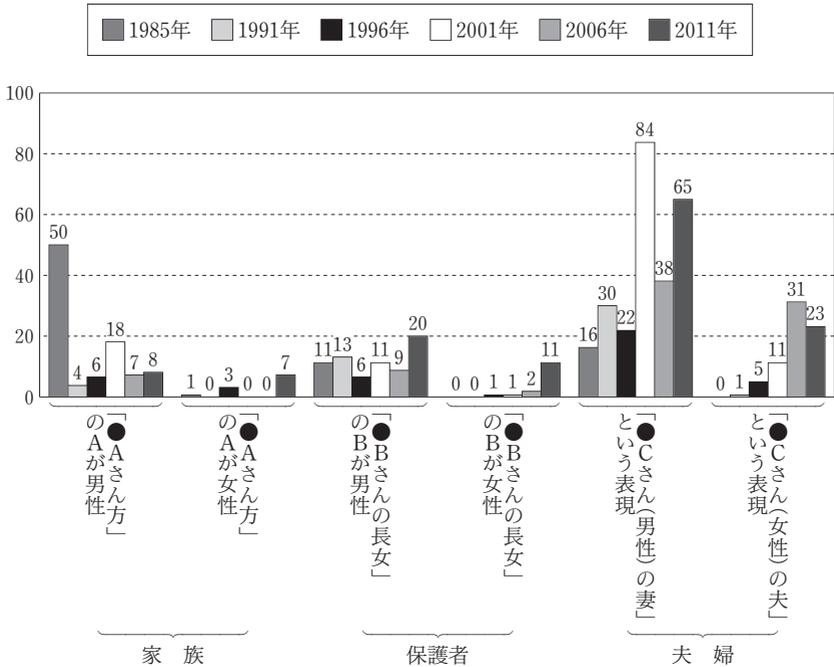
家族・親・夫婦に関する新聞表現において、女性が隠される（ないしは男性が隠される）表現が調査時ごとどのように増減しているかを示したのが、グラフ18である。

まず、家族の代表として、「●Aさん方」のAに男性が入る表現は、八五年当初は五〇件と、相当数みられたが、九一年には激減し、その後はほぼ一〇件以内で推移している。ただし、数件の違いではないが、九一年以降増える傾向にあるようにもみえる。それに対し、「●Aさん方」のAに女性が入る場合は、毎回ゼロ件か数件で推移してきたが、今回は男性とほぼ同数の七件となった。また、子どもの保護者を示す「●Bさんの長女」のBが男性の場合は、八五年の一一件から増減を繰り返しつつ、今回は二〇件と、これまでに多くなかった。一方で、「●Bさんの長女」のBに女性が入る場合は、これまでほとんどみられなかったが、今回は一一件と、大きく増えている点特徴的である。

このように、世帯（家族）の代表、親（保護者）の代表として新聞に氏名を掲載される女性は、殺人事件で殺害された当事者、火事で死亡した当事者、そして東日本大震災で津波から難を逃れた母親などの事例でみられた。その際、本人がもともと単身者だったので「●Aさん方」となったのか、母子家庭だったので「●Bさんの長女」となったのか、つまり単身者の女性や母子家庭が増えていることを反映しているのか、あるいは夫婦の場合でも妻（女性）が世帯や親（保護者）の代表として記述されるケースが出てきているのか

どうかまでは、記事上の表記からだけでは明確にはならなかった。

次に、記事中の夫婦に関して、妻または夫のどちらが代表として表現されているかについて、経年変化をみてみると、○一年の「●Cさん(男性)の妻」という表現、あるいは○六年の「●Cさん(女性)の夫」という表現のように、数値が突出している時期もあるが、おしなべて「●Cさん(男性)の妻」のように夫が夫婦を代表する表現も、「●Cさん(女性)の夫」のように妻が夫婦を代表する表現も、ともに増加傾向がみとめられるといつていいだろう。夫が夫婦の代表となっているケースの方がはるかに多い点では変わりがないものの、今回は、3・11に関連する記事の中で、「釜石市(略)の八幡登志男さん(80)と妻のイネさん(80)は」(読売、七日夕刊)のように、女性が男性に付随する形で記述される記事だけでなく、「『なで



グラフ18 家族・親・夫婦の代表の経年変化(3紙合計)(単位:件)

しこ直売店』を営む藤原かつ子さんと夫の康男さん」(毎日、六日)といったように、夫である男性が妻である女性に付随する形の書き方もみられた。

このように、妻が夫に付随する形で紹介される、これまで圧倒的に多く用いられてきた表現方法だけでなく、夫が妻に付随して紹介される記事がみられるようになってきた事実はあるものの、この数値は、先に指摘したように、単にシングル女性、夫を亡くした女性の単身者、母子家庭の増加、あるいは女性が事件や事故の当事者になることが増えてきた趨勢を反映しているに過ぎないのかもしれない。今後の検討が必要であろう。どのような家族形態であれ、女性が男性の背後に隠されることなく、その記事の夫婦の代表として夫同様に妻が、親の代表として父親同様に母が、そのことがらにに応じて、主体として適切に表現されるために新聞は、男性がカップルやイエを代表する存在となってしまうている社会慣習や社会意識を、根源的に変革していくことに資する記事を積極的に掲載するとともに、自らも、女性が「隠されない」表現を率先して構築する努力を行うことが必要だろう。

(5) 男性標準を内包した「少年」「青年」等の使用

男性が標準・規準となることばの事例として、先に、性別を含み込んだ職業語の章で、男性の性を含み込んだ「サラリーマン」という語を取り上げたが、男性を標準・規準としたことばの別の事例として、性別を含み込んでいないにもかかわらず、受け手が男性をイメージしてしまう「女性隠し」の表現が存在する。女男を含む年少者や若年を意味する「少年」「青年」が、それにあたる。少年法、青年の家、といった用語にみられるように、少年も青年も公的には女男を含む若い年齢層の人びとをさすことばとされているが、実際には男性の若年層をさすことばとして用いられることが多い。

表26は、「少年」「青年」「青少年」といった語が記事中で含意している性別について判定を行ったものである。

表26 “女性隠し”の表現 男性標準のことは

(単位:件)

		朝日	毎日	読売	合計
少年	少年 小計	36	41	40	117
	少年①明らかに男子	35	41	35	111
	少年②女子男子含む未成年 少年③その他	1		5	6
少年少女・少女	少年少女	4	1	3	8
	少女	30	31	32	93
青少年	青少年 小計		1	2	3
	青少年①明らかに男子				
	青少年②女子男子含む一般 青少年③その他		1	2	3
青年	青年 小計	10	16	8	34
	青年①明らかに男性	9	16	7	32
	青年②女性男性含む 青年③その他	1		1	2

まず、「少年」は、朝日三六件、毎日四一件、読売四〇件の合計一七件がカウントされた。このうち「明らかに男子」をさすと考えられる用法が九割超の一七一件を占めたのに対し、女子も含む「未成年一般」をさすと思われるものはゼロ件で、「その他の使い方」(判断できず)が六件みられた。

毎日七日「ひつたくり容疑 少年ら3人逮捕」という見出しの記事では、「少年」が、見出しも含めて四件みられた。この犯行には女子もかわっており、「少女」が三件用いられていた。結局、ひつたくりをしたのは高校一年の「男子生徒」、とび職の「少年」、無職の「少女」の三名であったのだが、前述の見出しの中では、「少年」が中心に記され、「少女」は「ら」に還元されて、その存在は明示されないままである。同様に、別の事件の記事「少年ら再逮捕へ」(毎日、一三日)という二箇所の見出しでみられた「少年」も、記事本文中で「少女」と「少年」が女男で使い分けられているので、明らかに男子を意味している用法といえよう。

「少年」の語は、未成年者の女子を含む場合もあるが(第五回調査では二〇三件中四二件みられた)、今回は既に示したように、そうした用法は一件もみられなかった。また、「野球少年ら」(朝日、九日)、

「被災地支援で少年更生」(読売、八日)という記事については、その当事者たちが男子だけなのか、あるいは女子を含むのか、記事のみでは判別しづらかったため、「その他」に分類した。

それに関連して、ことばの表層では性別は含まれないようにみえながら、事実上は若年の男子を意味する「少年」に「少女」を加えた「少年少女」という語をみたところ、三紙合計で八件が数えられた。また、「少女」単独使用は朝日三〇件、毎日三一件、読売三二件の合計九三件であった。このように、新聞では、「少年」は事実上未成年の男子を意味し、未成年の女子は「少女」と称し分けられており、女男に対する表現が非対称的である。また、行政用語の「少年」のように、「少年」ということばが、男子とともに女子を含めて用いられることもあるところから、このことばには、男の年少者をさしているのか、それとも女の年少者も含めた年少者一般をさしているのか定かではないという曖昧さが、まわりついている。

「青少年」「青年」ということばについても、同様の指摘が可能である。まず、「青少年」に関しては、三件中いづれもが女性も男性も含む若者一般をさすものとして使用されていたが、単に「青年」とあるものに関しては、朝日一〇件、毎日一六件、読売八件の合計三四件中、そのほとんどを占める三二件が明らかに男性をさしており、女性も含むと思われる「青年」は皆無であった。たとえば、「チュニジア青年の抗議自殺が始まり」という小見出し(毎日、一日)や、「モダニズムの時代に生きた青年作家の内面の憂いと焦燥感が混然となり、にじみ出てくるようでもある」(読売、一七日)といった具合である。こうして、表面上は性別を示唆する語を含まないことから、一見ニュートラルにみえる「少年」「青年」という語が、その実男の少年・青年をさして数多く用いられ、それとは区別される形で女の少年が「少女」と呼ばれ、女の青年が「女子青年」「青年女子」と記されている実態が浮かび上がってくる。

表 27 掲載面別 “女性隠し” の表現 男性標準のことば (3 紙合計)

(単位：件)

	1 面	総合・政治	国際	経済	科学	教育	生活	文化・メディア	地域	スポーツ	社会	合計
少年 小計	3	7	5	1		2		41	10	2	46	117
少年①明らかに男子	3	7	5	1		2		41	9	2	41	111
少年②女子男子含む未成年									1		5	6
少年③その他												
少年少女								6		1	1	8
少女	3	11	1			3		46	15		14	93
青少年 小計		2		1								3
青少年①明らかに男子												
青少年②女子男子含む一般		2		1								3
青少年③その他												
青年 小計	1	5	1	1		4		19			3	34
青年①明らかに男性	1	4	1	1		3		19			3	32
青年②女性男性含む												
青年③その他		1				1						2

これら「少年」「青年」など男性標準のことばがどの面に掲載されているかについては、三紙合計の結果を表 27 に示した。まず、「少年」(合計一七件) に関しては、明らかに男性をあらわしているものが「社会」分野で四一件、「文化・メディア」で四一件使われていた。また、「少年少女」(合計八件) は、「文化・メディア」で六件用いられていた。それに対して「少女」は合計九三件で、そのうち四六件が「文化・メディア」に登場し、一五件が「地域」、一四件が「社会」で使用された。

「青少年」に関しては、数が少ないため確たる傾向はつかめないが、「青年」(合計三四件) は、明らかに男性を意味する語として、「文化・メディア」で最も多い一九件が用いられていた。

以上のように、「少年」「少女」「青年」といった若い世代をあらわすことばは、署名エッセイや芸術・芸能に関する紹介・評論などが多く含まれる「文化・メディア」で用いられる傾向が強い。

これら少年、青年などの語を、各紙面を大きく三つにくくった紙面ジャンル別にみてもみると、「少年」は、「軟派系」で五五件、「社会系」で四六件、「硬派系」で一六件使用されている。そのほとんどが男性を意味するものであったことは、先述の通りである。

一方、「少女」は、「軟派系」での使用が六四件と最多で、「硬派系」一五件、「社会系」一四件と、この二分野での使用頻度は高くない。「青年」の使用も「軟派系」で二三件と最も多く、「硬派系」で八件、「社会系」で三件となった。「少年」は主として「軟派系」と「社会系」、「少女」と「青年」はもっぱら「軟派系」の紙面ジャンルで使われている、という特徴がある。

(6) その他の男性標準の表現

事件・事故に巻き込まれた人たちの人数を報じる時や人口統計を掲載する時などに、全体の人数を示し、そのあとで女性に関して「うち女性〇〇人」と述べたり、女性をカッコに入れて表示するケースがある。こういった内数を用いた記事表現も、男性を標準とした「女性隠し」表現の一種と考えられるので、今回、女性を内数扱いする記事についてもカウントしてみた(表は割愛)。

その結果、朝日、毎日、読売とも、八日の「危機業務従事者の叙勲発表」に関する記事で、「叙勲の受賞者3627人(うち女性9人) (読売)」という表現に代表されるような、女性を内数扱いする記事が朝日で一件、毎日で五件、読売で二件みられた。

Ⅲ ダブルスタンダード表現の動向

6 敬称の使い分けにみるダブルスタンダード表現

(1) 同一記事中にみられる女性には「さん」、男性には「氏」の使い分け

新聞にあらわれた女性と男性に対する非対等な表現として見落としてはならないのが、ダブルスタンダード(二

重規準) 表現である。

新聞記事の中で、同じ地位や業績を有している女男が記事にされる際に、「男性はもっぱら『業績』や『公的役割』、女性は『美』や『ケア役割』」に言及され、両性に対して異なる言説の規準が適用されることがそれにあたる。また、女性の敬称には「さん」を、男性の敬称には「氏」を使い分ける傾向が新聞にはみられるが、フォーマルで権威的な印象を与える「氏」を男性に、より日常的で親近感はあるものの権威は氏より下との印象を与えがちな「さん」を女性につける敬称の使い分けは、新聞が日常的に使い続けているダブルスタンダード表現の典型といえるだろう。⁽¹⁵⁾

第六回目の今回の調査においては、過去にみられたような、たとえば「男性は『業績』や『公的役割』、女性は『美』や『ケア役割』」といった意識的・無意識的な性別役割分業観に基づく、女性と男性を異なった規準で表現し、報道するあからさまな二重規準表現は見当たらなかった。しかしながら、人物の姓名のあとにつけられる「さん」や「氏」などの敬称が女男で異なる傾向は、相変わらず数多くみられた。その「さん」と「氏」の女男による使い分けが定型化した形で表現されてきたのが、のちにみる死亡記事欄である。

最初に、一般記事の中で用いられている「さん」と「氏」の使い分けについてみておこう。

表 28 は、同じ記事中に女性と男性の双方が登場する場合に、①女性に「さん」、男性に「氏」の敬称をつける使い分け、②それ以外の女性と男性に対する敬称の使い分け(表の上段)、③女性にも男性にも「氏」をつける同一敬称、④女性と男性の双方に「さん」をつける同一敬称(表の下段)など、敬称の女男による使い分けをパターン化して、集計したものである。

それを見ると、まず、同一記事中に女男が登場したもののうち、女性に「さん」、男性に「氏」をつける使い分

表28 同一記事中に女男双方が登場する際の敬称の使われ方
(単位: 件)

		朝日	毎日	読売	合計
女男で使い分け	女性「さん」/男性「氏」 女性「氏」/男性「さん」 女性「女史」/男性「氏」 女性「ちゃん」/男性「君」 その他の女男別敬称	13	15	11	39
	小計	3	17	10	30
敬称女男とも同	女性「氏」/男性「氏」	11	19	16	46
	女性「さん」/男性「さん」	98	101	93	292
	女性「ちゃん」/男性「ちゃん」			1	1
	その他の女男同敬称	1			1
小計		110	120	110	340

け事例は、朝日一三件、毎日一五件、読売一件の、三紙合計三九件がみられた。また、その他の女男別敬称は、合計三〇件であったが、その中には、女子の子どもが「さん」で男子が「君」の使い分けがいくつかみられたほか、女性に「さん」がつけられ、複数の男性に「さん」と「氏」、女性に「氏」がつけられ複数の男性に「さん」、

女性が「さん」で子どもが「さん」と「君」など、さまざまな組み合わせがみられた。これらの女男で敬称が使い分けられているケースは、朝日一六件、毎日三二件、読売二一件の合計六九件であった。

それに対して、同一記事中に女男が登場する際に、女男双方ともに同じ敬称が用いられているものうち、女性男性ともに「氏」が使われているものは、朝日一件、毎日一九件、読売一六件の合計四六件であった。一方、女男ともに「さん」が用いられているケースは、朝日九八件、毎日一〇一件、読売九三件、合計二九二件で、それ以外は表にみる通りの結果となった。女男で敬称を使い分けていない事例の合計は、朝日一一〇件、毎日一二〇件、読売一一〇件の、合計三四〇件で、使い分けをしていない数は、使い分けをしている数の五倍弱である。

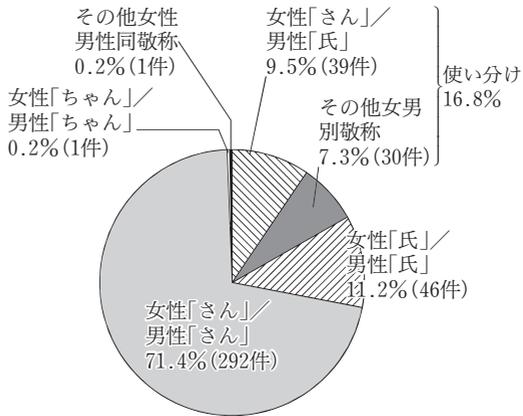
同一記事中に女男双方が登場する記事における敬称の使い分けの有無の比率をグラフ19によってみると、女性と男性が同一記事中に登場する件数は合計四〇九件であり、そのうち女男別敬称のものは女性が「さん」、男性が「氏」の使い分けが三九件、九・五%、その他の使い分けが三〇件、七・

三%で、両者合わせて一六・八%となる。

全体で八割以上が使い分けを行っていないわけだが、女性には「さん」をつけ、男性には「氏」をつける二重規準に基づいた用法がいまだに一割以上存在する事実には、着目する必要があるだろう。それらの中には、ビルマ（ミャンマー）についての記事で、同じ社会運動家同士であるにもかかわらず、女性の「アウン・サン・スー・チーさん」に対して男性の「トウ・ゾウ・ラット氏」（朝日、一日）、「民主化指導者」の「アウンサンスーチーさん」に対して、外相の「ワナマルンルウィン氏」（毎日、二日）のように、また、この年ノーベル平和賞を受賞したリーマ・ポウイーと〇九年に同賞を受賞したバラク・オバマについて、それぞれ「リーマ・ポウイーさん」と「オバマ氏」のように敬称を使い分けたり（朝日、八日夕刊）、過去のノーベル平和賞受賞者に対し、「アウン・サン・スー・チーさん」と「劉曉波氏」と敬称を使い分けるケース（読売、一日）などが散見される。日本の文化人についても、「森ミドリさん」と「阿刀田高氏」（読売、八日夕刊）のように、女性と男性に対する敬称の使い方に二重規準がみられた。

(2) 単独出現の場合にみられる「さん」と「氏」の傾向

以上は、同じ記事の中に女男がセットで登場した場合の使い分けについてのデータであったが、新聞記事の中では、登場人物が一人の場合の方がむしろ多い。そこで、そうした場合に、女性ないし男性にどのような敬称がつけ



グラフ19 同一記事中に女男双方が登場する場合の敬称使い分けの有無（3紙合計409件）

表29 同一記事中に一方の性が単一敬称で登場する際の敬称 (単位: 件)

		朝日	毎日	読売	合計
女性単独使用	女性単独「氏」	35	28	23	86
	女性単独「女史」				
	女性単独「さん」	326	400	388	1114
	女性単独「ちゃん」	8	12	11	31
	女性単独その他				
	女性ニックネーム		4	9	13
小計		369	444	431	1244
男性単独使用	男性単独「氏」	977	644	698	2319
	男性単独「さん」	627	796	839	2262
	男性単独「ちゃん」	6		5	11
	男性単独「君」	17	12	37	66
	男性単独その他		1	1	2
	男性ニックネーム	21	11	21	53
小計		1648	1464	1601	4713
その他の敬称使用	女性内別敬称	10	2	2	14
	男性内別敬称	27	11	11	49
	同性内別敬称と異性内別敬称	8	5	1	14
	性別不明	7	17	4	28

られているかを集計し、比較してみた。表29は、女性または男性が記事中に単独で出現した際の呼称をカウントしたものである。女性が単独で出現するのは朝日三六九件、毎日四四四件、読売四三一件、三紙合計一二四四件となった。

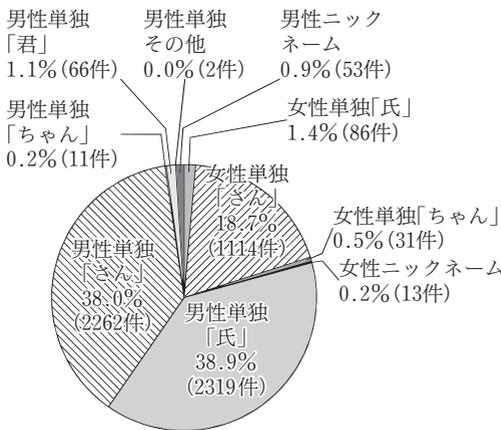
表29の上段にみるように、女性が単独で登場し、「氏」がつけられているものは、朝日三五件、毎日二八件、読売二二件の合計八六件であった。それに対して、女性に「さん」がつけられているものは、朝日三二六件、毎日四〇〇件、読売三八八件の、合計一一一四件であった。女性が「さん」の呼称で登場する場合は、「氏」で登場する場合の一三倍であり、女性は圧倒的に「さん」づけで呼ばれている。このほか、女性が「ちゃん」「ニックネーム」などで呼ばれる場合については、表29に示した通りである。なお今回、女性に「女史」という呼称がつけられていたケースは一件もなかった。

それに対して、男性が紙面上に単独で出現するケースは、表29中段に示したように、朝日一六四八件、毎日一四六四件、読売一六〇一件、三紙合計では四七三三件に達する。これは、女性の総登場数一二四四件に比べてはるかに多く、四倍近くとなる。

内訳をみると、男性が単独で登場し、その人物に「氏」がつけられているものは朝日九七七件、毎日六四四件、読売六九八件の、合計二二一九件である。一方「さん」が付されているものは、朝日六二七件、毎日七九六件、読売八三九件で、三紙合計では二二六二件となり、「氏」と「さん」がおおよそ半半ずつ、といった恰好である。先に見た女性につけられる「氏」と「さん」の一三倍にも達する数量的ギャップに比べると、大きな違いである。このほか、男性が「君」で出現するケースが計六六件、また、ニックネームで出現するケースが合計五三件みられた。

このほか、表 29 下段にみるように、女性が複数登場した際に、ある人には「氏」が、別の人には「さん」がつけられる、あるいは同一人物が二度目に言及される際に「氏」が「さん」に変わる、母親が「さん」で娘が「ちゃん」の組み合わせ、といった、同一記事内で異なる敬称が与えられているものが計一四件みられた。また同一記事中に男性が複数登場した時に、それぞれ異なる敬称が用いられていたものは、朝日を中心に合計四九件を数えた。

これら、どちらかの性が単独で出現する場合の合計を二〇〇％として、女男別の敬称別件数を図示したものが、グラフ 20 である。総登場件数は、「その他の敬称使用」を除いて、五九五七件であった。そのうち、女性が単独で登場し「氏」がつけられているものは、わずか一・四％でしかない。また、女性に「さん」がつけられているものは、全体の一八・七％である。一方、男性が



グラフ 20 記事中に女男が単独で登場する場合の敬称の使われ方 (3 紙合計 5957 件)

表30 面別にみた同一記事中に男女双方が登場する場合の敬称使い分け
(3紙合計)(単位:件)

		1面	総合・政治	国際	経済	科学	教育	生活	文化・メディア	地域	スポーツ	社会	合計
女 男 で 使 い 分 け	女性「さん」/男性「氏」	2	11	14			1	1	4			6	39
	女性「氏」/男性「さん」												
	女性「女史」/男性「氏」												
	女性「ちゃん」/男性「君」												
	その他の女男別敬称		3	2			4		4	3		14	30
小計	2	14	16			5	1	8	3		20	69	
敬 称 女 男 と も 同	女性「氏」/男性「氏」	3	16	15					7	2		3	46
	女性「さん」/男性「さん」	8	27	10	3		7	38	59	25	3	112	292
	女性「ちゃん」/男性「ちゃん」											1	1
	その他の女男同敬称								1				1
	小計	11	43	25	3		7	38	67	27	3	116	340

単独で登場する場合は、先述のように「氏」と「さん」の量が拮抗しており、前者が三八・九%、後者が三八・〇%を占めている。要約的にいえば、新聞に登場する女男の割合は、男性が大多数を占め、彼らに対して、「さん」または「氏」が、ほぼ同比率で用いられている。一方、女性は、出現する割合自体が少ない中で、ひとたび登場した場合には、もっぱら「さん」づけで呼ばれることになる。

なお、単独で登場し、ニックネームで記載されていたケースとしては、男性では「寅さん」「ダル」「さかなクン」「ナベサダ」「浜ちゃん」、女性では「EPO」「アッコちゃん」「MIYU(ミユ)さん」といったものがあつた。

(3) 同一記事中にみられる「さん」「氏」使い分けの紙面別傾向

表30は、同一記事の中に女男両方が登場する場合の、敬称のつけられ方を紙面別にみたものである。

まず、表30上段の女性が「さん」、男性が「氏」で使い分けられているケースは、「総合・政治」と「国際」で目立っており、それぞれ一件、一四件となつている。先に紹介したビルマにおけるスーチーと政治家の男性に対する「さん」と「氏」の使い分け例や、ノーベル平和賞受賞者に関する性別による呼称の使い分けを始めとして、政治や国際に関連する面で看取されたことと符合する。また、「社会」で六件みられた事例の一つとして、小沢一郎が政治資

金規正法違反の容疑で強制起訴された裁判をめぐる談話記事で、「江川紹子さん」「高村薫さん」と女性の識者たちがみな「さん」づけで紹介されている中、小沢一郎について語る際には全て「小沢氏」となっていた(朝日、七日)ことがあげられる。

その他の女男別敬称が「社会」で一四件と多かったのは、東日本大震災のシリーズ記事の中で、罹災した家族が取りあげられる際に、親たちが「さん」で子どもたちが「ちゃん」「君」で記載される事例が多かったことなどが影響している。

これら合計六九件みられた女男別使い分けの掲載ジャンルを大きく三つにくくってみると、「一面」「総合・政治」「国際」「経済」「科学」を含む「硬派系」が三二件、四六・四%、「教育」「生活」「文化・メディア」「地域」「スポーツ」を含む「軟派系」が一七件、二四・六%、そして「社会」の「社会系」が二〇件、二九・〇%となった。これは「その他の女男別敬称」(計三〇件)も入れた数値だが、女性が「さん」で男性が「氏」の組み合わせのみ(計三九件)でみてみると、「硬派系」二七件、六九・二%、「軟派系」六件、一五・四%、「社会系」六件、一五・四%となり、「硬派系」において女性は「さん」、男性は「氏」と使い分ける傾向が顕著であることがみとれる。

次に、表30下段にみるように、女男とも同敬称のものは合計三四〇件みられた。そのうち女男とも「氏」が使用されていたものは、「総合・政治」と「国際」で目立っており、それぞれ一六件と、一五件、一方、女男とも「さん」が使われていたものは、「社会」一一二件を筆頭に、「文化・メディア」五九件、「生活」三八件、「総合・政治」二七件、「地域」二五件が目につく。

これらを前述の大きな三つの紙面領域のくくりでみてみると、女男とも「氏」がつけられているもの(合計四六

表31 面別にみた同一記事中に一方の性が単一敬称で登場する場合の敬称
(3紙合計)(単位:件)

		1面	総合・政治	国際	経済	科学	教育	生活	文化・メディア	地域	スポーツ	社会	合計
女性 単独 使用	女性単独「氏」	14	20	30	9				3	3	4	3	86
	女性単独「女史」												
	女性単独「さん」	46	89	80	8	2	73	152	157	117	10	380	1114
	女性単独「ちゃん」	1	3				2	2	6		1	16	31
	女性単独その他												
	女性ニックネーム		3				1	1	2		3	3	13
小計		61	115	110	17	2	76	155	168	120	18	402	1244
男性 単独 使用	男性単独「氏」	170	1174	292	148		26	8	127	44	61	269	2319
	男性単独「さん」	80	275	78	31	40	85	196	466	246	51	714	2262
	男性単独「ちゃん」		1						1	3	2	4	11
	男性単独「君」	4	11	2			6		4	14	6	19	66
	男性単独その他											2	2
	男性ニックネーム	5	12				1		4	14	17		53
小計		259	1473	372	179	40	118	204	602	321	139	1006	4713
敬 称 使 用 の 他 の	女性内別敬称	2	1	3								8	14
	男性内別敬称	3	13	9	1	2			8	4	2	7	49
	同性内別敬称と異性内別敬称	3	2	2				1	2	1		3	14
	性別不明		3	2				10	5	5		3	28

件) に関しては、「硬派系」三四件、七三・九%、「軟派系」九件、一九・六%、「社会系」三件、六・五%と、大多数が「硬派系」の記事に出現していた。一方、女男とも「さん」がつけられているもの(合計二九二件)に関しては、「硬派系」が四八件、一六・四%に対して、「軟派系」が三三二件、四五・二%、「社会系」が一一二件、三八・四%となっており、「硬派系」が四分の三を占めた女男とも「氏」が用いられている場合とは異なった結果を示している。

(4) 単独出現の場合にみられる「さん」と「氏」の紙面別傾向

表31は、記事の中にどちらか一方の性が単独で出現している場合につけられている敬称を、掲載紙面別に三紙合計でみたものである。

既に記したように、女性が記事中に単独で登場する際に使われる敬称は、「さん」が圧倒的に多いが、表31の上段によると、その使用は「さん」の合計一一一四件のうち三八〇件、三割が「社会」面で使用されていた。次いで「文化・メディア」の一五七件、「生活」の一五二件が続き、「地域」の一七七件も目を引く。以下、「総合・政治」八九件、「国際」八〇件、「教育」七三件が

続いた。

それに対して、女性が単独で出現する際につけられた「氏」の合計八六件の紙面別内訳は、三〇件が「国際」、二〇件が「総合・政治」、一四件が「一面」、九件が「経済」等々というものであった。

女性に付された「さん」と「氏」を、三紙面領域の大きなくくりでみると、「氏」(合計八六件)については、「科学」も含めて「硬派系」が七三件、八四・九%、「軟派系」が一〇件、一一・六%、「社会系」が三件、三・五%であったのに対し、「さん」(合計一一一四件)については、「硬派系」一二五件、二〇・二%、「軟派系」五〇九件、四五・七%、「社会系」三八〇件三四・一%となった。女性の「氏」はもっぱら「硬派系」のジャンルでつけられており、一方、「さん」に関しては「硬派系」でも使われていないわけではないが、「軟派系」次いで「社会系」のジャンルで使用される傾向がより強いといえよう。

表31の中段により、男性が単独で出現する場合の敬称をみると、「氏」は合計二三一九件、「さん」は合計二二六二件と、全体として双方に大きな差がないことは先に確認した。しかし掲載紙面別には異なる傾向がみられ、「氏」の使用頻度が最も高い紙面は、「総合・政治」で一一七四件と群を抜いており、「氏」全体の半数を占めるほどであった。以下、大きく数値を下げて、「国際」二九二件、「社会」二六九件、「一面」一七〇件、「経済」一四八件が続く。

一方、男性単独の「さん」の敬称についてみると、「社会」で最多の七一四件が用いられており、「さん」の合計の三割を占めた。次いでやや差をもって「文化・メディア」が四六六件、「総合・政治」二七五件、「地域」二四六件、「生活」一九六件が続いた。「総合・政治」での使用が三位に位置するという点で、女性の「さん」とは異なる傾向がみられる。女性の「さん」が「総合・政治」で使われていた件数をあらためてみると八九件で、紙面順

位では五位であった。

男性の敬称「さん」と「氏」を、三つの大きなくりでみてみると、「氏」(合計二三一九件)については、「硬派系」が一七八四件、七六・九%、「軟派系」が二六六件、一一・五%、「社会系」が二六九件、一一・六%であった。一方「さん」(合計二二六二件)については、「硬派系」五〇四件、二二・三%、「軟派系」一〇四四件、四六・一%、「社会系」七一四件三二・六%となった。件数でみると、「総合・政治」で圧倒的に「氏」が用いられているため、「硬派系」の紙面ジャンルが「氏」が主に用いられる場となっているが、比率にすると、女性の「氏」の「硬派面」での登場率の方がやや上回っている。それ以外の「さん」と「氏」の敬称使用と三ジャンルに関しては、比率でみた場合、女男で大きな差異はみられない。

(5) 「さん」「氏」使い分けの経年変化

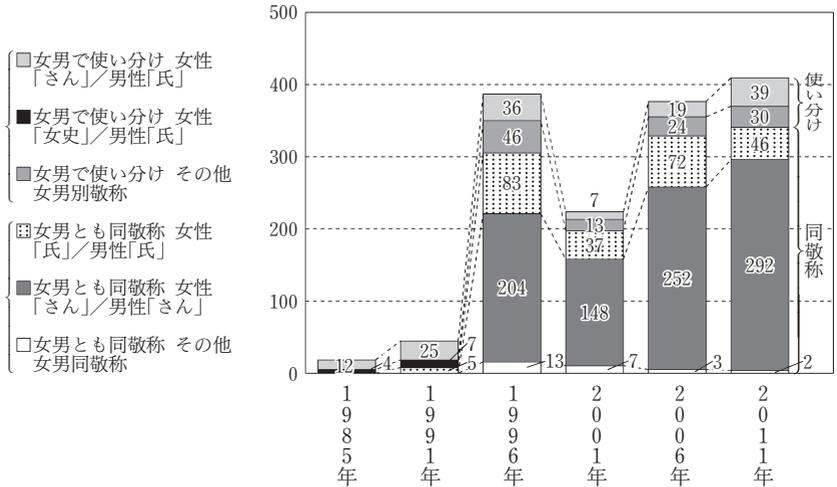
グラフ21は、同一記事中に女男が出てくる場合に、敬称の使い分けがなされている件数と、使い分けがなされていない件数の経年比較を積み上げグラフで示したものである。八五年および九一年の調査は、女性が「さん」に対して男性が「氏」、女性が「女史」に対して男性が「氏」という、使い分けを把握するのみにとどまっていたが、九六年以降、女男とも「氏」、女男とも「さん」の同一敬称などを加えて、現在のような六分類による集計を行っている。

まず、女性が「さん」、男性が「氏」の組み合わせは、増減を繰り返して傾向がつかみにくい。二〇一一年調査結果の三九件は、これまでの中で最も多い。ただ、〇一年を除いて、総数は、ほぼ四〇〇件前後でそれほど増減を示さず推移している一方で、両性ともに「さん」を使用する形が増えてきていることが認められる。

次に、女性・男性ともに「氏」を用いる同一敬称は、九六年以降増えたり減ったりを繰り返している。一方、女

男双方ともに「さん」づけのものは、このところ増える傾向にあるようだが、それにともなつて女性と男性に対する敬称の使い分けが減ってきているというわけではないようだ。グラフ 21 からは、女性が「さん」で男性が「氏」の使い分けおよび「その他の女男別敬称」は、必ずしも減っていないことが見て取れる。

グラフ 22 は、女男どちらか一方が記事中に登場する場合の敬称の用いられ方を示したもので、グラフ下に配した表の上段が女性単独出現、表の下段が男性単独出現の件数である。これによると、まず女性については、「氏」の使用が、調査を経るたびに明らかな増加傾向にあり、また「さん」の使用についても出現頻度が毎回増加してい



い女 分男 けで 使	女性「さん」/男性「氏」	12	25	36	7	19	39
	女性「女史」/男性「氏」	4	7	0	0	0	0
	その他女男別敬称	—	—	46	13	24	30
小 計		16	32	82	20	43	69
同女 敬男 称と も	女性「氏」/男性「氏」	0	5	83	37	72	46
	女性「さん」/男性「さん」	—	—	204	148	252	292
	その他女性男性同敬称	—	—	13	7	3	2
小 計		0	5	300	192	327	340

グラフ 21 同一記事中に女男双方が登場する場合の敬称
使い分けの経年変化 (3 紙合計) (単位: 件)
* -印は未調査

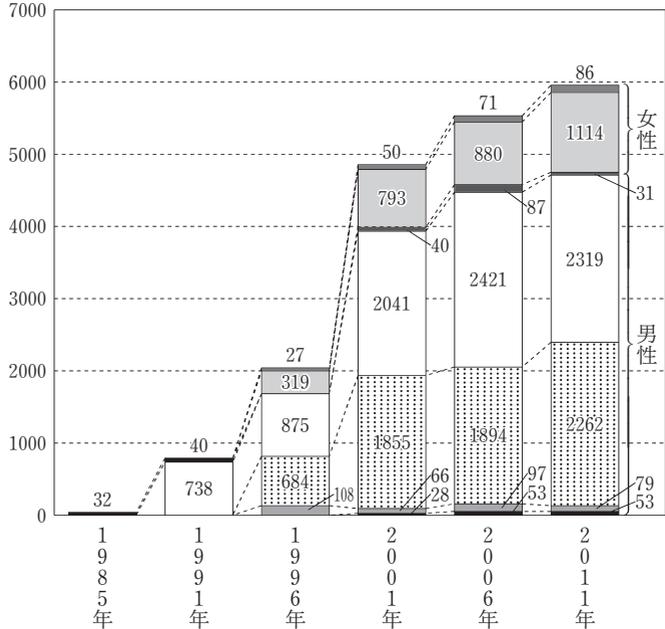
る。これら女性単独登場数の小計からは、新聞紙面に女性が登場する機会が増えていることが読み取れる。それに対し、男性に関しては、女性の場合に比較して、「氏」が大幅に多く使われ、「さん」の使用頻度を上回る傾向に変わりはないが、二〇一一年には「氏」が一〇〇件ほど減ったのに対して「さん」の使用が前回よりも二割近く増え、「氏」の使用頻度に拮抗する勢いをみせている。男性の単独登場の小計は、〇六年に「氏」をつけたもの、また一一年に「さん」をつけたものが増えたことを受けて、女性同様増加基調にあるように見受けられる。

グラフ22の積み上げグラフからも、〇一年から紙面に登場する人物件数が増えていることがわかるが、その大部分は男性の「氏」と「さん」である。一方、女性の「さん」も七九三件、八八〇件、一一一四件と少しずつ増えていることがみてとれるが、女性の「氏」の増加傾向については、視覚的には確認しづらい。

しかしながら、「氏」と「さん」の使用パターンを六分類で集計しはじめた九六年を起点として、女性単独出現時の「氏」「さん」、男性単独出現時の「氏」「さん」の使用頻度の伸び率を一年の時点で見ると、女性の「氏」は三・一八倍、女性の「さん」は三・四九倍の伸び率を示しているのに対し、男性の「氏」の増加は二・六五倍、男性の「さん」の増加は三・三一倍である。このように、女性に対する「氏」の使用は、男性に対する「氏」の使用を上回る伸び率を示している。加えて、女性に対する「さん」の使用も、わずかながら男性に対する「さん」の使用の伸び率を上回っており、「男性の牙城」であった新聞にも、女性が登場するようになってきていることは、確かなようである。⁽¹⁶⁾

なお、かつてみられた女性に対する敬称「女史」については、八六年より急激に減り、その後はほとんど使用されなくなっている。

- 女性単独使用 女性単独「氏」
- 女性単独使用 女性単独「女史」
- 女性単独使用 女性単独「さん」
- 女性単独使用 女性単独その他
- 女性単独使用 女性ニックネーム
- 男性単独使用 男性単独「氏」
- ▨ 男性単独使用 男性単独「さん」
- 男性単独使用 男性単独その他
- 男性単独使用 男性ニックネーム



女性単独使用	女性単独「氏」	0	2	27	50	71	86
	女性単独「女史」	32	40	10	1	1	0
	女性単独「さん」	—	—	319	793	880	1114
	女性単独その他	—	—	12	40	87	31
	女性ニックネーム	—	—	—	24	13	13
小計		32	42	368	908	1052	1244
男性単独使用	男性単独「氏」	—	738	875	2041	2421	2319
	男性単独「さん」	—	—	684	1855	1894	2262
	男性単独その他	—	—	108	66	97	79
	男性ニックネーム	—	—	—	28	53	53
小計		—	738	1667	3990	4465	4713

グラフ22 記事中に女男が単独で登場する場合の敬称の
 使われ方の経年変化(3紙合計)(単位:件)
 * -印は未調査

7 死亡記事の敬称の使い分けにみるダブルスタンダード表現

(1) 死亡記事中にみられる女性には「さん」、男性には「氏」の使い分け

新聞の社会面の訃報欄を中心に掲載される著名人の死亡記事は、物故者本人に加え、喪主や関係する身内などの名前が合わせて掲載される場合が多い。新聞では、長らく、男性が死者だと敬称は「氏」、その喪主や身内などが男性の場合にも同じく「氏」がつけられるのに対して、物故者本人、喪主、身内が女性だと「さん」がつけられるという定型化したダブルスタンダード表現が踏襲されてきた。

そういった、おかしな新聞界の「慣習」を、三紙のうちで最初に改めたのは毎日新聞で、一九九九年一月からの死亡欄の敬称は、死亡者本人や身内などが女性であるか男性であるかにかかわらず、「さん」で統一されるようになった。その後、朝日新聞も二〇〇二年四月より死亡記事中の登場人物全員を「〇〇さん」づけで表記するといふ、同様の方針を取り入れている。しかしながら、三紙の中で、唯一読売は、いまだ性別により「さん」と「氏」を使い分けている。今回も、過去の調査同様、死亡記事において死亡者本人と身内などに付される敬称の組み合わせの性による異同、および死者が単独で登場する場合の敬称のつけられ方を調べてみた。その結果を示したのが表32である。

表32のうち、最上部は、複数の登場人物に対する敬称が、女男で使い分けられているケースで、女性が「さん」、男性が「氏」の組み合わせは、読売のみ一八件カウントされた。読売新聞は、先ほど指摘したように、毎日と朝日が女男の区別なく「さん」づけで統一したあとも、いまだに女性には「さん」、男性には「氏」を機械的に使用している。たとえば、演劇評論家の「菅井幸雄氏」の喪主は、妻の「なみ子さん」といった具合である(読売、一五日)。

表32 死亡記事における敬称の使われ方

(単位：件)

		朝日	毎日	読売	合計
同一死亡記事 内、女性「さん」と「氏」 が 出 る 場 合 の 「さん」と「氏」	女性「さん」／男性「氏」 女性「氏」／男性「さん」 女性「女史」／男性「氏」 小 計			18	18
				18	18
同一死亡記事内 で同性同士が 出 る 場 合 の 敬 称	女性「氏」／男性「氏」 女性「さん」／男性「さん」 女性「さん」 同士 女性「氏」 同士 男性「さん」 同士 男性「氏」 同士 女性 同士 別敬称 男性 同士 別敬称 小 計	15	20	3	38
			1	1	2
		8	10		18
			1	8	9
		1			1
		24	32	12	68
単独死亡記事内 の「さん」と 「氏」	女性 単独 女性 単独 女性 単独 小 計				
		2			2
		2			2
男性 単 独 使 用	男性 単独 「氏」 男性 単独 「さん」 小 計	1		8	9
		8	9	1	18
		9	9	9	27

と表示されるものは合計九件みられた。その九件のうちの八件は読売で、元衆議院議員の「芝田弘氏」と喪主の長男「昌孝氏」という組み合わせ（八日）であった。

表32 二段目の、女性と男性が登場し、両者に同じ敬称がつけられている場合の、女性・男性ともに「さん」の組み合わせは、朝日一五件、毎日二〇件、読売三件の、合計三八件であった。一〇月三日各紙夕刊には、長唄の唄方である今藤文子の訃報が載ったが、朝日と毎日は、死亡者本人を「今藤文子さん」と記し、喪主も次男の「今藤美治郎さん」（朝日）、「美治郎さん」（毎日）としていたのに対し、読売は「今藤文子さん」「今藤美治郎氏」と、女男で異なった敬称を用いていた。なお、女男ともに「氏」が使用されているケースは、三紙全てで皆無であった。

次に、同性同士が同一死亡記事に出現する場合、女性同士がともに「さん」と表示される例は、表32にあるように合計二件とわずかで、両方とも「氏」と表示されることは皆無であった。一方、男性同士が「さん」と表示されるケースは合計で一八件、また、男性同士が「氏」

表33 面別にみた死亡記事における敬称の使われ方（3紙合計）

（単位：件）

		1面	総合・政治	国際	経済	科学	教育	生活	文化・メディア	地域	スポーツ	社会	合計
「合で同一の「氏」」	女性「さん」/男性「氏」				3					1	1	13	18
	女性「氏」/男性「さん」												
	女性「女史」/男性「氏」												
小計					3					1	1	13	18
「合で同一の「さん」」	女性「さん」/男性「氏」	2			8						1	27	38
	女性「さん」/男性「さん」											2	2
	女性「さん」/男性「さん」												
小計		2			8						1	27	38
「合で同一の「氏」」	女性「さん」/男性「氏」				2					1	2	13	18
	女性「さん」/男性「さん」											5	9
	女性「さん」/男性「さん」												
小計		2			2					1	2	13	18
「合で同一の「さん」」	女性「さん」/男性「氏」												
	女性「さん」/男性「さん」												
	女性「さん」/男性「さん」												
小計		4			11					3	3	47	68
「合で同一の「氏」」	女性「さん」/男性「氏」											2	2
	女性「さん」/男性「さん」												
	女性「さん」/男性「さん」												
小計												2	2
「合で同一の「さん」」	男性「さん」/女性「氏」	1		1								7	9
	男性「さん」/女性「さん」										1	16	18
	男性「さん」/女性「さん」												
小計		1		2							1	23	27

表32下段に示された、死亡者本人が単独で記載されている場合をみると、女性に関しては、「さん」がつけられたケースが朝日で二件みられたのみで、「氏」の敬称がついたものは一件もなかった。

それに対し、男性が単独で記されている場合は、「氏」が三紙合計で九件、「さん」が三紙合計で一八件用いられていたが、「氏」の使用のほとんどは、読売においてである。

(2) 死亡記事中にみられる「さん」「氏」使い分けの紙面別傾向

死亡記事が掲載されるのは、社会面が中心であるが、場合によっては一面、経済面、またスポーツ面に載ることもある。そこで、紙面別に死亡記事の敬称の使われ方の傾向を、三紙合計でみてみたい。表33に示したように、女性が「さん」で男性が「氏」の組み合わせは、「社会」で三件、「経済」で三件、「スポーツ」および「地域」でそれぞれ一件みられた。この一八件はすべて読売である。

女性と男性双方に「さん」が用いられているものに関しては、「社会」において二七件と最多で、一般紙面と同じ傾向

を示している。また、「経済」で八件みられ、男性は死去した企業の社長や重役として、女性は喪主である妻の名で併記されているものが多かった。経済面は、男性中心主義的企業社会における性別役割分業の実態を、死亡欄でも発現しているのである。また「社会」において、男性同士が両方とも「さん」のものが一三件（朝日、毎日）、男性同士が両方とも「氏」と記されているものが五件（読売）掲載されていた。これは、紙面がジェンダーの変数になっているというよりも、読売の頑ななスタンスをあらわしたものといえよう。

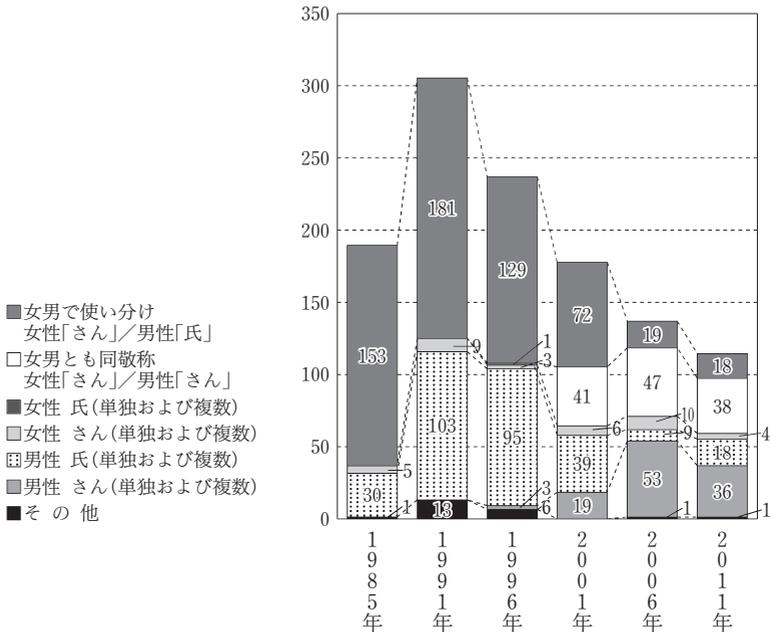
(3) 死亡記事中の「さん」「氏」使い分けの経年変化

死亡記事について、女男で「さん」と「氏」を使い分けている件数、女男とも「さん」と同敬称になっている件数、そして女性男性それぞれが単独または複数で登場する際に「氏」ないし「さん」が使われている件数を加えて積み上げグラフにしたものがグラフ 23 である。

このグラフにより経年変化をみると、まず明らかにするのは、九一年に死亡記事件数がピークを示してから、死亡記事それ自体が減少しているという事実である。次いで、そうした全体のトレンドの中の大きな変化としては、第一に、女性に対しては「さん」、男性に対しては「氏」を使い分けるケースが、九六年から〇一年にかけておよび〇一年から〇六年にかけて大幅に減少したこと、第二に、女男ともに「さん」をつける表現が九六年から〇一年にかけて大幅に増加したこと、第三に、九六年から〇一年にかけて、男性が単独ないし複数で登場する際に「氏」をつける表現が減少し、「さん」にシフトしたことであろう。これらの変化には、先述のように九九年に毎日女男の「さん」と「氏」の使い分けをやめて両性とも「さん」で表記しはじめ、〇二年に朝日が同様の措置を取ったことが影響している。

以上のように、新聞における訃報欄の敬称に関する女男のダブルスタンダードは、明らかに変化しつつあること

が見て取れる。ただし、
 ○六年以降、さらなる変化は認められない。そこには、○六年、一一年とも男女別敬称のあり方を頑として変えていない読者の姿勢が反映している。⁽¹⁷⁾



女男で使い分け	女性「さん」/男性「氏」	153	181	129	72	19	18
女男とも同敬称	女性「さん」/男性「さん」	0	0	0	41	47	38
女性	氏(単独および複数)	0	0	1	0	0	0
	さん(単独および複数)	5	9	3	6	10	4
男性	氏(単独および複数)	30	103	95	39	9	18
	さん(単独および複数)	0	0	3	19	53	36
その他		1	13	6	0	1	1
合計		189	306	237	177	139	115

グラフ23 死亡記事における女男の敬称使い分けの経年変化(3紙合計)(単位:件)

おわりに

本稿では、二〇一一年一〇月上半期の朝日・毎日・読売全国紙三紙の記事にあらわれたジェンダー表現の量的な分析を行った。同調査は、今回で第六回目となる。

女性強調、女性隠し、性の二重規準（ダブルスタンダード）表現という枠組でとらえてきた新聞分析の足かけ二五年にわたる経年変化を俯瞰してみると、これら三つのタイプの女性差別表現が少しずつ減少してきていることが読みとれる。その一方で、男性については、以前にはあまり目立たなかった服装や容姿への言及や、女性と同じようにその性を強調する男性冠詞つき表現が増えてきているといった、*多様化* ないしは *女性化* の現象が認められる。

この間に、「女流」のつく女性冠詞や「女史」という敬語はほぼ「死語」となったといつてよいだろう。また、女性の達成や業績に言及する際に女性らしさや家庭役割をすべり込ませるといった、女男の性別役割分業を固定化するステレオタイプ表現や、女性を性的存在として扱う表現などは減少しつつあるように見受けられる。そして、敬称を女男で使い分けるケースも減ってきている。

このように、徐々なる変化はみられるものの、四半世紀以上が経過した割には女男平等表現への歩みは遅々としており、男性を暗黙の標準とする表現がいまだ脈々と継続している。そうしたジェンダー表現の現状を、二〇一五年一月三十一日の朝日は、「女が生きる 男が生きる」シリーズの特集「メディアが映す女性」において、「先入観新聞の原稿にも」という中見出しを掲げ、以下に要約したように批判している。

朝日新聞社は二〇〇二年、「女性を飾り物として扱わない」「性別で役割・職業を固定しない」などからなる、女性男性表現についての表現ガイドブックを作成した。しかしながら、現在も、「週末、妻の代わりに子どもの世話をするイクメン」といった、妻が子どもの世話をするものとの思い込み根ざしたステレオタイプな記事が出稿されることがあり、校閲記者が指摘して「積極的に子育てにかかわる」といった表現に改まることが少なくない。

当時社内ガイドブックをまとめた元記者は、「『あからさまな表現はなくなり、女性に関する記事も増えたが、現場の記者の根底の意識が変わったとは言いきれない』と、本研究会と同様の見解を示している。

同特集記事では、朝日の読者代表にあたるパブリックエディターが、「『切り口や表現、問題意識を『女』や『男』でくくる記事が多い』とも述べている。新聞が、この「ダイバーシティ」の時代に、いまだに性別を二分し、その枠でとらえようとしていることは、本研究の調査結果からも明らかである。

本調査の対象年であった二〇一一年の3・11に東日本大震災という未曾有の災害を被ったことによって、日本社会では、経済成長や原発のエネルギーに頼らない社会づくり、弱者に寄り添う社会づくりといった、根源的な価値観の転換が生じるやに思われたが、そのような方向への変化は起こらなかった。むしろ、ナショナリズムが強まり、不寛容さが拡がって、経済成長再びといった「空気」に押されがちな中で、ヘイトスピーチや反知性主義、テロの台頭など、ともするとこれまで培ってきた近代の人権思想に根ざした考え方やことばが、もろくも崩れてしまいかねない状況にあるといっても過言ではなからう。いつなんどき、ジェンダーへのバッシングや、ジェンダー格差への「開き直り」、ジェンダー平等表現の後退、あるいは新たなジェンダー「不平等表現」の発生が生じないとも限らない。

これは、ひとり新聞メディアだけの問題ではなく、メディア文化全体の問題でもある。新聞、テレビ、ラジオ、

書籍、雑誌といった既存メディアの地盤沈下が著しい中であって、特に新聞メディアに関しては、若者たちのスマートフォンに媒介された、情報検索機能と SNS をはじめとするネットコミュニケーションによって、情報取得のあり方、思考のあり方、コミュニケーションのあり方が決定的に変化し、「新聞ばなれ」が確定してしまった感がある。それに伴い、「考えること」のみならず、「常識」や「教養」までもが、ないがしろにされる状況が現出している。

ネットコミュニケーションは、「興味が似ている者同士」を出会わせて擬似コミュニティを形成する力を有する。また、どんどん簡略になる検索システムによって吟味されずに流される情報やことばは、人びとの思考をますます短絡的なものにさせ、ヘイトスピーチや反知性主義、排他主義の温床ともなり得る。その一方で、既存ジャーナリズムは、ネットメディアに押されて、全体的に不活発となっており、さらには権力からの威圧によって萎縮する事態も生じている。

こうしたやや悲観的ともいえる社会的・メディア論的・文化的な時代背景にあって、これまで徐々にではあれ、より平等な方向に変化してきたジェンダー表現が、一挙に、あるいは徐々に反動を迎えないようにするには、どうしたらよいのだろうか。

そのためには、まず、女性の社会的な活躍が、単なる政策的「かけ声」ではなく、実態として現実化しなければならぬだろう。それには、人びとの意識と行動の変化が不可欠であるが、制度の構造的な変革が先行することで、人びとの意識や行動が変化するという側面もある。いずれにせよ、女性の社会的な活躍が可能となる効果的な施策が求められる。

もう一つは、その活躍を報じるメディア、なかんずくマスメディアの活性化である。本研究会が長らく分析して

来たように、新聞をはじめとするメディアのジェンダー表現の変革は遅々としたものである。メディアのコンテンツに溢れるジェンダー表現を一扫してゆくためには、ここでもメディアシステム内部での女性の活躍が求められる。これまでのメディア組織において自明視されてきた男性中心主義の視点や取材方法、性別二分法を前提とした表現方法にとらわれない平等・公正でマイノリティーの視点を持った、創造的なジェンダー表現ができる（少なくとも模索し試みようとする）女性や若い書き手が、積極的に起用される必要がある。それにもかかわらず、新聞・通信社における女性の記者の割合は、二〇一五年段階で、一七・六％、管理職に占める女性の割合はわずか五・一％にとどまっている。また、民間放送とNHKにおける管理職の女性割合は、それぞれ一三・一％と六・一％を占めるに過ぎないなど、異常ともいえる低水準にある。¹⁸⁾

内閣府男女共同参画局がこれまで四次にわたって出して来た男女共同参画基本計画では、「教育・メディア等を通じた意識改革、理解の促進」が記され、メディアの役割を施策の一つに常時位置づけている。¹⁹⁾ さらに『男女共同参画白書』においても、「メディアにおける男女共同参画の推進」の章を設けて、「女性の人権を尊重した表現の推進」「メディア分野における女性の参画の拡大」などを掲げ、そのための施策として「メディアの分野における政策・方針決定過程への女性の参画の拡大」をあげ、併せてダイバーシティに関する取り組みをうながしている。²⁰⁾

「紙媒体」としての新聞は今後も衰退していくかも知れないが、新聞（新聞社、新聞記者）の持つジャーナリズム機能、すなわち取材力、報道・解説・評論の機能、社会の価値観を反映する機能、主権者である人びとに知識や考える指標を提供するオピニオン機能、権力監視機能などの諸機能、および信頼性の高さは、ネット時代にあっても衰えてはならないものである。むしろ、「出会い」と「思考停止」と「タコツボ的断断」を生みかかないネットコミュニケーション時代にあつて、いよいよ必要なものとなってくることは間違いないだろう。新聞メディア従事

者には、人間や事象を表現する際に、マジヨリティーとされるものに対する違和感を大切にし、内部での議論を怠らないとともに、表現についての見直しを不断に行つてゆくことが求められている。その際のキーワードは「多様性と弱者の視点」であるが、これをどう紙面上で担保し、表現してゆくかが課題となる。

国連女性差別撤廃委員会からの批判的な勧告を受け、日本政府は、意思決定部門における女性の増加のみならず、長らく実現せずにきた夫婦別姓や配偶者控除の廃止といった施策に取り組みざるを得なくなっている。毎年発表される世界経済フォーラムによるジェンダー・ギャップ指数 (GGI) 一〇〇位以下をはじめとする国際的な男女平等諸指標における日本の順位の低さに対して、もはや手をこまぬいているわけにはいまい。一方において、ドメスティックバイオレンスやセクシュアルハラスメントに対する社会的注目度はこれまでになく高まってきており、女性に対する暴力を許さない社会の土壌が醸成されつつある。こうした社会的気運に、新聞メディアが積極的に対応する (積極的に報じる) ことよつて、これまで本研究が問題としてきた「女性強調」「女性隠し」「二重基準」に基づいた女性表現は、よりジェンダー平等なものになっていく可能性を増すだろう。そして、それは、人びとの意識や態度を変えることにもつながる。新聞メディアは、こうした社会的気運をどう牽引し、どう後押ししていくのか。今、その「本気度」が問われている。

注

- (1) 日本新聞協会研究所『現代の新聞読者とマスコミ接触の実態』日本新聞協会、一九八四年。
- (2) 田中和子「新聞にみる構造化された性差別表現」磯村英一・福岡安則編『マスコミと差別語問題』明石書店、一九八四年、一七九―二〇一頁。
- (3) 例えば、一九九五年の第四回世界女性会議で採択された行動綱領丁項「女性とメディア」を参照。

(4) 新聞メディアにおけるジェンダー表現の量的分析に関する調査研究についての、第五回目までの調査・分析の結果を著した既発表論文は、以下のとおりである。

【第一回調査(一九八五年)】

田中和子・女性と新聞メディア研究会「新聞紙面にあらわれたジェンダー——性差別表現の量的分析を中心に——」『国学院法学』第二八巻第一号、一九九〇年、八七〜一一九頁。

【第二回調査(一九九一年)】

同「新聞紙面にあらわれたジェンダー(その2)——性差別表現をめぐる一九九一年の紙面分析を中心に——」『国学院法学』第三二巻第三号、一九九四年、一七〜一七九頁。

【第三回調査(一九九六年)】

同「新聞は女性をどのように表現したえているか——『新聞紙面にあらわれたジェンダー』一九九六年調査より——」『国学院法学』第三六巻第一号、一九九八年、八五〜一五〇頁。

【第四回調査(二〇〇一年)】

同「新聞において女性はどうのように表現されているか——『新聞紙面にあらわれたジェンダー』第四回調査を中心に——」『国学院法学』第四三巻第四号、二〇〇六年、六九〜一六二頁。

【第五回調査(二〇〇六年)】

同「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在——『新聞紙面にあらわれたジェンダー』第五回調査を中心に——」『国学院法学』第四六巻第四号、二〇〇九年、五五〜一三四頁。

同「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在(その2)——第五回調査データの多変量解析と投書欄、テレビ面・ラジオ面、「少年」の用法の分析を中心に——」『国学院法学』第四七巻第三号、二〇〇九年、一〜八三頁。

同「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在(その3)——『延べ語数』と『異なり語数』の経年分析および『言語計画』の観点から——」『国学院法学』第四八巻第四号、二〇一一年、二二七〜二二二頁。

また、新聞の内容と新聞のつくり手の両面から考察した共編著として、田中和子・諸橋泰樹編著『ジェンダーからみた新聞のうら・おもて——新聞女性学入門——』現代書館、一九九三年がある。

- (5) 日本ABC協会の公査による三紙の販売部数と、日本新聞協会による総発行部数より算出。
 - (6) 日本新聞協会広告委員会『2015年全国メディア接触・評価調査』日本新聞協会、二〇一五年。
 - (7) 日本新聞協会広告委員会『2009年全国メディア接触・評価調査』日本新聞協会、二〇〇九年、および同『2011年全国メディア接触・評価調査』二〇一一年による。
 - (8) 『記者ハンドブック』第13版』共同通信社、二〇一六年、四九四頁によると、「女流↓女流名人」などの固有名詞以外は使わない」とされている。
 - 同書には、「差別語、不快用語」という章が設けられており、その中の「性差別」についての項には、「女性を特別視する表現や、男性側に対語のない女性表現は原則として使わない。女性を理由にした社会的、制度的な差別につながるよう注意する」と書かれている。
 - (9) 総務省統計局『労働力調査(基本集計)平成二八年(二〇一六年)一〇月分(速報)』による。
 - (10) W・リップマン、掛川トミ子訳『世論(上)』岩波文庫、一九八七年、一二二〜一二五頁および一三〇〜一三二頁を参照。
 - (11) 女性に対するステレオタイプ表現には、「女性初の」といった枕詞や、「女性ならではの」「女性の視点を生かした」といった表現もあるが、これらも第一回調査時からカウントしている。それらは、企業や官公庁、政治、アカデミズムなど男性の牙城だった世界に女性が初めて進出・登場する際に、ニュース価値があるから、また、最初の女性やあとに続く女性を励ます効果があるからという理由で多用されている。しかし、言説が往々にして紋切り型になりがちで、かえって「珍しさ」や「女性らしさ」が強調されてしまう逆機能を有してしまう可能性も否定できない。「ニュース価値」という発想そのものが「男性視点の発想」ともいえるよう。
- そういった実態について、朝日二〇一四年七月二〇日付け「女が生きる 男が生きる」シリーズは、「『女性初』頑張ったけれど『名ばかり活用』気づいた」という見出しで、女性の生の声にふれている。
- その記事では、「『女性初の』と言われて管理職になった女性が『女性はやっぱりだめだ』と言われないよう頑張ったが、次第に息苦しくなった」「『男性には相談できず、女性の後輩からは『目標にしている』と言われる存在で、悩んでいると思われなくなかった』と、男性からも後輩の女性からもプレッシャーをこうむった経験が吐露されていた。また、就職活動で「看板だけ女性活用を掲げる『名ばかり女性活用』の企業が多い」と感じた、将来経営者を目ざす学生は、「女性ならではの」「女性の視点を生かし

た」と女性の経営者がもてはやされるが、「男女関係ない、数字だけで評価される経営者になりたい」と語っていた。

(12) 深澤真紀「女子」『現代用語の基礎知識2016』自由国民社、二〇一六年、一一〇〇頁〜一一〇四頁を参照。

(13) 「森ガール」(森に棲んでいるような、はかどない妖精のような女子)、「山ガール」(山登りやハイキング好きの女子)、「写ガール」(写真を撮る女子)、「カメラ女子」とも呼ばれる)などのほか、「鉄子」(鉄道好きの女子)などという表現も出て来ている。本論で「歴女」にもふれたが、こういったことばの登場は、歴史、登山、写真、鉄道といった、これまで男性領域の趣味とされてきたものが、女性にもファン層を拡げた実態をあらわしているといえよう。そういう意味で、ジェンダーの垣根はかつてほどはなくなってきた。

しかしながら、同時に、マンガとアニメで知られる「ガールズ&パンツァー」などのヒットによって、「ミリタリーガール」も台頭してきている。かつての日本のアジア・太平洋戦争を肯定して「侵略戦争ではなかった」と主張したり、憲法九条を改変して武力を保持することを主張する、これまで男性のイデオロギーと目されてきた思想・心情を有するこれら若いナショナリストの女性たちの存在が懸念される。

「戦争」や「暴力」と、ジェンダー平等、ジェンダーの政治学をめぐる問題に関しては、「女性は平和的である」というステレオタイプな言説も批判されなければならない。この問題は、「常に女性が被害者」であるとは限らないという難しさをもはらんでいる。男性による女性の分断に与しない対抗的、かつ多様なジェンダーを包摂可能な新たなジェンダー理論が必要とされている。

(14) 今回の調査結果を集計中の二〇一四年一月、理化学研究所でSTAP細胞の作製に成功したという小保方晴子氏が話題になった。新聞も含め各マスメディアはこぞって彼女の割烹着ファッションや私生活などについて報じた。たとえば、朝日一月三〇日「負けん気培養、30歳大発見 STAP細胞 小保方晴子さん」という大見出しの、「かつぼう着愛用」の小見出しに続く記事には、以下のように書かれている。

「昨年、理研のユニットリーダーになった小保方さんは、自身の研究室の壁紙をピンク色、黄色とカラフルにし、米国のころから愛用しているソファを持ち込んでいる。あちこちに、『収集癖があるんです』というアニメ『ムーミン』のグッズやステッカーをはつている。実験時には白衣ではなく、祖母からもらったというかつぼう着を身につける。／研究をしていないときには『ベットのカメラの世話をしたり、買い物に行ったりと、普通ですよ』と話す。飼育場所は研究室。土日も含めた毎日の12時間以上を研究室で過ごす。「おふろのときも、デートのときも四六時中、研究のことを考えています」。そして、写真とともに添えられた絵解き

(キャラクション) は、「かつぼう着姿で作業する小保方晴子さん」というものであった。

その報道からほどなく、小保方氏の研究に対しデータ改竄の疑いが指摘され、四月に、理化学研究所が改竄のあったことを認める? 調査報告を行うと、本人による反論会見の機会がもたれたが、そこでも「紺色のワンピース姿で現れると」(読売、四月九日夕刊) などと書かれた。

武田徹は、こういつたメディアの風潮を、「キャラ (キャラクター) 偏重」と述べ、「こうしたキャラ偏重報道が調査と検証を怠らせてきた」と批判している (武田徹「メディア時評 STAP 検証を鈍らせた『キャラ偏重』」(毎日、二〇一四年四月一二日)。本研究におけるステレオタイプ表現の調査でも明らかのように、女性はメディアにおいて容姿やファッション、私生活などに特化してふれられ、「キャラクター化 (キャラ化)」される有徴的な存在なのだ。

なぜ有徴化されるのか。その原因について、朝日一四年七月九日、不定期掲載のシリーズ特集「女が生きる 男が生きる」は、「隠れた意識」だと述べている。冒頭、一月二八日の STAP 細胞成功についての記者会見における小保方氏の、フルメイク、巻髪、ゴールドの指輪、フレアスカートについて詳述したあと、「歴史に残る大発見をしたのは『若くてかわいらしい女性』だった——」と書き、記事は、我われ「誰の心にも眠る『意識の底にあるもの』を見透かすかのような記述を行う。メディアがこぞつて小保方研究員の個人に対する関心を盛り上らせたのは (朝日では「キャラ化」ということばは使っていないが、武田のことばを用いれば「キャラ化」したのは)、「性別や年齢、容姿といった属性だけで判断を左右」し「あるいは利用し、消費」し、「人々の思考に大きな影響を与えている」、こういった「隠れた意識」なのではないか、というのがこのシリーズの企画動機と趣旨である。そして、「かつぼう着」写真や人物像の報道はどこまで必要だったか、社内での議論も紹介しながら、問題提起を行っている。

また、朝日の同特集は、毎日が続いて武田徹を起用し、「…小保方氏の写真が大きく何枚も報じられ続けたのは異例だった。それは『若い女性』が科学技術の世界にいて、ああいう成果を出すことを意外に感じる、そういう文化に私たちが生きているからだ。それは根拠のない思い込みだ。戦後の日本では、男性社会で頭角を現す女性性は男つぽく、プライベートを犠牲にしているとのイメージが作られてきた。メディアもいわば共犯関係。」とのコメントを載せている。その指摘は全面的に首肯し得るものだ。

(15) 本研究会は、メディアにおける二重標準のあらわれとして、女男における「さん」と「氏」の敬称使い分けについて、五年おきの調査とはまた別に、新聞社のデータベースを用いた調査・分析を行っており、次の論文がある。

田中和子・女性と新聞メディア研究会「新聞はジェンダーをどのように表現してきたか——定型化されたダブルスタンダード表

現としての『さん』と『氏』の使い分けをめぐって——『国学院法学』第五〇巻第三号、二〇一二年、三五〜一三〇頁。
 本論文は、ノーベル平和賞を受賞したアウンサンスーチーの敬称と、同賞を受けたその他の女性男性たちの敬称のつけられ方について、量的に分析したものである。

(16) 先に、毎日二〇一四年四月一二日のコメントで紹介した武田徹は、小保方理化学研究所ユニットリーダーの研究が、調査報告によつて「不正」と認定されると、これまで『「かつぼう着」を来た小保方「さん」の愛すべきキャラクターを紹介してきた』各紙誌が、「小保方氏」という呼称になった。『落差』についても記している。

「さん」は親近感、柔らかさをイメージさせ、女性に使われるケースが多いことを本研究でも実証してきたが、公的な裁断が下されると途端に、「氏」となったわけである。この場合は、男性と同様の「公人」に「格上げ」されるとともに、むしろ、他人行儀^レな、突き放した、ドライな印象を持たせることとなった。

(17) なお、「さん」と「氏」の女男別使い分けにみるダブルスタンダード表現だけでなく、本研究が注視してきたダブルスタンダードのもう一つ象徴的な表現事例として、男性は姓ないし姓名で表記されるのに対し、女性は姓を示されずに名のみで表記されるというものがある。たとえば、二〇一六年に行われた米大統領選挙で、男性の候補者はフルネーム「ドナルド・トランプ」ないしは姓「トランプ」で呼ばれるのに対し、女性の候補者は「ヒラリー」と名のみで呼ばれることがしばしばであった。

本研究会は、男性が姓または姓名、女性が名のみで表記される二重規準表現についても、五年おきの調査とは別に新聞社のデータベースによる調査・分析を行っている。

田中和子・女性と新聞メディア研究会「新聞にあらわれたダブルスタンダード表現をめぐって——クリントン・オバマ報道の量的分析を中心に——」『国学院法学』第五二巻第四号、二〇一五年、一六五〜二六五頁。

本論文は、米大統領選挙および予備選挙における、ヒラリー・クリントンとバラク・オバマ、およびビル・クリントンの姓名の扱いについて量的分析を行ったものである。

なお、今回の調査では、女性を意識的に下の名のみであらわしているもの、男性を意識的に下の名のみであらわしているものをカウントして、両者の差異をみてみた(「イチロー」「サブロー」「マツコ」など、有名人の名が固有名詞のように用いられている場合は除く)。

その結果、女性を名のみで扱った語(延べ語数)は、朝日一六九件、毎日六五件、読売二〇件の三紙合計二五四件であった。そ

れに対して男性を名のみで扱った語(延べ語数)は朝日一三件、毎日八六件、読売四五件の、合計二四四件となった。三紙合計すると女男とも量的にはほとんど変わりがなかったが、朝日で、女性を下の名で扱う量が、他紙に比べて群を抜いていた。

あげられた名は、女男を問わずテレビドラマや小説、史実などに登場する主人公や人物の名が大多数を占め(「糸子」「エリス」「久美」「由加子」「りさ子」「善作」「清盛」など)、また歴史的な作家・芸術家なども名で表示されることが多い(「白秋」「鷗外」「子規」「啄木」「光琳」「菊五郎」など)。そのため紙面分野は「文化・メディア」が最も多くなっていた。このほか、登山家の「(山野井)妙子」と夫の「泰史」、ゴルフの「(石川)遼」、レスリングの浜口京子の父「(浜口)平吾」と「京子」などの名が目立った。また芸能人・タレントでは、「(ビート)たけし」「(明石家)さんま」がみられたが、数件にとどまった。また、各紙とも、実話記事において、登場人物を「ヒトミ」「ナナコ」「ヒロシ」などと、仮名で扱うものもみられた。

(18) それぞれ、日本新聞協会、日本民間放送連盟、日本放送協会(NHK)の調べによる。

(19) 内閣府男女共同参画局「第四次男女共同参画計画」二〇一五年一月二十五日決定。

(20) 『男女共同参画白書 平成28年版』内閣府男女共同参画局、二〇一六年。

付録

■カウントに当たっての取り決め

◇朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の二〇一一年一月一日から一五日までの朝刊・夕刊を対象とした。

◇投稿のうち、いわゆる投書欄、家庭面、テレビ・ラジオ面などへの投書は、コーディングしてカウントしてあるが、「記事分析」の対象からは毎回除外してある。

◇これらの投稿のうち、川柳や小咄などの作品そのものは、連載小説と同様創作作品と考え、カウントの対象としなかった(ただし、それらの作品を選評した文章は対象とした)。

◇「天皇」「皇后」などの皇族に対する敬称「さま」および皇族の下の名(たとえば「雅子さま」)は対象としなかった。

◇女性冠詞「女王」と対になる「王」は対象としなかった(「王子」「皇太子」「王女」「皇太子妃」などは「他者との関係をあらわす語」としてカウント対象とした)。

◇女性冠詞「女流」については、組織等が固有の名称として定めている場合(「女流文学賞」「女流棋士」「女流名人」など)は除い

た。

◇「他者との関係をあらわす語」のうち「専業主婦」は「主婦」に、「従軍慰安婦」は「慰安婦」に統一した。

◇「ステレオタイプ表現」の中で、女性と男性をともに固定化して形容している文章は、「女性ステレオタイプ表現」「男性ステレオタイプ表現」の双方にカウントした。

◇「○○女子」「○○男子」のように、語の末尾に「女子」や「男子」をつける、これまで比較の見当たらなかった表現は、ステレオタイプ表現に算入した。

◇「氏」の敬称に、見出しや記事によつては、「三氏」や「両氏」、あるいは「氏は」といったように名前を記さずに略すケースがみられるが、これらは本文記事を読んで、たとえば「三氏」とある場合は「A氏」「B氏」「C氏」と解釈し、「氏」の敬称が三件と
いうようにカウントした。

■ 分類コード表

I 性の強調

女性冠詞	女〇〇 女性〇〇 女子〇〇等	11	女優 女性職員 女子高生 女流作家等
男性冠詞	男〇〇 男性〇〇 男子〇〇等	11M	男児 男性社員 男子生徒 男流文学等
女性役割	女性の性を含む職業語	121	OL ヒロイン ホステス ギャル 慰安婦 ミス〇〇 (スナックの) ママ ミスユニバース 等
	他者との関係での女性語 「夫人」内訳	122 1221 1222 1223 1224 1225	(夫人除) 主婦 皇后 (さま) 王女 奥さん 嫁 姑 姫 家内 妃 王妃 等 ①妻の名+「夫人」 ②「夫人」単独 ③夫の肩書き+「夫人」 ④夫の姓+「夫人」 ⑤その他
男性役割	男性の性を含む職業語 「サラリーマン」内訳	121M 121M1 121M2 121M3 121M4	(サラリーマン除) スポークスマン OB ヒーロー ビジネスマン 侍 英雄 等 ①明らかに男性を意味する用法 ②女男を含め勤め人一般をさす用法 ③曖昧な用法 ④職業の代表として挙げる (「サラリーマン」「自営業」など) 用法
	他者との関係での男性語	122M	皇太子 王 王子 主人 亭主 だんな 子息 等 (「店の主人」等除)
	男性の就く特殊な職業	123M	女形
女性ステレオタイプ表現	容姿 服装 年齢など外見	1311	長い髪 あどけない表情 赤いスーツで登壇 美人記者 等
	心理 行動 役割など固定化	1312	ダイエットに関心のある女性 女性らしいきめ細やかさ 女の執念 等
	その他女性のステレオタイプ	1313	女 3 人のバトル 女性や子供たちをターゲットに 紅一点 等
母親ステレオタイプ表現	女性は母親になるものという前提	1321	未来のママへの朗報 等
	心理 行動 役割など固定化	1322	母の包容力 女手一つで育て上げた 肝っ玉かあっさん 聖母 等
	その他母親のステレオタイプ	1323	家では子供たちが帰りを待つ 2 男 1 女の母親 等
主婦ステレオタイプ表現	主婦の役割に関する記述	133	家事の手を抜きたいのは誰も同じ 買い物帰りの主婦 等
その他女性ステレオタイプ	性的存在 妻役割 嫁姑 等	134	ただよう色気 献身的な妻 嫁と姑の対立はいずこも同じ 女房役の官房長官 等
男性ステレオタイプ表現	容姿 服装 年齢など外見	1311M	イケメン男性 精悍な顔立ち 皮ジャンを粋に着こなし 等
	心理 行動 役割など固定化	1312M	男立き 腕っ節の強さが売り 男らしく 潔い態度で 男の性欲は… 等
	その他男性のステレオタイプ	1313M	酒豪ぶりも父親譲り 等
父親ステレオタイプ表現	男性は父親になるものという前提	1321M	将来妻や子どもを養うためにも 等
	心理 行動 役割など固定化	1322M	たくましい父親の背を見て 雷オヤジ 大工仕事はお手のもの 等
	その他父親のステレオタイプ	1323M	このときばかりは父親の顔に戻った 等

127 新聞紙面にあらわれたジェンダー（田中和子ほか）

夫ステレオタイプ表現	夫の役割に関する記述	133M	カミさんが怖くて早く帰る 愛妻家の夫等
その他男性ステレオタイプ	性的存在 その他	134M	男の色気がただよ 男の勲章 等

II 女性隠し

女性が代表	「○Aさん方」のAが女性	211	田中美代子さん宅で火事があり 上野やよひさん一家
	「○Aさんの長女」のAが女性	212	関戸綾さんの次男澄生君 橋場由美さんの実子
男性が代表	「○Aさん方」のAが男性	211M	明石健吾方に強盗が入り 等
	「○Aさんの長女」のAが男性	212M	竹内達志さんの長女裕美さん 等
男性に従属	男性の名のあとに女性	221	～夫人 ～の妻 ～の子 ～夫婦 等 (子に従属する～の母は除く)
女性に従属	女性の名のあとに男性	221M	～の夫 ～の子 ～夫婦 等 (子に従属する～の父は除く)
男性標準	会社員	231	①明らかに男性を意味する用法
		232	②女男を含め勤め人一般をさす用法
		234	③曖昧な表現
		235	④職業の代表として挙げる（「会社員」「公務員」など）用法
		241	①明らかに男子を意味する用法
	少年・青年	242	②女子男子を含め未成年をさす用法
		243	③その他
	少年少女	244	少年（男）と少女（女）をセットで記述する用法
	少女	245	少女のみ単独使用
	女性を内数扱い	25	～人のうち女性○人
男性を内数扱い	25M	～人のうち男性○人	
女性を意識的に下の名だけで扱う	26	真紀子大臣 藍 愛ちゃん 鈴香被告	
男性を意識的に下の名だけで扱う	26M	イチロー たけし チンパイちゃん 伸夫被告	
その他 女性の性が含まれる語	27	老女 等	
その他 男性の性が含まれる語	27M	弟子 師弟 父兄 等	
その他 人以外で女性の性を含有	28	空母 母校 母港 母語 母国 帰国子女 処女航海 大奥	

III ダブルスタンダード

二重規準表現	同一記事内で男性が地位や業績で扱われているのに女性はそうでない場合	31	男性の大統領候補者は政策に言及し、女性の大統領候補者には服装についてふれる 等
	同一記事内で女性が地位や業績で扱われているのに男性はそうでない場合	31M	Aさん（女性）は東大卒、Bさん（男性）は学歴に言及なし 等
同一記事中の「さん」と「氏」	同一記事で別敬称		死亡記事の敬称は、「D」を頭につけて入力し、欄外に「死亡記事」と入れる
	女性「さん」男性「氏」	321	

	女性「女史」男性「氏」	322	
	女性「ちゃん」男性「君」	323	
	その他 女性と男性別敬称	324	
	同一記事で同敬称		死亡記事は「D」を頭につけて入力する
	女性「氏」男性「氏」	325	
	女性「さん」男性「さん」	326	
	女性「ちゃん」男性「ちゃん」	327	
	その他 女性と男性同一敬称	328	
単独使用の「さん」「氏」	女性の敬称		死亡記事は「D」を頭につけて入力する
	氏	331	
	女史	332	
	さん	333	
	ちゃん	334	
	その他	335	
	男性の敬称		死亡記事は「D」を頭につけて入力する
	氏	331M	
	さん	333M	
	君	336M	
	ちゃん	334M	
	その他	335M	
その他	同性内で別敬称	341	女性「さん」+女性「氏」、女性「さん」+女性「ちゃん」等
	同性内別敬称&異性内別敬称	342	女性「さん」+女性「氏」+男性「さん」+男性「氏」等
	女性ニックネーム	35	柔ちゃん 花子さん(仮名) 等
	男性ニックネーム	35M	名無しさん ミスター巨人 ヒゲさん 等
	性別不明	36	Aさん T・Kさん 等

事例：

山ガール 小沢ガール 121
 女子力 女子会 1313
 ママ友 1323
 大黒柱 1322Mほか
 マツコ 35M
 さんま たけし 鶴瓶 26M(下の名)
 「王」は取らない(王女 王子 皇太子 皇太子妃は取る)
 天皇・皇后は取らない
 皇族の敬称=「さま」取らない(雅子さま 愛子さま)
 川柳の作品は取らない/選評文は取る

その他：

ラジオ面・テレビ面は「R」を頭につけて入力
 投書(投書欄、家庭面等の)は「T」を頭につけて入力
 ラ・テ面の投書は「RT」を頭につけて入力

■掲載紙面分類表

* 朝日・毎日・読売各紙が独自につけている紙面名称(紙面上肩に書いてある面名)と掲載ページを入力したほか、各紙で面名称が異なるため、分析用に、共通の紙面名をふって入力を行った。

* 紙面下部に小説や囲碁欄などがあっても、「紙面名」で扱った。

* 「特集」は、原則として内容で判断した。

* 「東日本大震災」ページ(各地の消息・復興状況などがレギュラーページになったもの等)は、「社会」とした。

【中分類】

- 1面 ↓ 1面
 - 総合、政治、オピニオン、社説、投書、夕刊2面 ↓ 総合・政治
 - 国際、総合(国際のみ扱っている面) ↓ 国際
 - 経済、証券、株式、商況、金融情報、新製品情報 ↓ 経済
 - 科学 ↓ 科学
 - 教育、子ども向け ↓ 教育
 - 暮らし、家庭、生活、料理、医療 ↓ 生活
 - 文化面、レジャー情報、芸能、エンターテインメント、追悼面、(ラテ面・週間テレビ面以外での) テレビ番組特集、メディア、読書 ↓ 文化・メディア
 - 東京、首都圏版、都民版 ↓ 地域
 - スポーツ ↓ スポーツ
 - 社会、第2社会、第3社会 ↓ 社会
 - ラジオ面、週間ラジオ面(番組紹介含む) ↓ ラジオ・テレビ
 - テレビ面(「テレビ面」での番組紹介・番組解説含む)、週間テレビ面(番組紹介含む) ↓ ラジオ・テレビ
- *なお、本稿では「ラジオ・テレビ」面は分析対象から除外している。また、付録既出の「カウントにあたっての取り決め」にも記

したように、「総合・政治」や「生活」などに掲載されている投書も分析対象から外してある。

【大分類】

- 硬派系(政治・経済系)……1面、総合・政治、国際、経済、科学
- 軟派系(生活・文化系)……教育、生活、文化・メディア、地域、スポーツ
- 社会系……社会
- ラジオ・テレビ面……ラジオ・テレビ

*共同執筆者

田中和子(国学院大学法学部教員)、諸橋泰樹(フェリス女学院大学文学部教員)、須藤典子(栃木県立のざわ特別支援学校教諭)